
憑依者ユーノの物語

妄想人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憑依者ユーノの物語

【Nコード】

N2841Z

【作者名】

妄想人

【あらすじ】

この物語はもしユーノが憑依者だったらどうなるのか？そんな物語。

ーある決まった物語に俺が介入する時、その物語は変わりだす。

／／／／／／／／／／／／／／／／

はつきり言って作者の妄想そして文才ないです。それでもよければどうぞ。

目次（前書き）

よければお願いします。

目次

俺は何故か何もない白い空間にいる。前、下、右、左、永遠に続いている。訳がわからないから考えようとしたら突然

「やっと目覚めましたね」 っと目の前に女が現れた！

「あんたが、俺をここに？」

いきなり現れた事はとりあえずスルーして今一番の疑問を聞いたなら「その通りです！」

やたら自信ありがちに答えて来た。

「……………変質者？」

「違いますよ！？何故いきなりそうなるんですか！」

「こんな意味わかんねえ空間連れ込んで位だし、それを自信ありがちに言われるとな。」

軽くふざけた感じで、バカかという目で目の前にいる女に言った。た。

「ああー！絶対今かなり、怪しい人だと思いましたね！」 なくんて言ってきやがた。それ以外なにあんだよ全く。

「じゃあ、あんたは何者なんだよ？」

事と次第によるならシバくぞっと俺は心の中で毒をはいていた。

「聞いて驚きなさい！！私は、～神～です！」

……俺はその答えを聞いて頭を抱えだした。

「フッフッフ、驚いているようですね？」

確かに驚いている。その理由は

「誰か助けて下さい！目の前に頭を相当ケガをしている女性がいま
す！！」

彼女の頭はどうなっているかについて。

「なっ！こっち真面目に答えているのに、何て事言うんですか！」

「やかましい！完全に痛い人発言にしか聞こえないんだよ！」

「だから、本当なんですよ！」

「もういいから、病院行け！」

数十分その話は続いた。

「俺が死んだ？」

からかうのをやめ真面目に移ったと思ったらいきなり死亡宣告をされた。

「はい、そうなんですけどこちらの不注意であなたを間違えて死な
せてしまったんです。」

申し訳なさそうに言ってきた。

「ふーん、そうなんだ。」

俺は興味がないように答えた。

「あの、怒らないんですか？」

「人はいつかは死ぬ。それが遅かれ早かれ変わらないさ。」

「変わってますね。」

「ほっとけ。」

「話が変わるのですが、あなたにはもう一度人生やり直してもらいます。」

「何故に？」

「間違いで死んでしまった人にはそうなるようになっていくんです。」

それはどうかとおもうぞ？

そして俺はある事にきずいたそれは

「俺の体ないんだけど？」

そう俺は事故で死んでしまい原型を留めていない体になってしまっている。

「大丈夫です。あなたが好きなキャラになることができます。それにチート能力も貰えますよ！」

……月並みの展開です。そして俺の中で答えも決まってきた。

「リリカルなのはのユーノで、能力はいろんなキャラと修行しながら貰っていく。」

「えっ何ですか！普通カッコイイ主人公でしょう！それに何で修行なんかやるんですか、チート能力貰って無双すればいいじゃないですか！？」

質問多い神だなく理由話すしかないか。

「まず何故ユーノかという」と
「というと？」

興味深々と聞いてきて答えた。

「ニートになれるからだ!!」

「はあ?!」

「ストーリーは知らんが将来本の整理だけでやっていける。」

「格好悪!てか原作知らないんですか!!」

「ああ、全く知らん!」

「そんなので大丈夫ですか？」

そんな装備で大丈夫かのごとく聞いてくる。

「問題ないぜ。」

「はあ、わかりました。で、修行の理由は? (どうせくだらない理由な気がしますけどね)」

「その人達の覚悟、誇りを知り俺がそれを背負っていくができるか、だ。」

急に目の前の男の雰囲気が変わった。さっきまでのふざけた要素がまるで嘘かのようにまた男は語りだした。

「ただ能力を貰うだけじゃ意味がない。それを使う覚悟がなければ、その力に吞まれ破滅を生むだけだ」

まだ男は語る。

「なら俺はその使う意味をその人達の元で、修行をし誇りを持って受け継いでいきたいんだ。」

私は啞然としてしまった。理由がスゴいとかそう言う問題じゃない。その存在感のすごさに思わず魅入ってしまった。

「なくんてな。どうだった俺の演技凄かったろ？本当はただキャラと話しがら貰えれいいだけさ。」

また雰囲気に戻った。本当に訳のわからない変わった人ですね。

「んじゃ、体頂戴。後、修行の人達は――でよろしく。」

「チートの塊ですね。まあいいですけどね。ではすぐに修行の場所にワープさせるので出たい時は言ってお下さい。」

「了解。さて行きますか！」

どうせなら楽しい物語にしていきたいな。まっ作者次第か？

ー開始直後にメタ発言は止めて下さいー

おっと注意されちゃったぜ。まあ、俺も頑張ってくとしますか！

目次（後書き）

反省会

「全くこんな調子で大丈夫なのか。続けていけるか不安だぜ。」
「本当に申し訳ない。」

「まあ、それは置いといて次回タイトルは【やっと始まった物語】だ。よろしく。」

「流すな！そして勝手に決めるな！」

「またいつか。」

「聞けよボケ！」

やっと始まった物語（前書き）

色々とカオスです。

やっと始まった物語

おっす俺、憑依者ユーノ。前振り通りにワクワクしてるところだ。
何故かというと

「遺跡の中で見事に罠に掛かり、後ろから追って来るゴーレムから
必死に逃げてるからだ!!」

「おいユーノ! 何いきなり大声出したよ! びっくりするだろうが
!」

開始早々にハードな展開になっている状況です。

さて何故俺がここいるのか、説明しよう!! ……スイマセン少しテ
ンション上がってます。

ゴホンでは、話します。俺はご察してる通りに修行が終わり、そし
て今はスクライア一族のみんなと一緒に各地を転々としながら遺跡
を回っています。

えっ、修行の内容と出会いはどんな感じだったんですか?

その質問はまた後ほどお願いします。

そして今になる訳なのですがどうか

「元は言えば、コウキが勝手に罠を発動したせいだろうが!」

「うっ…」

「しかもわざわざ【押してね♪】何て、書いてある怪しさ全開のボ
タンを押すバカが何処にいる!」

「だってやけに明るかったから押せば、美女が出て来てウハウハと思いい、つまり何が言いたいのかと言うと、俺【という名の変態】はここにいる！！と示したかった。」

「スケエエエエエエエエイス！」

「グハッ……。何しやがんだユーノ！今俺、最高に格好いいセリフ言ったのに、全力で殴ることねえだろ！！」

「全てにおいて台無しだボケ！というかハ○オに謝れ、ついでのフアンにも謝っとけ！今お前は間違いなく敵に回したからな！！」

何てくだらないやり取りをしている所です。※注意 一応まだ走っています。

後、この人の紹介がまだでした。

名前はコウキ・スクライア。年齢は二十歳以上で、身長は170位あり、そんなに顔も悪くないのだが、ご覧の通り残念な人です。

ついでに俺の現在の年齢は九才という設定です。やろうと思えば、

年齢と身長など、いとも簡単に

「ユーノ！そろそろ何とかしないとヤバイぞ！」

……コウキ少しは空気読め。というか

「お前がなんとかしろよ。人に押し付けんなこの他力本願。」

「だって、魔法使えない状態になってんだからしょうがないじゃん！」

何故かという罨が発動したと同時に魔法を封じる罨まで発動したため、現在使えないのである。

本当めんどくさく二重の意味でな。

「本当頼む！俺もう限界なんだ！」

「気持ち悪いこと言うなゴラァ！貴様を生け贄にすんぞ！」

「すまん！でも、本当に体力の限界なんだよー。」

全くだい大人がだらしない。まあしょうがないからそろそろ助けるか。

俺は立ち止まりそして俺の後ろにいるコウキもそれを見守っている。

ドツドツドツドツ！と段々、ニメートル近くあるゴーレムが迫って来た。そして俺は腰に付けてあった‘あるもの’を取り出した。

やがてゴーレムが目の前まで来てそのデカイ拳を振るった。

「ユーノ！」

心配すんなよコウキ、余裕だからさ。

俺はその拳を後ろに紙一重でよけると同時に俺の手に握っていた‘あるもの’を当てそして響いた。

キイイイイイイイン…

俺はその‘音角’を自分の額までもついき呟いた。

「歌舞鬼…」

その直後にユーノの周りには花風吹が舞い散り、そして左手を開き前に出し、同じく右手を開き顔の横まで持っていた瞬間に

「~~~~ン、ハッ！」

その花風吹が散った。その先にいたのは、左右非対称の角をはやし、緑色と赤色をモチーフにした“鬼”を連想させる戦士がいた。

そして後にいるコウキが俺に言った。

「なんで、そんなに身長まで伸びんだよ。しかも俺より高い！」

……こいつから清めてやろうかマジで？

「さて、無視して始めますか？ L e t , s R o c k 【派手に行くぜ】
！」

ゴーレムが今度は右ストレートをかまして来たので横に避けると同時に一気に懐に入り

「ウオッリゃ！」

左アッパーを喰らわせ、そのまま一回転をし右カカと落としを決め、相手を怯ませた。

まだ俺の攻撃は終わらない、今度は腰に付けてあった【音撃棒・烈翠】を両手に構えた。

「ハアアアアア！」

声を上げると烈翠の先端に付いている鬼石に翡翠色の炎が灯しび、そして烈翠をゴーレムに向けて振ると同時に炎が相手に向かって放たれた。

「!!」

ゴーレムは危険を感じ、両手でその攻撃を防いだ。だが、その両手はボロボロでいつ壊れてもおかしくない。

そして歌舞鬼はゴーレムに接近し

「ハッ！セイ！」

その両手を破壊した。

「こいつは、オマケだ！」

勢いよく飛び上がり、ドロップキックをお見舞いした。

ゴーレムは倒れてしまいが、まだ動いてる上に腕まで再生しつつあるようだ。

「これで、終わりにする！」

俺は装備帯から、三つの火の玉が追い合っている絵柄の【音撃鼓・舞桜】をゴーレムの胸に押し付けた。舞桜が回転しながら大きく展開した。

烈翠を高く構える。そして、先端部の鬼石が煌めいた。

「音撃打・業火絢爛の型！！」

音撃打の型の名を叫び、清めの音を叩き込む！

「ハアアアアア！」ダンダンダンダンとなんでも叩き込むその音は、聞くもの全てを魅力する。まさに【清めの音】だ。そして

「ハアアアアア！ゼエヤ！！」

その美しき演奏を終わりを迎えゴーレムが爆発を起こし舞い散った。

俺は両手の烈翠をクルクル回しながら腰に戻し変身をといた。

「なかなか楽しかったぜ？」

ニヒルに笑い終わりを告げた。

—————

「いやゝ難なく終わっいで！」

「んな訳ねえだろ！コウキのせいで俺が余計な使ちまったろうが！」

「だからって蹴ることねえだろよ。それに戦ってる時、結構ノリノリだったじゃん。」

「それはそれ、これはこれってやつだ。」

「ヒドくないか?!」

俺があの後、ゴーレムを倒したら魔法の罠も消えて俺がワープで、外に出て今は船の中だ。あのゴーレムが罠の元だったらしいが、結局は一石二鳥で終了だ。

後、何故俺達は船の中にいるのかというところの遺跡調査は、その奥にあるロストギアの調査とその回収だ。本当は楽に終わるはずがどっかの馬鹿のせいで時間が掛かったけどな。

それでロストギアは無事に回収し管理局に送り届けるところだ。

えっ、そんなもの持っていなかった? そりゃそうさ、別の人に預けてたからな。

「あ、ユーノさくん探しましたよ。」

「おっ、悪いな。この馬鹿のせいで迷惑掛けた上に、面倒に巻き込んでしまった。」

「いえいえ、私達もなかなか楽しかったですから、そんなに謝らくても大丈夫です。」

そう、俺達は多人数来ていたのだ。

だが、罠のせいでトラブルになりその時に、ロストギアを渡し俺達は、囨になったのだ。

「てかその敬語やめないか? あんたの方が年上だぜ?」

「いえいえ、気にしないで下さい。後、この子をお返ししますね。」

『ユーノ、無事そうですね。』

「おっ、レイ♪お疲れさん。悪いなお前にまで、面倒事を押し付けて」

『気にしないで下さい。それにユーノが無事で良かったです。』

「そっか、ありがとな心配してくれて。」

今話しているのは、俺の相棒でデバイスのレイジングハートだ。長い名前だから俺は愛称でレイって読んでる。

レイを預けていたのは、無事に遺跡を脱出が出来るルートを組み込んでいたから彼女達に預けていた。

「いつ見てもお前らの愛は深いな。」

今まで黙っていたコウキが急に話した。

『コウキ、からかわないで下さい!』

どこか恥ずかしげにレイが反論した。

なんでだ?……そうか!

Saidコウキ

今までユーノにからかわれたので、レイジングハートを標的にしたのだが、ユーノが

「レイ!遠慮なんかすることは無い!俺はお前の事を愛しているぞ!!」

愛の告白を始めました。

『えっ!ちょ!ユ、ユ、ユーノ急にどうしたのですか!?!』

ほら盛大にテンパってるぞ?まあ、俺も聞いたしさっき来た彼女なんて顔が真っ赤になってみてるしな。

「お前は自分が人ではないからと俺に遠慮しているのはわかる!だがそんなの関係ない、俺はお前という“存在”を愛しているんだ!」

ユーノお前色々とスゴいぞ。顔まで決め顔になっているが、あれは

気づいてないな。お前、軽く女落せるぞ？

『い、いいのですかユーノ？私があなを愛しても？』

「ああ！俺は全てを受け入れる！それが何者だろうと関係ない！俺は愛し続ける！！！！」

『ユーノ！！』

「レイ！」

ユーノがレイジングハートを抱きしめ【？】愛の劇場は終わった。

天然バカップルらか貴様らは！

見ろそのばいた少女がオーバーヒートして倒れているぞ！

ユーノ、時々お前がボケなのかツツコミなのかわからなくなるぞ。

—————

Saidユーノ

ハッハッハッ！盛大に恥ずかかった。

「そう言えば、回収したロストギアはどんな能力を持ってるんだ？」
コウキが俺に質問してきた。ちなみにそこにいた少女は、放心状態になったので退場しました。

「ああ、ジュエルシードって言って願えば、なんでも叶うらしいぞ？」

「へえー夢のようなアイテムだな。」

「なんだ、お前なら飛びついて欲しいって言うかと思ったのに。」

「自分の願い位自分で叶えるよ。」

たまにはいい事言うな。

「相手を落としたという充実感をノギヤあ！」

感動を返してくれホントマジで。

「ボディーブローはきついぞー。」

「うるさい。それに願い事をしない方がいい。」

「何でだよ？」

「その願いを歪んだ形にしてしまうんだ。」

「歪んだ形、例えば？」

「お前がモテたいといと願えば…」

「願えば何だよ？」

俺は心底嬉しい顔して告げた。

「ヤンデレハーレムの出来上がり♪」

「いーやーだー！」

…コウキってオモシロっ！↑どこのリングゴ死神だよ。

数時間後

「なあ、ユーノ？」

「何だ？」

「船、揺れてないか？」

「そうだ【ドオオオオン】！！」

これは爆発か！！マズいジュエルシールドに何かあったのか！？

「おい、レイ起きろ！」

『何でしょうか旦那様！』

「あれ！まだ起きてないのか！！」

レイはさっきのやり取りでスリープモードに入っていたがまだ完全ではないようだ。

「とりあえず行こうぜユーノ！」

「ああ！」

頼むから面倒な展開はよしてくれよ。

どうやらエンジン室が何者かの手によって爆破されたい。今はそれよりジュエルシードだ！

「着いた！」

俺達はジュエルシードが保管されている部屋にたどり着き入った。

「「『！！』」」

ジュエルシードが入っている箱を全身黒ずくめのヤツが持っている。やる。

「これは頂く…。」

声からして男か？だがそうはいくか！

俺は瞬時に相手の前に跳んだ。

「！！」

相手は驚き拳を上げた。だが俺はその腕を掴み、地面に着地しながらその腕を回し相手は宙に浮かんだ。そして俺はクルリと回り左足で蹴りを喰らわせた。

「グハッ！」

男はそのまま壁に叩きつけられジュエルシードもばらまかれた。

「アイツ素手でも強いんだな。」

『さすがユーノですね。』

コウキは感心しレイは当たり前前の事だという感じで言っていた。

「フッフッフッ。」

倒れている男は急に笑い出した。

「何が可笑しい？」

グラッ！

何だ船が揺れ出した！

『ユーノ！』

「何だレイ！」

『すぐそこまで、次元の嵐が近づいています！！』

「何！」

この展開の悪さまさか

「そう俺が全部起こさてた。」

黒男が話すと同時にヤツを囲むように穴が空いた。

マズいヤツの周りにはジュエルシードが！

「追えるものなら追いついて来い。」

そしてヤツは落ちて行きジュエルシードもある星にばらまかれるように落ちていた。

「クソっ！」

俺は穴に向かい走り出したが

「待てよユーノ！」

「どけコウキ！俺はジュエルシードを追う！」

コウキに阻まれた。

「お前わかってんのかよ、こんな次元のど真ん中に飛び込むつもりか？自殺行為だよ！？」

『その通りですユーノ！今回は無理です。』

二人とも本気で心配してくれてるだが

「無理だ。」

「何だよ！」

「俺はある星にジュエルシールドが落ちていくのを見た！ほっとけるかよ！」

「そんなの管理局に任せれば…。」

「いや、あの組織がすぐに動くとは思えない。それにジュエルシールドは一步間違えば、星が消えるかもしれないほど危険なんだ！」

「…どうしても行くのか？」

「ああ…。」

「なら俺も…。」

「駄目だ。」

「何だよ！俺も着いていた方が！」

ああ、確かに心強いよ。でもな

「あんたにはスクライア一族のみんなに俺が無事だという報告してほしいんだ。」

きっとみんなは俺の事を心配してくるはずだ。だから、連絡係が必要なのだ。

「…ユーノ約束しろよ。」

「必ず帰って来い」だろ？」

「ああ…。」

そしてコウキは道をあげ、俺は進んだ。

「悪いけどレイ、付き合ってもらおうぞ。」

『わかりました。ですが無理は許しません！』

「善処する。」

そして俺は穴の前に立った。

「ユーノ本当に本当に無事でいろそして帰って来いよ！！」

コウキが力いっぱいに叫んだ。

俺は振り向かず右腕を横に出しサムズアップをした。

「行ってきます。」

そして俺は穴に飛び込んだ。

S a i d コウキ

「行ってこい、ユーノ・スクライア。帰ってきたら元気よく笑顔で、ただいまって言えよ？俺達はお前の事が好きなんだからな！！」
俺は聞こえるはずがないのに涙をほんのり流しながら叫んでいた。

やっと始まった物語（後書き）

反省会

「すごくいきなりすぎないか？」

「自分はこれが限界何です。」

「次回続くのかよけんな調子で？」

「頑張ってみます。」

「あっそ、そして次回タイトルは【旅行は計画的】だ。」

「だから勝手に決めるなプレッシャーかけんな！」

「良ければ読んでくれよな〜！」

「お前は話を聞くことを覚えろ！」

旅行は計画的（前書き）

奇跡的に連続で投稿できています。

旅行は計画的

毎度！憑依者ユーノです。

現在の俺の状況を説明します。

「次元の中で、右も左もわからいつまり迷子です！」

『カッコ悪いですよ、ユーノ。さっきまで、あんにに啖呵をきってきたのに。』

「やめてくれ。俺も気にしてるから…。」

そうあんなに前回格好良く決めたのに今はこのザマですハイ。

『普通、生身で次元の嵐に突っ込んでそれを破壊しますか？』

「いやだって降りたら目の前あったから邪魔だし、それに避けてたらコウキ達にあたるだろ？」

何事もなかったように淡々と話す俺だが、二話めですでに人外コースにはしっています。

『というか、さっきの次元の嵐を破壊したあの“剣”は何ですか？』

「ああ、あれは…」

ここで回想タ〜イム♪……すいません、真面目にやらせて頂きます。

回想

俺が降りたさきには、次元の嵐が近いてきていた。

「クソっ！もうここまで来たのか！！」

『どうするんですかユーノ！？』

どうする。俺はこのまま転移で避ける事が出来るが、上のコウキ達があぶねえ。

いや、それよりも！

「嵐程度が我^{オレ}の行く手を邪魔すんじゃないやねえよ！この自然災害如きがああああ！！」

…どこかの黄金王の真似をしてみました。

「来い！【乗離剣エア】！！」

そして俺はその黄金王の最強とされる宝具を取り出し魔力を流し込み、エアの刀身が回転を始める。

その剣から放たれる魔力と力は誰もが息を呑み、そして絶対なる恐怖を与えると云っても過言ではないほど「存在感」を出している。

ちなみに俺の魔力は無限です。修行をしたらそうなり、体の作りもサーヴァントよりも格段上になっているので、真名開放も問題ないのだ。

あえて言わせてもらおうとチート乙ですね。

やがてエアの柄の部分からなにかが放出し、回転速度も上がっている。

そして我^{オレ}は目の前の災害を睨みながら、真名開放を腕を振り絞り

「【天地乗離す】（エヌマ）…」

さらに回転を上げるエアを我^{オレ}は槍を投げるような勢いで

「【…開闢の星^{エリシユ}】！！！！」

その技を放った。

回想終了

「あの後は、大変だったな。あまりにも威力がデカ過ぎて俺まで、吹き飛ばされたからな。」

『全くユーノはスゴいのか馬鹿なのかわかりませんね。』
そして今になるわけだ。

さすがに自重しとくべきだと反省はしてます。

『それよりユーノ。』

こんな派手な事をして大丈夫何ですか？間違いなく管理局に目を付けられますよ？』

突然レイが質問してきた。何故かと言うとさっき放った一撃は、次元の嵐さえいとも簡単に消し去ったのだ。これは、間違いなくロストギアに判定されて没収だ。

だが俺に抜け目はない！

「何故なら俺は、乗離剣エアさえ完全に防ぐ結界を張っていたのだ！」

『えっ！あの一撃を防ぐ結界を張っていたのですか？！』

「可笑しいとは思わないかレイ？次元の嵐を破壊する一撃を放っているのに、次元の大被害はなかったろ？」

『！！』

気づいたか？

そう、次元の嵐を凌ぐほどの一撃ならば何かしらの次元の歪みが生まれるはずだか、それがどこにも現れていないのだ。

これは、完全に防ぎきた証拠だ。

…吹き飛ばされたのは、忘れて下さい。

『ユーノ？』

「何だレイ？」

『アナタハナニモノデスカ？』

「やめろ！考えねようにしてたんだんだぞー！てか何で片言なんだ

よ!!」

次元の真ん中で叫ぶユーノであった。

S i d eなのは

初めまして私は高町なのは9才の小学四年生です。突然ですが、私は最近変わった夢を見ます。

夢の中に決まって私が泣いているとある男の子が私に何かを言ってくれて励ましている夢。ただ、当たり前に見えるが私には不思議な夢だった。

「どうしたのよなのは？急に黙りこんじゃて？」

「何かあったのなのはちゃん？」

「!ううん。なんでもないよ。アリサちゃん、すずかちゃん。」

危ない危ない、今私は友達と一緒に帰っているとこだった。

「そう言えば、私最近変わった夢を見るねよね？」

突然アリサちゃんがそんな話題を出して来た。えっ？変わった夢？

「何か見た事がない男の子と私が仲良く遊んでる夢を見るねよ。」

あっ、私と内容が違うけど妙に‘男の子’のところに反応を示してしまう。

「でも、なんか嫌な気がしないのよね。不思議だわ。」

と何故か嬉しそうに話してる。

わ、私も話した方がいいよね？

「アリサちゃんもなの？」

すずかちゃんに先を越された。ううゝ。

「えっ？すずか、あんたも？」

「うん。内容は違うけど私の場合、一緒に本を読んで楽しそうにし

てる夢だよ。」

こちらは何故か嬉しそうに話している。

こ、ここで言わないと！

「二人とも私の話も聞いて！」

私も夢の内容について話した。

「三人が共通の夢を見るなんて不思議なこともあるのね？」

「確かに不思議なの。」

「もしかしたら正夢になるんじゃないかな？」

そんな話をしながら私達は歩いていると

キーーーーー

「「「！！」」」

突然聞いたことがない音が頭に流れ込んできた！

私だけじゃなくて二人も同じ反応してるの。

「今、変な音聞こえなかった？」

「うん。あそこの…」

「公園から聞こえてきたの！」

と私達は気になり走り出した！

…待ってー！二人とも速いよー！

ーーーーー

ピ、ピンチです！

何がピンチかと言うと

「グルルルル！」

黒い獣のが私達を睨んでいるからです！

公園に入った瞬間にこの獣が出てきたのだ。

「どうしようアリサちゃん?!」

「どうしようって言われてもわかんないわよ!」

「落ち着こうアリサちゃん、なのはちゃん!冷静にならないと」

「グルルアアアア!」

獣のが飛びかかってきた。

「「「きゃああああ!」」」

ここで終わりなの?

諦めていたら突然、横から

「デストロイー!」

ハニーブロンドの髪をなびらせながら、現れた男の子は獣にドロツ
プキックを喰らわせた。

「「「えっ!」」」

私達は啞然とした。

男の子は着地して獣に向かってこう言った。

「最初に言っておく！」

この雰囲気は決め台詞！二人とも何か期待してる様子なの。

「さっきの言葉は、言ってみただけだ！」

「「えっ！そっち！」」

そして、この出逢いが私達にとって壮絶（ある意味）な闘いの始まりだった。

S i d e ユーノ

アレっ！もう 終わりなのかよ！俺の話は！

『また次回ですね。』

マジかよ！

旅行は計画的（後書き）

反省会

「オイ！作者！」

「どうした？」

「なんか今回の俺の扱い悪くね！」

「日頃の行いのせいだろ？」

「ぐっ、てか最後あたりなんだよ？なんか嫌なフラグが立ってたぞ！」

「……気にするな。」

「クソっ！次回タイトルは【原作キャラとの邂逅】だ！」

「ちよ、おま！そこから普通持つてくかよ！」

「また次回だ！オラァ！」

「やめろ。コンボはやめてくれええええ！」

原作キャラとの邂逅（前書き）

評価されているのが素直に嬉しいです。

正直、今回の話しは不安です。

原作キャラとの邂逅

どうも、前回中途半端に最後のあたりに登場した憑依者ユーノです。現在俺はジェルシードに取り憑いている獣のを仕留めたところです。後、御都合主義すぎるがそこにいた三人娘を助けました。

……別に狙ってませんからね！

あっ！俺がいつこの地球、‘海鳴’に来た説明をします。

プレイバックプレイバック！……毎度ながらすみません。それとネタが古いですね。

数時間前

「やっと地球が見えてきたぜ。」

『長い道のりでしたね。』

俺達はやっと地球の前まで、来ています。

『ユーノ。何故あなたは、宇宙空間の中で普通に話せるのですか？』

「ああ、体の表面に見えない盾を纏っているからだよ。」

『体自体に魔法を纏っているんですか！！』

確かに驚くよな。本来なら防御魔法は、自分の目の前にシールドを展開して発動する魔法なのだ。

だが俺が発動する魔法は、体に纏い呼吸代わりにもなっている。だが別に基本は使えない訳ではないが、俺が発動した魔法はまさに“

異例”である。

後、これ戦闘の時に装備して相手の事を攻撃したら、平和○静雄みたいに国土無双になります。

『それとユーノどうやって地球の海鳴という所に行くのですか？』

ちなみに場所はさっき調べ終わっている。

そして俺はニヤリと笑い

「このまま大気圏突破だああああ！」

地球に向かい大気圏に入りました。

『えっ、ちょ！無理ですよ！止まって下さい！』

「大丈夫だ！さっき言ったように盾纏ってるから！」

『どれだけ高性能なんですかその盾は！！』

言つとくがこれは俺のオリジナルの魔法だ。作るのに苦労したぜ、フツ！

「さあ！地球に向けてGOだ！貴重な体験だから覚えとくようにするか。」

『きゃああああ！よして下さい、ユウウウウノオオオ！！』

—————

「無事に到着したな。なかなか楽しかったぜ。」

『もう嫌です…。』

あの後、俺達は無事目的地に到着し今は公園にいる。

『到着した所が人気がない場所で助かりましたね。』
「ああ、幸い夜だったから良かったぜ。」

さてボチボチ探し始めますか。

考え事をしていて

キーーーーー

頭の中に音が響く、コレはジェルシードの反応だ！
それと同時に俺の第六感があるものを感じた！

『ユーノ！ジェルシードですか？！』

「ああ、後、別な何かを感じた！」

『何です、それは！』

それはな……………。

「女難が出た！」

『はあ！？』

「俺の第六感が告げているんだ！とんでもない女難が俺に降りかかるぞ！」

言っておきますが、これはふざけていません。実は、修行をしてる間に能力だけではなくその人達のスキルまで受け継いでしまったのだ！

しかも、修行の相手の殆どが女難を持っていたので、一気に俺に受け継がれた。

おかげで、俺の女運は相当（ある意味で）悪いのだ。

「クソっ！嫌な予感しかないぜ。」

『今はそれよりジェルシードです!』

「俺にとっては、結構重要なんだが、仕方ない行きますか!」

そして俺は、誰も入らないように結界をはり、現場に向かった。

着いて見れば何故か女の子が三人いた!

何故だ?俺は“特別な力”を持っていないとこの場所には居られない結界を張ったのに!

そして獣のが女の子達に襲いかかった!

チッ!考えるのは後だ今はジェルシードの封印だ!

そして俺は、獣に向かって走り出した!

――――――――――

現在

「フウ〜間に合ったぜ。」

『なんとか成りましたね。』

と一段落していると

「ちょっとアンタ!さっきの黒いの何なのよ!」

金髪娘が俺に話し掛けてきた。

「駄目だよアリサちゃん。助けて貰ったんだからお礼言わないと。」

ヘアバンド娘が落ち着いてというような感じで止めに入り

「そうなのアリサちゃん。とりあえず落ち着こうよ。」

最後にサイドテール娘が出て来て同じように止めた。

すると突然…

「グルルルアアア!」

さっきの蹴り飛ばした獣が起き上がった。……封印するの忘れてました。

三人娘はびっくりして俺の後ろにしがみつくように隠れた。

「ああ、気にすんな今なんとかするから。」

「どうやってよ!」

「こうやってだよ!」

俺は右手を前に出し

「チェーンバインド!」

俺の手の平から翡翠色の鎖が放たれた。

これは俺の得意な拘束魔法だ。極めれば、天の鎖並みにもできます。

「グウ!」

「捕まえたの!」

「ジェルシード封印!」

「グアアア!」

光に包まれやがてさっきの黒い獣は消えて碧の宝石だけがその場に残っていた。

「すごい…。」

はあーやっと終わったぜ。

「……………」

「そろそろ離してくんない?」

俺はいまだにしがみついている三人娘に言った。

「「!」!」

一斉に離しだした。

オマケに顔赤らめてるし、……何でだ？

「それより、アンタは何者なのよ！もう訳がわかんないわよ！」

「私も出来れば教えて欲しいな？」

「私もなの。詳しい事を教えて欲しいの！」

女難が見事に当たった瞬間でした。

「ふうんなるほどそのジェルシードを追う為にわざわざ長い旅をしてきたのね？」

結局ばれてすべて話してる所だ。目の前であんなことがあったので、隠し気れない。

意外に三人とも俺の話しを信じてくれた。

「ああ、本当に長い道のりだったぜ。」

「そのジェルシードって何個あるの？」

「全部で21個だ。」

「集めるのがとっても大変だね？」

「まあ、頑張るよ。その為に来たんだからな。」

自然に会話をしている俺達であった。

「そだ、自己紹介がまだだな、俺はユーノ・スクライアだ。気軽にユーノって呼んでくれ。」

「あっ、私は高町なのはです。なのはって呼んでいいよ。私は君の事ユーノ君って呼ぶね？」

「ああ、いいぜ！よろしくな、なのは！」

「うん♪」

どこか嬉しそうに顔を赤らめて挨拶をしている。

「次に私だね。私は月村すずかです。私も出来れば、すずかって呼んで欲しいな？ 後、私もユーノ君って呼ぶね？」

「おう！ よろしくなすずか！」

「うん、よろしくねユーノ君♪」

小学生とは思えない、大人な微笑みを返してくれた。こちらまほんのり顔を赤らめている。

「最後は私ね。私はアリサ・バニングスよ。アンタは私をアリサって呼びなさい？ 私はユーノって呼ぶから！」

「へえ、強気な女は嫌いじゃないぜ、アリサ？」

「！ なな何言ってるのよアンタは！」

顔を真っ赤にして怒っているが、嫌そうではないようだ。

ちよつとからかいすぎたか？ 反省しておくか。

「ユーノ君、首にあるそのネックレスは何なの？」
「なのは質問してきた。」

「そうだ、まだコイツの紹介がまだだったな。レイ、喋っていいぞ？」
『わかりました。ユーノ。』

「うわっ！ 急に喋ったわよ！？」

「すごい！ どんな仕組みになってるの！？」

アリサは驚き、すずかは興味深々だ。

…すずか、改造しないでくれよ？

『改めまして私は、レイジングハートです。よろしくお願いします。』

レイが挨拶すると三人ともまた挨拶をした。

「……………」

『今日は、どこで寝るのですか?』

あつ! そうだ。急に來たから泊まるところがねえよ!

「どうすっかな?」

考え事していると

「あつ、あのユーノ君!」

なのはが緊張しながら俺に聞いてきた。

「どした?」

「私の家に泊まらない?」

「えっ!」

「ほっ、ほら! 今日のお礼したいし、ユーノ君ともっとお話し、したいから(ううゝ恥ずかしいよ。でも、ユーノ君ともっと一緒に居たいからって、無理言い過ぎたかな?)」

顔を真っ赤にして心の中で色々と考えている。

「あの、なの「ちょっと待(っちなきてね)!!」」うおっ!」

俺はなのはに答えを言おうとしたら突然、二人が話しに入ってきた。

後、俺はなのはの話しを断ろうとしていた。家族に迷惑かかるだろうし、何より女難が…。

「ユーノは私の家で泊まるのよ! 今日の事で色々聞きたいし、私を

からかった責任はとって貰うからね!!（うわゝ恥ずかしい事言っちゃた。べっ別に深い意味はないんだからね! ユーノが私の事をからかうから仕返し、したいだけなんだからね!）」

顔を真っ赤にして心にいい聞かせるアリサであった。

「私もユーノ君にはうちに泊まって欲しいな? 今日の事もそうだけどレイシングハートについても知りたいし、何よりユーノ君の事を知りたいからね?（何で私、こんなに積極的にしかも大胆こと言っちゃたんだろ? でも、やっぱりユーノ君にはウチに来て欲しいな。）」

自分の変化に驚きながらも、目的を忘れないすずかであった。

え、何この状況? 俺は断ろうとしたのに、なんかお泊まりが決定みたいな感じた。

「「「ユーノ（君）（君）!!」」」

「はいっ!」

突然呼ばれ思わず、声を上げてしまった。

「「「とっちがいいのか（決めてよ）（決めなさい）（決めてね）!!」」」

本当に俺にどうしろってんだよこの状況は、よおおお!

心の中で叫ぶユーノであった。

『女難…大当たりでしたねユーノ。』

原作キャラとの邂逅（後書き）

反省会

「さくくしゃちゃくん、遊・び・ま・しょー！」

ーうおっ！標識持ってきてどうした！？

「何なんだ、今回の話しは！完全にフラグっぽいものを立ててたぞ
！！」

ー良いではないか。あんな美少女に囲まれてんだから？

「そう言う問題かよ！次回タイトルは【どうすんだよ俺！】だ！」
ー毎度ながら無理やりすぎないか！

「ウルセエ！死ね！」

ーうわっ！振り回すな！投げつけんなー！ぎいやあああああ！

どうすんだよ俺！（前書き）

相変わらず無茶苦茶ですが、どうぞ。

お気に入り登録が20越えたのがすごく嬉しかったです。

どうすんだよ俺！

誰か、助けて下さい！今、俺こと憑依者ユーノは最大な選択肢をしなければ、成らない状況にいます。

「ユーノ君、私に家に泊まろうよ！」

「いいえ！私の家に泊まりなさいユーノ！」

「勿論私の家だよねユーノ君？」

どうすればいいんだ！

確かにその話しは嬉しいが、何故一気に三人も同じ事、言うんだよ？

例えば、誰か一人を選んだら必ず二人が、悲しい反応するだろうし何より嫌な予感しかない！

考えろ俺！誰も悲しまない最高のハッピーエンドを！……幻想殺しが入りました。

そして俺は答えを出した！

「みんなで、一緒に泊まるってのはどうだ？」

…これ以外何も思いつかねえ…。

あれっ！よく考えれば、女難をさらに悪化してるだけだ！

「誰の家に泊まるの？」

「うーん、この際だからなのは家ね。」

「うん決定だね♪」

時既に遅し…。何の迷いもなく決めやがった。

「じゃ、早速私の家に行こうユーノ君♪」

「おっ、おい！手ひっぱんなよなのは！」

俺はなのはにひっぱられながら歩き出し、後ろの二人もどこか羨ましそうに俺らを見ながら歩き出した。

「なあ、アリサにすずか。急に決めて大丈夫なのか？色々と事情があるのではないかと心配になり質問した。」

「大丈夫よ。何の問題もないから安心しなさい。」

「私もだよ。何より明日から休日に入るから何の問題はないよ。」

どうやら俺の心配は必要なかったようだ。

てか！明日から休みなのかよ！ますます、嫌な予感がしてきたぜ…。

「なのはも大丈夫なのか？急に泊まる事になったんだぜ？」

そう、急な訪問に泊まるというのだから、家族も困る筈だ。

「大丈夫だよユーノ君！みんなは、優しいからきつとユーノ君も受け入れてくれるよ♪」

何ていい笑顔で言うんだ。可愛いすぎだろ」

「ふえ／＼／＼！ユユ、ユーノ君！何言ってるの！？」

「あっやべ…言っちゃた。」

「冗談でいったんなら怒るよ！」

顔を赤らめて怒ってきた。だが俺の返答は

「冗談で言うもんか！本当に可愛かったぞなのは！」
堂々と宣言した。

「ふえええ／＼／＼！そ、そんなに思い切って言わなくても：／＼／＼。」
「いや、本当に可愛いかったんだから、この際だからなのはにわか
って欲しかったからさ。」
俺は微笑みながらそう言った。

「／＼／＼（うう）。ユーノ君、恥ずかしすぎるよ。二人とも見てる
のにー！」
だが、顔は嬉しそうなものではあった。

…やば！俺、すごい恥ずかしいこと言っちゃまった！

一応自覚はあるユーノであった。

なのはに謝ろうとしたら

「「ユーノ（君）！！」」

ビクッ！

えっ！何事ですか。俺、二人には何もしてないのに何故か怒ってい
るように見えるぞ！

「アンタから見て私はどう見える！」
「私もユーノ君から見てどう見えるかな？」

この流れは、さっきのなのはみたいに言わなければ、ならない流れ
になっている。

…俺も結構恥ずかしいんだぞ／／／！

「アリサ！」

まずはアリサから

「その元氣と強氣の性格が俺にとって、とても魅力的なんだ！」

「／／／う、嘘じゃないでしょうねえ！」

「嘘、偽りなんてない！本当に心からそう思ってる！」

「よろしい／／／。ユーノにしては上出来じゃない／／／！（勢いで言っちゃたけどすごい恥ずかしい！べっ別に仕返しをしたかっただけなんだからね！）」

満更でもないアリサである。

何なんだよこれは！何の拷問だよ／／／！

「すずか！」

これで終わらせる！

「その独特の雰囲気と心優しさにとっても癒やされています！」

「続けてユーノ君／／／。」

「その優しさに触れられていると思うだけで、胸がいっぱいなんだ！」

「ありがとうユーノ君。とっても嬉しいよ／／／♪（男の子にこんな事言われるなんて初めてだよ♪今、とっても幸福だよ♪）」

……もう何なんだよこれはよう／／／！

何でこんな夜に愛の告白しなきゃならないんだよ！まだ、家にすら着いてないのにこんな調子で大丈夫なのかよ。

『先が思いやられますね？』

レイ…お前わざと黙ってたろ？そして狙ってやがたな！

一切味方がいないユーノであった。

「……………」

「此処で待っててね！」

やっと着きました。

なのはは、今家族に許可を取りにいきました。

なのはの家って喫茶店か何か？

「みんな、大丈夫だったよ♪上がって上がって！」

本当に通るとは思わなかった。

そして俺達は‘翠屋’に入っていった。

「君がユーノ君だね。娘とその友達を助けてくれてどうもありがとう。」

「いえいえ、偶然駆けつけただけですよ。」

「それでもだよ、本当にありがとう。」

今話しをしているのは、高町士郎さん。

なのはのお父さんです。

いやその前に

「魔法バラしたな、なのは？」

「うっ、ごめんなさい…。」

普通にバレてるようだ。少しは、隠してくれよ。

「なのはを責めないで上げてユーノ君。この子、助けて貰ったことが相当嬉しかったみたいなの。」

「そうだよ。あんなに嬉しそうに話してるなのはは、初めて見たよ。」

」

今話した二人は、上からで、高町桃子さん、なのはのお母さんです。次に高町美由希さん、なのはの姉です。

「別に怒ってはいませんよ。ただ、信じてもらえないと思って…。」

「そんな事はない。なのはが、必死になって説明してくれたんだ。」

俺は、ユーノの話しを信じるよ。」

今のが高町恭也さん、なのはの兄です。

それにしても優しいし心が広いい人達だな。

「さっ！長い話しは終わりにしましょう？なのは達は、お風呂に入ってらっしゃい？」

桃子さんが仕切り始めました。

—————

数時間後

あの後は大変でした。風呂がなのは達と一緒に入られそうになったり、士郎さんと桃子さんに、娘とはどんな関係なのかと聞かれたりで大変だった。美由希さんには、可愛いと頭を撫でられ、恭也さんには稽古をやらないかと言われる始末だ。

今、現在はなのはの部屋に俺を含めて4人いる。

本当は、恭也さんの部屋に行こうと思ったのだが、本人達の強い希望でこうなった。

「ねえユーノ君？」

なのはが質問してきた。

「何だ？」

「私達で、ユーノ君のお手伝いできないかな？」

「えっ！」

急な話題だな…。

「私達なりに考えたのよね？何かユーノの手伝いが、出来ないかなって？」

「うん。それがこの答えなんだよ。どうかな、ユーノ君？」

俺は真剣な顔で、答えを告げた。

「駄目だ…。」

「「「！！」」」

三人とも驚いている。俺が話を断わったことに、びっくりしているのではなく俺の雰囲気の変わりように驚いているようだ。

「確かに手伝ってくれるのは、嬉しいさ。でも、これ以上巻き込またくないんだ。」

ふざけた様子など見せず真剣に語る。

「何より、怖い思いをするだろうし大怪我をする可能性だってあるんだ。」

三人は俺の話を真剣に聞いて色々考えてるようだ。

「だから、その話しは聞くことは、出来ない。」

俺のせいで、彼女達の日常を壊したくない。わざわざ危険に巻き込むことはないんだ。

そしてなのは達は答えを出した。

「「「やっぱり手伝う（よ）（わよ）（ね）！！」」」

本人達はさっきよりも“決意”のある雰囲気を出していた。

S i d eなのは

「理由を言ってくれ。何でもそこまで関わろうとする？」

ユーノ君が真剣に聞いてきた。

私もよくわからない。何でもこんなに真剣になっているのか。

私は運動音痴だし、特別頭もよくない“平凡”な小学生だ。

でも！

「私は関わったことを絶対にユーノ君のせいに何かしないの！自分が関わったなら自分で責任をとるの！」

今まで私なら絶対に出さない答え

「何の力もないのか？」

まだユーノ君は納得してくれない。

「力以外にも何か出来る筈だよ！私はそれを見つけてユーノ君のお手伝いをするの！」

どこか何時も遠慮している私はいなかった。初めてかもしれない、自分の“意志”に素直になれたのは。

S i d eアリサ

なのはがあそこまで、言うとは思ってなかったわ。

「ユーノ！私も理由を言ってあげるわ！」

正直、今でも今日起ったことは信じられないでいる。

けど！

「このまま黙って見て見ぬ振りなんて出来ないわ！」
私は無理難題を言う。

「それは、ただのわがままだ！アリサは自分のわがまま一つで、危険に晒すきか？」

そうよ、確かに私のわがままよ。でもねえ！

「私はそのわがままを貫き通すわ！もう決めたんだからね！」
そう私は自分の言った事に“覚悟”を持って言っているんだから何の迷いはないわ！

Sideすずか

二人とも凄いね。私もそうするんだけどね？

「私の理由話すねユーノ君？」

最初は彼に近づきたかったただだった。彼の優しさ、明るさがとても心地よかったから。

けど！

「誰かが傷ついている所なんて見たくないからだよ！」
彼の心情を聞いた時、考えが変わりました。

「それと同時にすずかも傷つくぞ？肉体的にも精神的にもだ！」
確かにそうだね。それで、自分の“体質”がバレるのも怖い。

「でも、私の心は揺るがないよ！それを含めて決断したんだからね！」

私は“恐れない”よ。どんなに辛い出来事があっても乗り越えて見せる。ユーノ君のお陰で決断する事が出来たんだよ？

S i d e ユーノ

予想外だった。こんなにも強い志があったなんて、話を聞いて身を引くと思っていた。

「最後にもう一度問うぞ？」

三人も真剣な眼差しを見た。

「自分の言った“信念”に嘘、偽りはないか！？」
そして答えは

「「^{なの}勿論（よ）（だよ）！！」」

「わかった！俺はお前達の事を認めよう！これからよろしく頼むぞ！」

これで“綺麗”に終わる筈だったのだが

「じゃユーノ君。一緒に寝よ／＼／＼！」
とんでもないこと言ってきた。

「なのは、急にどうした？」
ヤバい、すっかり女難の事を忘れてた！

「まだユーノ君と一緒に居たいからダメ、かな？」
何ちよっと目、潤んでだよ！断りにくいだろうが！

「いやダメよ！ユーノは、私と寝なさい／＼／＼！」
今度はアリサか！

「何でそうなんだよ！？」

「アンタがなのは何かするかもしれないでしょう！だから、私が変わりに寝てあげるわ！」

「しねえよ！てか、意味わかんねえよ！」

ヤバイヤバイ！ややこしい事になってきたぞ！

「私もユーノ君と寝たいなく？いいでしょうユーノ君？」

やたら魅惑的に言わないでくれすずか！

「いやいや、普通に駄目だろ！無理しなくていいんだぞ！」

「無理なんてしてないよ？あっ！出来れば添い寝がいいなく／／／。
」

更に注文までしてきた！

というか俺は一言も寝るって言ってないのに、こんなに悩まされてるんだ！

意味がわからん！

『ご愁傷様ですユーノ！』

「お前今回、そればっかだな！」

レイと話し込んでいると

「さあ、ユーノ君！」

なのはが言い

「私達の中から！」

アリサが繋ぎ

「誰か一人を！」

すずかも繋いで

「「選^{んでの}(びなさい) (んでね)！！」」

またこの展開かよおおお！

『もはや呪いの域ですね。ユーノの女難は…。』

そして俺は決める事が出来ず、三人と寝ました。

優柔不断とか言わないでくれよ！女の子と寝れるのだけでも、結構恥ずかしいんだからな！

こうして1日がやっと過ぎていった。

「あっ！なのは達の“力”について説明するの忘れてた…。まっいつか、どうせ明日休みだから、その時に説明すれば。」

そして今度こそ、ユーノは眠りについた。

どうすんだよ俺！（後書き）

反省会

「……………」

「疲れきってるな。」

「誰のせいだ！あそこは、シリアスなまま終わらせろよ！」

「いや、面白みが…」

「貴様舐めてるだろ！次回タイトルは【何が起こるかわからない】だぜ！」

「言っておくけどまだまだ増えるからな。」

「その妄想をぶち殺す！！」

「右ストレー^{ニヤリ}ぎやああああ！」

「また、次回。」

何が起こるか分からない（前書き）

不安で、ならない出来です。

何が起こるか分からない

おはようございます。憑依者ユーノです。俺は、朝起きて士郎さん達の道場にいます。

：なのは達はまだ寝ています。抜け出してきました。流石に言動を控えようと修行をしに来ました。

俺は、大きく足を開き左足を前に出し、左腕を曲げて握り拳を作り右手を開いて前に出す構えを取った。

「ハッ！」

まずは右手で攻撃を払うようなイメージで動かし、左ストレートを喰らわせる。

そのまま、大勢を低くくしながら足払いをし、そのまま背中になツクルをするように拳を突き上げた。

パチパチ……。

「すごいな、ユーノその年でそこまで動けるとはな。」

恭也さんが入ってきた。

「あっ！すみません恭也さん。勝手に道場を使ってしまっ……。」

「いや、気にするな。それよりユーノ俺と模擬戦をしないか？」

恭也さんはそう言い俺に木刀を渡してきた。向こう小太刀の二刀流だ。……やる気まんじゃん。

「分かりました。やりましょう。」

俺は木刀を構えた。

「ああ、後その敬語止めたらどうだ？多分みんなそう思ってるぞ。」

恭也さんも構えた。

「！！わかったぜ。なら遠慮なく言わせて貰うぜ！」

そして俺は戦う前にこう言った

「我が名はユーノ・スクライア！使う流波は【時雨蒼燕流】！最初に言っておくぜ、この流波は“最強無敵、完全無欠だ”」

俺が宣言した後に恭也さんも

「我が名は高町恭也！流波は【小太刀二刀流御神流】！ならその流波、俺が打ち破ってみせよう！」

こちら宣言をし

「「いざ、尋常に推して参る！」」

バチイイイイン！

“剣”の勝負が始まった！

「ウオツリャ！」

「甘いぞ！」

俺は木刀を斜め横に攻撃をし、左で止められた。相手は右の小太刀で俺を攻撃を仕掛けてくるが、俺は後ろに後退する。

そして追撃してくる恭也さんの攻撃をなんとか受け流す！

一度お互いに距離を取る

「なかなかやるな、ユーノ？」

「恭也さんこそ凄いで！この戦い楽しくなりそうだぜ！」

「俺も同じ事を考えていた！」

バチバチバチイイイ！再び剣の弾きあいが始まった！

「御神流“神速”！」急に恭也さんが消えた！いや、見えていない

だけで確実にいる落ち着け！

「これで終わりだユーノ！」

俺の死角から攻撃してきた。このままおわれるかよ！

「時雨蒼燕流、守式四の型・【五十嵐雨】！」

俺は無数にくる斬撃を相手の呼吸に合わせて避けきった。

「！！」

恭也さんは、驚き距離を取ろうとする。
逃がすか！

「守式四の型から攻式一の型！」

俺は木刀を両手に構えて

「【車軸の雨】！」

突進するように相手を貫こうとする！

「（速い突きだ！避け気れるか！）」

恭也さんは、避けようとするが左側に当たりそうになり、ガードを入れる。

「クッ！」

俺は横を通り過ぎ、向こうはバランスを崩したチャンスだ！

俺は木刀を離し一気に後ろを振り向き

「攻式三の型・【遣らずの雨】」

相手に向けて木刀を蹴り飛ばした。

「何っ！クッ！」

木刀は左側にあたり小太刀が落ちた。

そして俺の木刀は空中でクルクル回り、それを瞬時に左手でキャッチをし相手に向かい走り出した。

「（今はガードをして大勢を立て直す！）」
「ガードか？だが甘い！」

「時雨蒼燕流、攻式・五の型！」

俺は懐に入り込み中斬りを放つ

「（ガード！）」

「【五月雨】！」

ドゴン！

「グアア！」

恭也さんは左に吹き飛んだ。

「何をしたんだユーノ！」

俺の斬撃を腹に喰らい抑えながら聞いてきた。

「さっきのは、左に持っていた木刀を右手に素早く入れ替えたんだぜ。」

「あの一瞬でか！」

俺が右手に木刀を持っているのがその証拠だ。

「あっ！恭也さん大丈夫か！つい夢中になっちゃった。」

「大丈夫だよ。それよりユーノは強いな。負けてしまったよ。」

「なら、また今度やろうぜ！また戦ってみたいしね！」

「そうだな、またやろうユーノ！」

俺達は、笑顔で握手をして終わりを告げた。

「凄いなお前達…。」

士郎さんとなのは達がその場にいた。

「あれっ？いつから居たんですか？」

「実は最初からこっそり見てたんだよ。後、敬語はなしね。」
また、直された。

「ユーノ君。凄かったよ！」

「おう、ありがとなのは。」

「ユーノ君って格闘も強いんだね？」

「だろ？すずか。何せ鍛えてますから！」

「魔法以外何もないかと思ったわよ？」

カチン！

「んだとアリサ！何でそう評価出来んだよ！」

「だって顔が女顔なうえに見た目も強うそうに見えないからよ！」

「あっ！人が気にしてる事を堂々言いやがったな！このバーニング娘が！」

「バニングスよ！人の名字を勝手に変えるな！てか、アンタ昨日の性格と全然違うんだけど！」

「遠慮を止めたただけだ！」

胸を張って言う！

「少しは、自重をしなさい！」

「遠慮がない今の俺にとってはそんなもの皆無だ！」

「反省しなさあああい！」

アリサが俺に向けて殴りかかってきた。

「だが断る！」

バシン！っと俺は拳を受け止めた。

「私の拳を受け止めるなんて上等じゃない！覚悟しなさい！」

「Ha！来いよアリサ！返り討ちにしてやるぜ！」

第2ラウンドが始まろうとしたが

「ユーノ君、落ち着いて！」

さすがが、俺の事を止めに入り

「アリサちゃんも落ち着いてなの！」

なのは、アリサを止めに入った。

だが！

「どいてくれずか！勝負を申し込まれた以上、戦うぜ！」

「いや、だから落ち着いてよユーノ君！男のタイマン勝負じゃないんだから！」

「気にするな！もはや、関係なしだ！」

「いや、少しは考えてよ！」

一方アリサ達は…。

「どきなさいなのは！あの馬鹿に誰に喧嘩を売った事をわかれせてやるわ！」

「どちかって言うって売ったのは、アリサちゃんのほうなの！」

「うるさいうるさいうるさい！アイツに私の力を思い知らせてやるんだから！」

「逃げてユーノ君！アリサちゃん本気だよ！」

朝からテンションの高い4人組である。

一方、大人二人は…。

「みんな仲良しだね。」

「そうですね、父さん。」

微笑んで見守っていた。

てか止めてやれよ。

「ユウウウウノオオオオ！」

「アリサアアア！」

「「やめてえええ！」」

何気に楽しいと思っています。

—————

数時間後

俺達はあの後すぐに家に帰り、朝食を取った。

アリサとの勝負は？

いい加減、大人に捕まりやめました。

「という事で始めたいと思います！」

「まず、状況を説明しなさい！」

「いだっ！」

ええ、今現在なのは達を外に連れ出して
どんなに壊しても後で元通りになる結界を張り、人は誰もいない状態です。ちなみに森みたいなところだ。

「何を始めるのユーノ君？」

俺はアリサに殴られた頭をさすりながら答えた

「修行だよ。お前らの“力”の修行だ！」

「えっ？ 私達ユーノ君みたいに魔法使えるの？」

なのはが質問してきた。

「使えるのは、なのはだけで後の二人は違うんだよね。」

「じゃ私達は何が使えるのよ！」

「教えてユーノ君？」

よし説明しますか。

「まず、すずか。」

「うん。」

「風の能力だ！」

「風？どんな能力なの？」

「例えるなら、カマイタチを作ったり、風で周囲のものや人を動かすことも出来るし、気配もわかる。後は本人の応用だな！」

「色々と便利だね。でも、どうやって使うの？」

「ああ、これを使うんだよ。」

俺はいつの間にか黒いブレスレットを持っていた。

「どこから出したの？」

「企業秘密だ。」

いずれは、語る。

「付けたよ。」

ブレスレットを右腕にはめたようだ。

「風切発動って言ってみ？」

「うん？風切発動！うわあ！」

すずかの周りに風が吹く。そして晴れた先にいたのは、黒いズボンを穿き赤いTシャツの上に紫色のコートを羽織り、右手に蒼い鞘に収まった“刀”を持っているすずかがいた。

「えっ！なにこれ?!」

すずかはかなり驚いてようだ。

「カッコイいのすずかちゃん！」

「一体どうなってんのよ！」

二人も同じなようだ。

説明はまた後でだ。

「次はアリサだ。」

「待ってたわよ。どんな能力なのよ！」

「死ぬ気の炎だ！」

「聞こえ的に危なく感じるけど、どんな能力なわけ？」

「この指輪をはめてくれ。」

俺はあの“指輪”を取り出した。

「なんで、指輪なのよ！」

「文句を言うな、とっととはめてくれ。」

「わかったわよ！（勘違いするでしょうがあのバカ！）」
色々考えていたアリサであった。

「で、どうすればいいわけ？」

準備が出来たみたいなので、俺は銃をアリサに構えた。

「はっ！ちょ！何やっ（パァン！）」

俺はアリサを撃った。そして倒れた。

「……………何やってるのおおお！」

二人が驚いた瞬間。

「このバカユウウウノオオオオ！いきなり何すんのよ！」

さっき撃たれ筈のアリサが普通に立っていた。

そしてアリサの服装はギルガメッシュのライダージャケットをオレンジ色にしたような感じになっていた。

勿論、両手には【Xグローブ】が装備されており、額に炎はついてます。

そう何を隠そうあれは、【ボンゴレリング】なのだ。俺が出したやつは、指輪と死ぬ気弾だけで、なんとかなるのだ。

ちなみにすずかのは、俺のオリジナルだから、まだ説明は出来ません。

「悪い悪い、必要なことだったからさ？」

「なら撃つ前になんかいなさいよね！」

「別に撃つたなくてもなれる方法あったんだけどな！」

「なら、そっちにしなさいよね！！」

「ガハッ！」

飛び蹴りを喰らいました。

「最後になのは！」

「はい！」

「お前には、レイを託す。」

「えっ！相棒なんじゃないの！」

「なのはとの相性が凄くいいんだ。きっと十分に力を使えるぜ！」

これは、本当だ。なのはは、魔力だけは凄いしレイとの相性も本当にいいのだ！

「じゃ、早速私もアリサちゃん達みたいにな…。」

「あっ！それ無理。」

「何で？何か問題あるの！」

問題以前の前に…。

「レイの事を家に置いてきた事、今思い出したからさ。」

「ええええええ！」

心底びっくりして大声をあげるなのはであった。

この後、無事にレイを持ってきて修行を始めた。

何が起こるかわからない（後書き）

反省会

「最近大丈夫か？」

「何が？」

「無理に投稿し過ぎ何じゃないのか？」

「確かに。」

「今回は、言わないでやる。じっくり考えろよ！」

「ありがとうございます。」

「また次回！」

修行あるのみだ！(前書き)

自分のオリジナルが入っていますが、どうぞよろしくお願いします。

修行あるのみだ！

突然ですが、俺憑依者ユーノは言いたいことがあります。

修行って燃えませんか！！俺もついつい、修行時代に燃えていたんです。何に燃えろのかと言うと

「物理的に燃やされそうになってるからだ！」

俺は、珍しくスクライア一族の服を身に纏っているのだが、（ボボボボ！）俺のマントが燃えてるんだよ！

「ユーノ！早く炎消しなさいよ！」

「元を辿れば、お前のせいだからな！」

そうこの、バーニングなやつなせいだ。

理由を述べると

実はアリサに渡したボンゴレリングは、一つの炎だけではなく、複数の炎が使えるように改造して貰った。一番適合がよかったのは、大空と嵐であるボス二人のやつに近かったのだ。

そこで俺は、その二つの炎の修行に入ったのだ。

だが！

「何で拳に灯しんでる炎が振るっただけで、飛ぶんだよ！しかも俺に、オマケで嵐かよ！」

危うくバラバラ死体になるとこだったぜ。

「何よ！偶然が起きただけじゃない、別にわざとやったワケじゃない

いんだから！」

「ったりめえだ！わざとだったら間違いなく、殺意があんだろうが！」

「ある意味あるかも知れないわよ？」

「サラリと動機を認めんじやねえよ！」

アリサのスタイルは基本、近接戦闘だ。

後、Xグローブも改造して銃に変える事も出来るので、遠距離も回れるようになってる。

腕は悪くないんだが、やっぱり未熟な所があるようだ。

そこは模擬戦と実戦で、何とかするか。

「アリサ、今から俺と模擬戦な。」

善は急げ早速やって行きますか

「別にいいわよ？私がどれ位強く成ったか、その身に焼き付けなさい！」

……最後のあたり決め台詞ぽいぞ。

そして今、俺は空中でアリサと向かいあっている。

「来な！A young lady（お嬢さん）！」

「Don't repent（後悔しないでよ）！」

バン！

アリサの先制攻撃が始まった！

「はああああ！」

アリサは、俺の胴体を目掛けて攻撃してくるが、俺は虫を払うように手で横に払い体勢を低くし、右手を開き攻撃しようとしたが

「!! (バン!)」

攻撃してきた反対の手を俺に突き出し、炎を噴射して後退した。やるな…。

「何だ？今で終わると思ったぞ？」

「伊達にアンタに鍛えられていないわよ？アンタ教えかた上手いからね。」

そうかならば…!

「これは、どうだ！」

俺は瞬時に相手の顔を目掛けて蹴りを放った!

「!!」

アリサは、その場から逃げられず、体を後ろに倒し避けるが、俺はそのまま足を振り下ろした。

「うわっ！」

アリサは瞬時に両手で受け止めるが、凄い勢いで地面に激突しそうになる。

体勢を変えられないので、右腕を前に出し左腕を後ろに出して炎を噴射して降下を止めた。

「女の子に顔目掛けて攻撃する普通？」 軽口を叩いてきた。

「俺の教えなんだろう？なら、防げて当然だろう？」

皮肉を言って返してやった。

「確かにそう、ねえ！」

ダダダダダァン！

Xグローブを銃に変えて撃ってきやがった！

「チッ！」

銃の弾を紙一重で避けて行き、アリサに向かって行く。

「いい加減あたりなさい！」

ダダダダダァン！っとまた撃ってきている。

「無理な注文だ！」

俺はまた弾を避け、アリサの懐に入り込んだ。

相手は銃だが、こんな瞬時に狙えまい。

「これで、終わりだ！」

俺は右ストレートを放った。

だが…。

ガシッ！

「何？」

アリサの左手だけが、グローブに戻っているが右は銃だ。

ピト…

頭に銃を突きつけられ

「私の勝ちね！」

引き金を引こうとする。

確かにお前の戦術は、完璧だったよ…でも、“相手が悪かった”な！

俺は引き金を引かれると同時に

ダァン！

バツ！

銃の弾が発射つと同時に避けた。

「えっ！」

驚いている暇はないぞアリサ？

俺は、左腕で攻撃する。

「しまっ！」

アリサは目を瞑り攻撃を待ったが、

「はい、終了だ。」

その攻撃は来ず、終わりを告げられた。

—————

はあゝ結構疲れたなゝ。

「何であそこで避けられんのかよ！普通当てるでしようが！！」

アリサは、疲れ切ったのか座りながら俺に文句をはいた。

「まだまだ、修行が足りないだけだろ？」

「ヴウゝ。悔しいわ！」

全く膨れちゃて

「確実に強くなっているんだ。そんなに拗ねんなよ？」

「べっ別に拗ねてなんかいないわよ！」

「そっか、なら素直に喜んでくれよ？」

「ムッゝ。わかったわよ！」

「よろしい♪」

そこから数十分話した。

「んじゃ、俺は他、回るから体をほぐしておけよ？」

「わかってるわよ。てかよく動けるわね？」

「鍛えてますから（シュ）！」

右手で敬礼ぽいものやってその場を去った。

説明がまだだったが、他の二人は俺が与えた修行をやっている筈だ。

「すずかの所に行くか…。」

次の目的地に向かった。

ーーーーー

俺は一km離れた所からすずかの修行を見ている。

すずかは、刀を右手に持ち鞘を左手に持っている。

周りにはS字の風の刃が5本位浮いている。

「フッ！」

すずかは、鞘を振るい、風の刃もそれに合わせて周りの木に飛んで行く！

ざっざっざっざっざっ！

計5本の木の元辺りを切り裂き、宙に浮いた。

そしてすずかは、刀を上 to 構えて

「ヤアアアアア！」

刀を木に向かって振るうと同時に刀から真空の刃が放たれた。
ばっばっばっばっばっ！

木はバラバラに切り刻まれ、落ちでいくが

「ハッ！」 鞘をまた振るうと

ヒュウー！

風が吹き、木を綺麗に重ねるように並べた。

どうやら、使いこなしているようだ。

あの刀、“フウゲツ風月”は強力な風の武器を創り出すことが出来る刀だ。
次に鞆の“フウライ風来”は風を生み出し、自在に操る事も出来れば、風の
流れで相手の行動パターンもわかる。

「（ユーノ君、今のはどんな感じだった？）」
「！！」

突然すずかが念話で話しかけてきた。
ちなみにアリサも使えます。

俺は転移ですずかに近づき質問した。

「どうやってわかった？ 気配は完璧に消したはずだが？」

「気配は消しても、風が私に教えてくれるんだよ？」

これは驚いた。どうやら風来を使って風の流れを読み、俺がいる事
に気づいたようだ。

「正直、素晴らしいとしか言いようがないよ。あそこまで、使いこ
なせるんだからな。」

「ありがとうユーノ君！でも、ユーノ君の教えのおかげだよ？」

「そりゃどうもだな。」

そして俺達は、笑い合いながら数十分話し続けた。

「あっ！ユーノ君は何をしにここに來たのか聞いてなかったね？」
突然話題を変えた。

「すずかと模擬戦をやってみようかなと思ったからさ。」
そして俺は答えを言った。

「かまわないよ？じゃあ、始めようユーノ君。風は無限の可能性を秘めているから、気おつけてね♪」
なんか格好いいぞすずか。

「さあ、来いすずか！」

俺は【物干し竿】を取り出し、構えた。

「いくよユーノ君！」

すずかは再び構えをとり、第2の戦いが始まった。

「ヤァァ！」

「フッ！」

すずかは、真正面から突こんできたので、俺は動かず受け止めた

ガキン、ギギギギ！

刀がぶつかり合い、金属音が鳴り響く。

しばらく睨み合っていると

ガキン！っとお互い刀を弾き合い距離を取った。

それと同時にすずかは風月で、武器を創った。

「風刃！」

さっき見たS字の風の刃、今度は十本ありやがる！

「行って！」

刃は回りながら俺に向かってきた。

「ハッ！セャッ！」

俺はその刃を切り落としていくが、攻撃が5本で急に止まった。それにすずかも、いつの間にか姿を消した！

ブンブンブンブン！っと俺を囲むように残りの5本が迫ってきた。

俺は刀を横に構え、

「はああああ！」

切り落としていくと

「隙あり！」

突然すずかが、現れ隙が出来た俺に風でスピードを上げて攻撃してきた。

「ハッ！」

「キャッ！」

俺は直ぐに体制を立て直し、逆に弾き飛ばした。

「へえ〜？ なかなかやるなすずか！」

「ユーノ君こそ、凄いよ！あの攻撃を防いじやたからね。」
お互いに褒め合う俺達

今度は俺が仕掛ける！いや、終わらせる！

「すずか！お前が風を読み、避けれるなら俺が出すこの、技、を避けてみる！」

「うん！絶対に避けてみせるよ！」

俺は刀を両手で持ち、顔の隣に構え刀身を相手に向ける。

すずかもガードの体制に入った。

「秘剣…」

腕を振り絞り

「【つばめ返し】！！」

同時に“三撃”の攻撃を一度に飛ばした。

—————

「ひどいよユーノ君！あんな攻撃避けられないよ！」

「悪い、調子に乗りすぎました。」

あの後、すずかは避ける事が出来ず、当たりK.O.した。

「もう、少しは手加減してよ。」

機嫌を悪くしてしまった。

「すまん、すずか。」

何を言っているのかわからないので、謝り続ける俺であった。

とりあえず、今度すずかの家に遊びに行く約束をし、機嫌が直り、俺はその場を去った。

—————

最後になのはの修行場に向かった。

なのはには、魔法と体力を鍛えるトレーニングを与えた。

魔法は問題ないのだが、体力が無さ過ぎるので、鍛えられるメニューを渡した。

考え込んでる内に目的地につき、なのはを発見した。

休憩中なのか地面に寝転がっている。

相当頑張ったみたいだな…。

「なのは、大丈夫か？」

俺はとりあえずなのはに声を掛けた。

「えっ！ユーノ君。いつの間に来てたの？」

なのはは、俺が来た事に驚き上半身を起こした。

「今、さっきだ。それより、頑張ってるみたいだな？」

周りの木がなくなっていたり、地面にクレーターみたいのがあるのがそれを伝えている。

「勿論だよ！魔法も体力の方もユーノ君の説明のおかげで、凄く伸びがいいって言える位だよ！」

また俺の説明か…。

「そんなに俺の説明は凄いのか？」

「うん♪なんかユーノ君に教えて貰っているとまだまだ強くなれる実感がわかるんだよ！」

「なんかわかんないけどありがとう。」

素直に嬉しいです。

ちなみにアリサとすずかも同じ考えです。

「それよりユーノ君は、何をしにここに来たの？」

「模擬戦をしようと思ったんだけど今日は、止めておこう。」

「えっ！なんで！私まだまだ行けるよ！」

確かに行けそうだが

「焦りは禁物、無理はせずだ。なのは、他の二人より練習を頑張っていたから、その分疲れてるだろう？だから、無しだ。」

「ムウ。」

頬を膨らまして、自分は納得いかないとアピールしている。

はあく仕方ない。出来るだけ無理はさせたくないんだかな。

「なら、完成した魔法を見せてくれ。それ位は許す。」

「！！うん！見ててねユーノ君！私の全力全開を！」

やっぱり、止めておけば良かったと後悔しました。

なのは、レイを両手で持ち前に向けて構え、魔力を溜め魔法を放った。

「デイベインバスター！」

桜色の砲撃が木を呑み込んだ。

悪くない威力だ。狙いもいいな…。

今度は、上に構えながら砲撃を放ちながら

「デイベインブレード！」

振り下ろしながらの攻撃だ。

考えたな…。ただ狙い撃つだけではなく、少しの工夫だけで近接攻撃に変えた。

「どうだったユーノ君？」

なのはが結果を聞いてきた。

「なかなかいいぜ。ただ狙い撃つだけのスタイルではなく近接の時の考えを出したのも凄いぜ！」

普通の魔導士なら自分の得意な魔法だけしか使ってこないが、それでは弱点になってしまう。

そして元々なのはは、遠距離型のスタイルなのだが、なのははそれだけで満足せずに苦手な近接戦闘の練習もしているようだ。

体力上げのメニューを入れてなかったら気がつかなかったな。

「ありがとうユーノ君！それとユーノ君のおかげで、運動が楽しく思えるようになったの♪」

「へえ。始めの頃の言葉とは思えない言葉だな？」

「ウウ。意地悪な事言わないでほしいの！」

「そう言い頬を膨らました。やれやれ、言い過ぎたか？」

「悪いなのは。素直にお前が感謝してくれたから照れだけなんだよ？」

「そう言い俺は、さりげなくなのはの頭を撫でてやった。」

「これをやれば、機嫌を直してくれるとどこかの“正義の味方”も言っていたので実行した。」

「あっ…う…うん。そう言う事ならいいんだよ（なんか心地よい感じがする感覚だよ♪）。」

「どうやら効果は抜群のようだ。顔を赤くして大人しくなった。」

「……………」

「俺達はその後、アリサやすずか達と合流をして家に戻っている所だ。」

「ユーノ！」

「突然、後ろでなのは達と話していたアリサが俺に怒鳴ってきた。」

「何だよ？騒々しい。」

「アンタ、なのはやすずかには何か約束やご褒美を与えたのに、私には何もないワケ！」

「あの二人話したな…。この流れは自分には何もないのかという振り」

だな…。

「俺の出来る範囲で頼む。」

いい訳は見苦しいので、即答で答えた。

「簡単なことよ？私を“おぶりなさい”！」
久しぶりに女難がキターーーーーー。

「何だよ！もうちょっと控えめなのねえのかよ！」

「うるさいうるさいうるさい！そんなのは達と比べたら刺激が無さ過ぎんのよ！」

「勝負じゃねえんだから張り合うなよ！」

そんな話をしながら俺達は家に帰って行った。

余談だが、あの子の帰りにジュエルシードの反応が三つ現れたのが、三人が瞬時に現場に向かった。

えっ？俺は何してるかって？ここは、私達に任せてと言われ、今広範囲の結果を張っていました。

結果は、怪我もなく三人とも余裕で回収して帰ってきた。

そして再び帰ろうと

したら突然アリサが俺の背中に抱きついて俺は慌てて抑えた。

「疲れたからおぶりなさい？」
やたら、笑顔で言ってきた。まだ、根に持ってやがたな。

仕方がないので、承諾したら今度はなのは達が納得いかないと行ってきて口論になった。

結局俺は、アリサをおぶって帰っているが、後ろの二人は羨ましそうに睨んでしアリサはアリサで勝ち誇ったような顔をしていた。

いつにも増して女難が悪いような気がする…。これから大丈夫かよ本当に…。

不安を抱きながら帰るユーノであった。

修行あるのみだ！（後書き）

反省会

「相変わらず俺はこんなめに…。」

「別にいいだろ。」

「これ以上増えないよな絶対に！」

「それはない！次回タイトルは【時間の流れは早い！】だ！」

「キツパリ言いやがた！てか、それ俺の台詞だ！」

「また次回をお楽しみに」。

時間の流れは早い！（前書き）

良ければ、幸いです。

時間の流れは早い！

地球に来て三日になる憑依者ユーノです。

ジュエルシードも今は、四個も集まり順調なのですが、現在面倒くさい事になっています。

「服を買いに行こうユーノ君？」

なのはが、みんなと朝食を取ってる時に話題を出した。

ちなみにアリサとすずかは、自分の家に帰っています。

驚いた事に二人とも大きな家のお嬢様だった事も知った。

……何故かすずかの家の庭には、**罌**が沢山あったが何かあるのか？

その考えは、また今度にしよう…。

後、俺は正式的に高町家に居候する事になりました。

「何で？」

「だってユーノ君、同じ服しかないから困ってるんじゃないかと思っ…。」

「なるほど。」

確かに俺は、服が一着しかないそれを、俺は色々とコネを使って洗い、乾かして毎日着ていたのだ。

気にするのも当たり前か…。

「ありがとななのは。心配してくれて。」

純粹に心配してくれたなのはに感謝した。

「ううん♪気にしないでよユーノ君。」
笑顔が眩しいぜ。

「なら、二人で服を買いに行ってくる？」

桃子さんが突然、そんな事を言ってきた。

「確かにユーノ君は、同じ服しか着ていないから、この際だから買ってきたらどうだい？」

士郎さんも同じ事を言ってきた。

「いいのか？邪魔になったりしないのか？」

「何を心配してるユーノ？お前は居候の身だが、今は、家族、と同じなんだ。遠慮するな。」

恭也さん…、発言がイケメンすぎるぜ！

「そうだよユーノ。私達は、家族、と同じだから、いっぱい甘えていいんだよ？」

美由希さんもありがとうございます。

本当に優しいなこの家族は…。

俺には、“本当の家族”がいなかったけど今は、スクライアのみんなもいるから別にかまわない。

「わかった。本日俺は、服を買ってくるぜ！」
ここに宣言をした！

—————

数時間後

「早く行こうよユーノ君！」

「元気だなく、なのは。」

俺達二人は、服を買いに行っている所だ。

他のみんなは、それぞれ用事があるので、二人きっちなわけだ。

「だってユーノ君と二人だけで、出掛けらるのが嬉しいんだもん♪」
確かに二人だけになるのは珍しいな、基本四人で行動してたからな。

「そっか。なら俺もなのはと一緒に出掛けて嬉しいぜ！」

「うん♪ありがとうユーノ君！」

俺達はそんな会話をしながら向かっていた。

客観的に見れば、デートをしているように見えたそうだ。

さあ、着いたぜ！

「うお〜デカいな〜。」

プラ○ト5みたいな所だな〜。

「早速行こうよユーノ君！」

「おう！後、離れないように手を繋ごぜ！」

俺は左手を出した。

「うん♪手を繋ごうユーノ君！（ユーノ君の手やっぱり暖かくて心地いいな〜。）」

しっかり左手を握るなのはであった。

「ユーノ君って夏服が好きなんだね？」 今、俺達は半袖や半ズボンがあるコーナーにいる。

「ああ！動きやすいし、俺ラフな格好が好きだからさ！」
ちなみに今の俺の服もそんな感じだ。

「へえ〜そうなんだ♪（うう〜よく見れば、ユーノ君私達より肌が白いの!）」

そうユーノは、女の子達よりも綺麗な白い肌をしているのだ。 本人は何も気づいていません。

「どうしたなの？考え事か？」

「ううん。何でもないよユーノ君！」

大声で返してきた。

やっぱり何か考えてたのか？

「とりあえず、買いたい物も決まったから会計済ませようぜ？」

「うん。そうするの！」

俺達はレジに向かっていた。

ーーーーー

俺達は会計済ませた後、店の中で飲食店があったので、そこで休憩している。

服は、五着買いました。全部、夏服です。

「そろそろ昼だから、何か食べて行くか？」

「そうしようユーノ君♪」

俺達は席に座り、テーブルにあったメニューを読み、注文をしようとしたら突然、

キーーーーーン

ジュエルシードの反応が出た！しかも店の中からだ！

おいおい、普通夜に反応を起こすんじゃないのかよ！

「ユーノ君！」

「わかってる！」

考えは後だ。今は、封印がさきだ！

俺は結界を張り人が居なくなった。勿論、物を壊しても後で直る結界だ。

「レイジングハート、Set Up！」

なのはは、白いバリアジャケットを展開して準備万端なようだ。

俺は両手に黒い銃と銀の銃「エボニー&アイボリー」を取り出してクルクル回しながら構えを取った。

「なのは！店の中じゃ下手に飛べないから走るぞ！」

前までのなのはだったら絶対に承諾しない事だが

「問題ないよユーノ君！」

笑顔で、大丈夫だと言ってきた。

修行の成果が出てる証拠だな。

「んじゃ、行くか！」

「うん！」

俺達は現場に走って向かった。

場所に着いて見れば、大量の‘マネキン’達が動いていた。

「ユーノ君、あれマネキンだよね？」

「間違いなくマネキンだ。」

頼によってマネキンかよ！てか、動くな！ホラーみたいになってるぞ！

「何か怖いよーユーノ君！」

ほら！ここに怖がって怯えて抱きついている女の子がいるんだぞ！

「大丈夫だなのは！割り切れ！」

「そこは、“俺が付いてる”とか“守ってやる”じゃないの！？」

「人は時に恐怖に挑まないと強くなれないんだ！」

「格好よく、まとめないでよー！」

なんて会話してると

ドツドツドツドツドツつとマネキン達が迫ってきた！

「「キターー！」「」

本当にコワッ！無表情だから余計不気味だし、大量に来ると迫力がある。

「「散開！」」

俺達はそれぞれ逆に跳んだ。

Sideなのは

ううゝ怖いのに！私の周りには、十体位のマネキンがいるの！早く終わらせてユーノ君とお昼を食べるの！

二体が私の前に迫ってきた！私は狙いを定め

「デイベインバスター！」

一気に二体を仕留めたの！

次に私を囲むようにマネキン達が五体も迫ってきた！

狙い撃ちしてる暇はないね！

なのはは、突然クルクル回り出し、レイジングハートを横に構えて魔力を込めていく。

「デイベイントルネード！」

そして砲撃を放ち、マネキン達は吹き飛ばされた。

その技はなのはが、多数の敵と戦う時に考えた技である。

残りの三体が後退していく、逃がさないの！

「デイベインシューター！」

五発の魔力弾を作り出した。

「いっけええ！」

その魔力弾は見事にあたりマネキン達を倒した。

「ふう〜。なんとかあったの。でも、こんな体験は二度としたくないの！」

そう言うのと逃げるようにユーノの所に向かった。

Sideユーノ

派手にやってるな〜なのはのやつ、俺もそうするがな！

「This Puppet show getting crazy! (イカれた人形劇のはじまりか!)」

「Let's rock! (派手にいくぜ!)」

俺の周りには、二十体以上のマネキンがいる。

俺はまず一体目に近づき、もう二体がいる方に蹴り飛ばし、銃を撃った。

ダッダッダッダッ！

ぶつかると同時に蜂の巣にしてやったぜ！

次にマネキン達が六体が迫ってきたので、俺はその場を動かず、銃だけを構えた。

ダッダッダアッ、ダッダッダアッとあらゆる方向に銃で撃っているが、俺は一步動いていない。

敵が来る感覚だけで、俺は撃っているのだ。

今度は、向こうから仕掛けてきたが、俺は余裕でかわし、相手の頭
に乗り空を跳んだ。

そこから、逆立ちの状態から回転しながら撃つ【Rain Sto
rm】を放った。

「Hu
ll
ll
ll
ll
!」

ダッ
ダッ
ダッ
ダッ
ダッ
ダアッ
ン!

計十体のマネキン共を倒した。

「Ha! ガツ
ツが足んねえな!」

俺は着地と同時に今葉を吐き捨てた。

離れた所によろよろになった最後の一体がいる。どうやらこいつらの本体のようだ。ジュエルシードがある。

俺は両手で銃をクルクル回して狙いを定めた。

「JackPot! (大当たりだ!)」

銃声が鳴り響き、終わりを向かえた。

一一一

「何でジュエルシードはマネキンに反応したのかな？」

俺達は、さっきの事件が終わり、昼食も取ったので、帰宅途中だ。

「さあな、マネキンにも願いがあったんじゃないか？」

「願い？例えば、どんな？」

「自分達も色々な服を着て歩き回りたいたいっていう願いだよ。」

きっとただ、着せられるだけではなく、自分達もその服で歩き回ってみたいという願いを…。

「マネキンにも意志があったて事？」

「そうだ。どんなものにも、意志は必ずある。無いモノなんて無いんだよ。」

「じゃあ、私達悪い事しちゃったのかな？」

その質問に俺は

「それはない。」

キツパリと否定した。

「なんで？マネキン達はただ動きたかっただけなのに！」

「結果はどうあれ、アイツらは俺達を襲ってきた。結局、願いは歪んだ形で終わったんだ…。」

突然なのはが涙を一粒流した。

「私、何も考えてなかった！ただ、相手が悪いだけなんだと勝手に決め付けて、相手の事を知ろうなんて考えていなかった！」

まだ泣き出すのは…。

「私、最低だよ…。相手の気持ちを考えないで、相手の事を倒した。」

まるで“悪魔”だよ！」

涙を流すなのは…。

「なのは！」

「！！」

俺は結界を張ると同時になのはを抱き締めた。

「ユ…ーノ…：…君？」

「それ以上、自分を責めるな、なのは！」

「でも、私…。」

「確かに、俺達はアイツらを攻撃したが、アイツらは決して俺達を恨んでなどいない！」

「！！」

なのはが、目を見開いた。

「どうして…？」

「アイツらは、人を襲う事が願いじゃなかった。それを止める事が出来た。それだけで、満足してるはずだ！」

「でも！私は何も考えていなかったよ！」

まだ、反論してくるなのは

「今、考えてるじゃねえか！自分がやってしまった事を涙を流しながら考えてるんじゃないのかよ！」

なのはは、押し黙る。

「なら、それを忘れるな！そして、次に活かしてみろ！ただ下をみてるだけじゃ何も変わらない！」

「！！（そうだ。私は、何かあると下を向いてしまい上を見ような

んて思わなかった!」

なのはの瞳が輝きだした。

「(逃げてただけだ! ツライ事から。)」

答えを見つけたようだな…。

「なのは、最後に言いたい事がある。」

「何、ユーノ君?」

「Devil never Cry(悪魔は泣かない)」

「えっ!」

「本当の悪魔は、欲でしか動かず、理性を持たないヤツだ。そして涙を流さない!」

なのはは、真剣に俺の話しを聞いている。

「だが、なのはは、自分の罪を認め、誰かの為に必死に涙をながしてる。お前は悪魔じゃない!」

なのはの瞳に光りが戻った。

「……………ありがとうユーノ君…。」

なのは、俺の胸に顔を隠すように抱きついた。

「どう致しましてだな。」

—————

「今日は、本当にありがとねユーノ君。」

「気にするな、友達なんだかな。」

あの後、なのはは泣き続けてやっと落ち着いて帰ってる所だ。

「友達か…。」

何か納得いかない様子だ。

「どうした？」

「ううん！なんでもないよ！」

大丈夫か？

話しているうちに家に着き入ろうとしたら

「ユーノ君！」

突然なのはに、呼ばれ振り向くと

チュッ！

突然、頬に、キス、された。

「えっ！」

「お礼だよ／＼／＼♪後、ユーノ君とはもっと、仲良く、なりたいたいかな〜。」

顔を真っ赤にして先に入って行った。

俺は、キスされた頬さすりながらある事が頭に浮かんだ！

「最大の女難がキターー！そしてこれでは、終わらないと俺の第六感が緊急信号を出している！」

色々ぶっ壊れたユーノであった。

時間の流れは早い！（後書き）

反省会

「何でだー！」

ーどうした、凄いあらぶりようだな。

「なんなの今回の話し意味わかんねえよ！」

ー何で？見事にフラグ回収：

「D a a a a a a a i（死ねええええええ！）」

ーアレ！次回タイトルは！

「今回は無しだ！」

ーマジ！なら、次回もお楽しみに！

「遺言はすんだか！」

ーウギャアアアアア！

一人は寂しいもの。(前書き)

C o u n t ジュエルシード現在ユーノが持っている数は

五個！

一人は寂しいもの。

色々と毎日大変は憑依者ユーノだ。

今も面倒事にあっている何かと言うと

「なのは！早く起きろ！学校に遅刻するぞ！」

「うーん、後、二十四時間なの。」

「何お決まりパターンを言ってやがる！てか、それは一日だ！」
この寝坊助、娘を起こさなきゃいけないからだ！

休日が終わわり、なのはは今日から学校なのだが、今だにこんな状態だ。

「早く起きろっての！マジで遅刻するぞ！」

「うーん、ならユーノ君がおはよーのキスをして。」

コイツ：昨日事を踏まえて言ってやがるな！

#詳しい事は、前回の話しでわかる。

フッフッフッ！

なのは！俺をからかった事、後悔させてやるぜ！

俺は両手にあるモノを取り出した！

「右手におたま、左手にフライパン！」

俺は、両手を高く構えて

「秘技【死者の目覚め】！」

ガンガンガンガンガン！

「にゃあああああ！」

凄まじい轟音とともになのはが飛び跳ねるように起きた。

「……………」

「ううう。頭が痛いの。」

「早く起きないからだ。手間取らせやがって。」

あの後、無事「？」になのはを起こし、朝食を取らせて今、学校に行く所だ。

「でも、今度はもっと優しく起こしてほしの。」

「自分で、起きようとは、思わねえのかよ。」

「ユーノ君に起こして貰えるのが、嬉しいんだもん♪」
素晴らしい笑顔で宣言するなのは。

「…出来るだけ自重する。」

なんだかんだで、優しいユーノである。

「ありがとうユーノ君！」

「うわっ！なのは、くっ付くな！コラッ！」

朝からイチャイチャしてる二人であった。

家族は、微笑ましく見守っていたそうだ。

「行ってきました！」

「行ってらっしゃい！」

やっと解放された。

なのは、もう少し自重してくれないか？

ホントマジで…。

「……………」

「ユーノ君、ちょっといいかな？」

突然、士郎さんが俺に質問してきた。

「何だ？」

「なのはのことについてだよ。」

深刻そうに聞いてきた。

えっ！これまさかの死亡フラグじゃないよな！俺、何かしたか！
内心、慌てるユーノである。

「ありがとうユーノ君！」

突然、お礼を言われた。

「えっ？」

突然過ぎて意味がわからない。

「何で？」

「なのはが、とても明るくなった事に感謝しているんだ。」

「前は、明るくなかったのか？」

その話題を聞き、俺も真剣に聞いた。

内容は、士郎さんが事故で、入院してしまい家族がバラバラな状態
になってしまったそうだ。

そこで、幼かったなのはは、みんなに、迷惑、を掛けてはいけな
いと心を閉ざしながら育てきたらしい。

「俺は、娘が苦しんでいるのに、それに気づいてやれなかった。ダ
メな父親だよ。」

悲しげに語る士郎さん。

「でも、ユーノ君が来てからあの子は、元気を取り戻した。俺達に
遠慮する事もなくなったんだ。」
悔しそうに、語る士郎さん。

「だから、ありがとう。」

頭を下げてお礼を言われた。

「士郎さん、顔を上げてくれ。」

俺は、士郎さんにそう言う顔と顔を上げてくれた。

「俺は、特に何もしてないんだぜ？そんなに感謝される覚えはないぜ？」

「いや、でも…！」

「それに士郎さんは、自分はダメな父親と言ったが、それは勘違いだ！」

俺は士郎さんに、怒鳴り掛ける！

「何故…？」

「アンタは、今までなのはの事を大切に思ってたんだろ？何年も必死に、なのはが心を開いてくれるには、どうすればいいのか！」
まだ、俺は止まらない！

「それは、立派な父親である証拠だ！勝手に卑屈的になってんじゃねえ！」

しばらく沈黙が走る。

「俺は、あの子の父親でいいのかな？」

「知らねえよ。問題なのは、アンタの気持ち次第って事だ。」

「そうか…。ありがとうユーノ君。何か吹っ切れたよ。」

その解答に俺は

「だから、俺は知らねーっての。」
頭を掻いで、一時その場を去った。

—————

数時間後

店の方が、忙しくなったので、俺は町の中にいる。

久しぶりに一人なような、気がする。さあて、どうする…

ビューーーーーー!

突然、風が吹いたと思ったら

「止めてええええ!」

車椅子に乗った女の子が風に押されて俺に突っ込んできた。

どんだけだよ風!そして何で女の子!女難の予感しかしねえ!

心の中で、考え事していると

ドカ!

「キヤアアアッ!」

「ギヤアアアア!」

見事に車椅子に当たり、俺は倒れて、女の子も俺に重なるように落ちてくる。

「グワっ!」

女の子は、俺の胸に顔を埋めるように落ちた。

「ちよっ!大丈夫なんか!」

上に乗った女の子が聞いてきた。

「大丈夫じゃねえ、女難の方が…。」

「えっ?」

意味のわからない解答をしてしまった。

「本当に、すみません。わたし、あないなことになるとは、思ってもみなかったわ。」

「気にするな。」

まさに衝撃的な出会いをして今は、落ち着いて話している。

「自己紹介まだだったな。俺は、ユーノ・スクライアだ。」

「わたしは、八神はやてや。よろしゅうなユーノ君♪」

「ああ、よろしく。はやて!」

果てしなく嫌な予感しかないけどな。

心の中で呟くユーノであった。

—————

その頃のなのは達は：

「アンタ、ユーノと何かあったの？」

「えっ! どうしてアリサちゃん。」

「だって、なのはちゃん。ユーノ君の話しの度に嬉しそうな顔になってるよ?」屋上で、お昼を取りながら、ガールズトークをする。

三人がいた。

「ううん! 何でもないよ! (恥ずかしくて言えないよ。)」

「何か、隠してない?」

「怪しいね。なのはちゃん?」

なのはに迫ってくる二人。

「何でそんなに聞いてくるの?」

怯えながら聞くなのは。

「だってなのは、雰囲気は何となくが変わったからよ。」

「えっ!」

「本当だよなのはちゃん？昨日、何かあったの？」

すずかに昨日と言われた瞬間なのは、

「うう／＼／／。」

顔を真っ赤にするなのは。どうやら、思い出して恥ずかしがってるらしい。

「これは、何かあったわね！何をしたのよあのバカユーノは！」

「今度キツチリ問い詰める必要があるそうだね！」

顔を真っ赤にするのはと何かを決意する二人のカオスな空間が出来ていた。

少し離れた場所で、集まっていた男子が

「ユーノってだれだあああ！」

と叫んでいたのは余談である。

「……………」

再びユーノ達は…。

「ハックシュン！」

「うわっ！ユーノ君大丈夫なん？風邪ひいとるの？」

「大丈夫だ。誰か噂してんだよ。」

現在俺達は、図書館に来て本を読んでいる所だ。

「そう言えば、ユーノ君ってこっちに来たばっかやの？」

「ああ、今はある家で居候してるとこだ。」

「ふーん、そうなん。学校は行かなくてええんか？」

「まだ、手続きしてないだけだ。」
適当にごまかした。

あれから数十分話し、はやてが話題を出してきた。

「私の足について何も聞かんの？」

はやては、自分の足の事について言った。

「何で？」

「いや、な。周りの人達は、すぐに聞いてくるんやけどユーノ君は、聞いてこんへんから気になったんよ？」

そう言うことか…。

「別に。相手が話してくれてないのに、聞くのは失礼だと思ったからだ。」

女の子だしそんな簡単に、聞くのは失礼だ。

「優しいんやね。ユーノ君は♪」

何故か嬉しそうに言ってくるはやて。

「大した事ねえって。」

ぶっきらぼうに返すユーノであった。

—————

あの後、改めてはやての足の事について聞いたが、本当に病気か？
何か引っ掛かるんだよね。

「どないしたのユーノ君？」

「何でもねえよはやて、後、道はこれであってんのか？」

現在俺は、はやての車椅子を押して、はやての家に向かっている所だ。

「うん！ごめんな〜ユーノ君。こないな事もして貰って。」

「気にすんな。これも何かの縁だ。好意に甘えとけ。」

「本当にありがとうなユーノ君♪」

楽しげに話す俺達であった。

そして俺達は、はやての家に着いた。

「じゃあ、俺帰るから、体に気お付けろよ?」

そう言って俺は、帰ろうとしたら

「ユーノ君!」

はやてに呼び止められ振り向いた。

「明日、またここに遊びに来ん?」

「えっ?」

「いやユーノ君が無理ならいいんよ!ただ、今日のお礼がしたいんですよ!」

妙に慌てふためくはやて。

「別にいいぜ?」

嫌な予感はあるけどな。

「ホ、ホンマか!」

「ああ、別に断る理由ないし暇だからな。」

正直、慌てるはやてを見て断りにくかった。

「じゃあ、明日、朝早くでもええから遊びに来てな!」

「おっ、おい!はやて:。」

「楽しみに待っとるからなー♪」

そう言いはやては、家の中に入って行った。

「今日も波乱な一日だった。」

そんな事を言いながら帰るユーノがいた。

また余談だが、この後ジュエルシードが出て、回収に向かったのだが、アリサとすずかに何かを問い詰められながら回収するユーノがいたそうだ。

一人は寂しいもの。(後書き)

反省会

「増えたぞ!」

「それは、置いという

「何だよ!」

「転生者って知ってるな?

「ああ、オリジナルの主人公みたいなもんだろ?」

「出そうなんて思ってるんだ。

「バカか! お前俺を殺す気か! 淫獣扱いされて狙われるっての!」

「まあ、余裕が出来たら出すか…。

「また次回だ!」

とても大変な一日。(前書き)

C o u n t ジュエルシード
現在ユーノがもっている数は

六個！

とても大変な一日。

どうも〜お疲れの憑依者ユーノだ。

昨日は、色々と散々な一日だったぜ。

そして今日の俺の予定はと言うと昨日、合ったはやての家に遊びに行っている所です。

何もないことを願いたいがな…。

なんだかんだで、家に到着だ。早速、インターホンを押そう。

ピンポン！

そして俺は、応答を待とうと思ったら

「山！」

急に意味の分からない返しをしてきた。

だが！これで、遅れをとる俺ではない！

「川！」

どうだ！空きをうめることなく答えたぞ！

「○谷豊の代表作のドラマと言えば！」

フン！造作もないぜ！

「相○だ！」

俺は瞬時に答えた！

「大正解やユーノ君！それにギャグに対するノリもええで！私の相

方になろ！」

「どうでもいいから！早く扉を開けろ！関西弁もどき娘が！」
意味の分からない挨拶をしたユーノ達であった。

「……………」

「んで、何にして遊ぶんだんだ？」

「そうやな。」

やっと家に入れました。

「じゃあ、まずテレビゲームをやる？」

「ああ、いいぜ。」

やるのは、ガンダムです。
ちなみに今、白熱中です。

「ゴッドフィンガー！」

「甘いでユーノ君！ダークネスフィンガー！」

「今日こそ落ちろやフリーダム！」

「舐めるなよデステイニー！フルバーストだ！」

「「トランザム！」」

「今日の私は阿修羅を凌駕する存在や！」

「俺が俺達がガンダムだ！」

「会いたかったよガンダム！」

「世界の歪みを破壊する！」

何か別次元に行ってしまった二人なのであった。

「そろそろお昼か…。」

結局、昼まで熱中してゲームをやっていました。

「じゃあ、私が昼食作ったるからユーノ君は待っててな。」

「えっ？はやて、料理作れるのか？」

「もちろんやで！私、一人暮らしやから大丈夫なんよ！」

「えっ！」

俺は驚いた。料理の事でもあるが、はやてが一人暮らしという事に…。

「あつ、ユーノ君。別に気にしないでいいんよ？私はもう慣れとるから。」

最後に言った事を言っているな。

「はやて。」

「何や？ユーノ君？」

「俺も料理を手伝うだぜ！」

「えっ！」

とりあえず、手伝う事にしました。

料理は野菜炒めです。そして、上手に出来ました。料理中の話しは、飛ばします。

「凄いな！ユーノ君！料理も出来るんか！」

「はやても凄いぜ！料理人の手つきだったぜ！」

お互い褒めあています。

「でも、何でそんなに上手いんや？」

はやてが質問してきた。

「それは、俺も一人暮らしだったからだよ。」

「えっ？」

はやては驚いた様子だ。

「俺さ、物心ついた時には周りに誰もいなかったんだよ…。」

これは、本当だ。憑依が完了した時、俺は、一人、だった。

「そこからどないしたん？」

はやてが悲しそうに聞いてきた。

「生きる為に色々やった。内容は察してくれ。」

実際、罪になるような事はしていないがな。

「寂しくなかったんか？」

その解答に俺は

「寂しかったさ…。」

「!!」

感情が籠もった声にはやては驚いた。

「でもな！今は俺の事を家族って言うてくる人達と出会えたんだ！
明るく話すユーノ。」

そうスクライアのみんなや高町家の人達が言ってくれた。

「だから、今は寂しくなんかねえんだ。」

「そうなんや…。」

Sideはやて

ユーノ君の話を聞いて胸を締め付けられるような感じやった。

私には、両親が死んでしまい一人暮らしやが、まだ記憶は残ってた。

けどユーノ君は、最初から一人で生きてきたんや。それは、とてもツライ事や…。

だからユーノ君の事を家族と言ってくれる人達が現れて、嬉しいと思っとな、羨ましいとも思っでもうた。

自分にはそう言う人達はいなかったからや。

「そうなんや…。」

私はこれかも一人なんやろうか？

「ああ、後、はやてに言っておきたい事があるんだ！
えっ？なんやろ？」

Side out

「なあ、はやて？」

俺ははやてに伝えなきゃならない。

「何や、ユーノ君？」

「一人が慣れたとか無理な事言うなよ？」

「！！私、無理なんて思ってへんよ？」

「嘘だな。」

「な、何でそんな事言えるんや！」

感情が高ぶるはやて。

「人ってのは、必ず一人では生きられないからさ。」

「そんな事あらへん！現に私は、今まで一人で生きてきたやけど、無理なんて思っただ事なんてないわ！」

どこか苦しそうに話すはやて。

「なら、何で俺を呼び、自分が一人だと伝えた！」

「そ、それは…。」

「答えは、簡単だ！はやての心が、無意識に叫んでたんだよ。“一人は嫌だ”てな！」

「！！」

ハッ！と反応を示すはやて。

「はやては、自分が気づかない内に、助けを求めてたんだよ！だから、俺に伝えたかったんじゃないのか！？」

俺は一度とめ、力を込めて言った。

「孤独の中にいる自分を引きずり出して欲しいて！」

「！？（そうや。私は、寂しかったんや。家族もない、足のせいで友達もない。何もかも諦めてもうてた。）」

だから！

「（誰かに助けてほしかったんや！無理だと思っても、助けてほしかたんや！）」

自分の気持ちに気づいたようだ。

「はやて？」

ユーノがはやてに話し掛ける。

「ありがとうユーノ君。私、意地を張っただけやった。自分は、大丈夫やって…。」

「そうか…。でも、本当の自分の気持ちに気づいたんだろ？」

改めてはやてに質問をした。

「勿論や！だから、ユーノ君！」

今度は、はやてが何か言いたいそうだ。

「私の友達に、‘家族’になってくれへんか！」

……いきなり、友達から家族にグレートアップした。

「いや、何故に家族宣言！」

色々飛ばしすぎだろ！

「私、もう一人は嫌なんよ？だから、ユーノ君に家族になってもらいたいんや…。」

今にも泣きそうな、はやてが話す。

「ちょっ！はやて！」

何か非常にまずい女難が気そうなんだけど！

「それとも、私なんかじゃ嫌なん？」

涙目＋上目使いで聞いてきた！

なんか、俺がいじめてるみたいなんだけど！何この罪悪感！俺何かした！

心の中で葛藤するユーノ。

「ユーノ君？」

今にも泣き出しそうなんだけど！

「わかった！家族にでも何にでもなってやるぜ！」

俺は、ついに言ってしまった。
はやての反応は…。

「そうか。嬉しいで、ユーノ君♪」
完全にさっきまでの素振りがなくなっていた。

「演技かあああ！」

「いや、ユーノ君の家族宣言。とても格好よかったわ！」

「やかましい！この狸娘があああ！」

「うわ、ユーノ君に襲われる♪」

そう言い逃げ出すはやて。

「待てコラア！」

「捕まらへんで♪」

そこには、楽しそうに走り回る二人がいたそうだ。

「本当にありがとうなユーノ君♪」

「……………」

またまた変わってなのは達…

「「ムツ…。」」

何やら、変な電波を感じたようだ。

「ユーノ君、別の女の子と話してる気がするの！」

「確かにそうかもしれないわね！あのバカなら！」

「ユーノ君たら、一体何をしてるのかな？」

教室の中で叫ぶ三人。

「あ、あの！高町さん達！」

突然クラスメートの男子が話し掛けてきた。

「「何!?!」」

凄い気迫で反応する三人。

「あ、あのユーノって誰なのかな? 出来れば教えてほしいんだけど」

男子がそんな質問をしてきた。瞬間に…

「よくぞ聞いたああああ!」

「貴様は英雄だああああ!」
などと叫び声があった。

今、話している男子と叫んだ男子達は、なのは達のファンである。
彼女達に何回も出てきているユーノについて詳しく知りたいようだ。

まず、まずか

「何でも、教えてくれたり相談に乗ってくれる優しい、男の子、だよ♪(本当は、それだけじゃないような気がするけど、まだよくわからないんだよね。)」
考え込んでるまずかを無視して

「男だとおおおお!」

「しかもベタ褒めだああああ!」

…次にアリサ

「私が遠慮せずに話せる相手ね! 後、何かほっとけないのよね!」
でも、何かモヤモヤするのよね。それだけじゃ満足しないような。」

「こちらも考えてる事は、同じなようだ。」

ー遠慮しないってどういう意味だあああ！

ーしかもほっとけないだとおおお！

こちらにも相変わらずだ。

最後になのは

「ユ、ユ、ユーノ君は大切な人なの！（別に間違っていないから大丈夫だよね！）」

内心、焦るなのは。

ー大切だとおおおおお！

一番の砲撃を喰らわし、男子達は撃沈した。

「何なの？」

「知らないわよ。」

「それより、次の授業の準備だね。」

何事もなかったように話しを進める三人だった。

一方男子は…。

ーユーノに鉄槌おおおお！

ーうおおおおおお！

変な集会が出来ていた。

ーーーーーーーーーーーー

そんでもってユーノ達…

「ブワックション！」

「またかいな！本当に風邪ひいとりんやないの？」

「かもな。何か変な悪寒がしたからな。」

現在、俺達は鬼ごっこをやめて庭にいます。

「次は何をするんだ？」

「そうやなく。」

考え事をしていると

「にゃ〜。」

突然、猫が現れた。

「あっ！ユーノ君！猫やで可愛いなあ〜♪」

「まあ、確かに。でも、野良猫だから逃げんじゃね？」
そうなると思いきや

「にゃ〜♪」

猫の方から近づいてきた。

「うわ〜可愛いなあ〜この猫〜♪」

猫を撫でるはやて。

「人懐っこい猫なのか？」

疑問に思いながらも俺はポケットに手をつ込んだ。

「どないしたんユーノ君？」

「あっ！あつたあつた！」

俺は猫にあげる魚ようのエサの袋を取り出した。

「どこからだしたんや？」

「企業秘密だ。」

会話をしていると

「にゃ〜♪」

猫がエサに反応して飛びかかってきた。

「うわっ！ 挙げるから落ち着け！」

俺は袋を開け手のひらにエサをあげた。

「にゃ♪」

猫は嬉しそうにエサを食べている。

「ユーノ君って動物好きなん？」

「別に嫌いじゃないけどなんでだ？」

「すぐにエサをあげたからや。」

「いや、近づいてきたから、腹減ってんじゃねえかなーと思ったからな。」

「えっ！それが理由なん！」

他に何があんだよ？

「おーい？ いい加減舐め終われよう。」

今だに手のひらを猫が舐めている。

「懐ついたんやないの？」

「そうなのか？」

な〜んてふざけていると。

「にゃ♪」

猫が寝転び始めた。やっと解放された。

そして猫が背中を地面につけ、腹を出したので、俺は近寄り腹を撫でながらある事に気づいた。

「メスカよ…。」

なんて言ったら…

「にゃー！」

「ぎゃあああああ！」

猫におもっいきり攻撃されて、逃げて行った。

「大丈夫かユーノ君？」

「俺が一体何をした…。」

攻撃された手をさすりながら考える。

「うーん、ユーノ君が猫のある所を見てたせいちゃう？」

「つまり、猫は恥ずかしくて逃げた？」

「多分、そうや。」

…俺の女難て動物だろうと関係ないんだ。

「気おつけよう…。」

新たに決意をするユーノであった。

—————

「んじゃ、もう帰るから。」

結局、一日いてしまった。

「うん♪今日はありがとうなユーノ君♪」

「どう致しましてだな。」

「あっ！後、私明日からちよつと用事あるから遊べないんよ。」

「そうか。わかったよ。なら、また今度な！」

「うん♪今度は泊まりに来てな♪」

「そんな時は、なのは達を連れてくるぜ！」

なのは達の事は、話してあります。

「それは楽しみやわゝまたな。」

こうして長い一日は、ジュエルシードの反応もなく終わりを向えた。

オマケ

Side猫？

「ううゝ恥ずかしかったよ。」

私は、一時、人間の姿に戻っているけどきつと顔が真っ赤だ。

そりゃあエサを貰った時は、嬉しかったし顔も性格の方もよかったけど

「私の大事な所をガン眼されちゃった／＼／。」「
こ、これは、あの子に責任とってもらわないと！

「（アリア！早く帰ってきなさい！）」「
うわっ！ロツテからだ。早く帰らないとね。

とても大変な一日。(後書き)

反省会

「作者！話し全然進まねえぞ！」

「何を焦っている？」

「早く無限書庫にたどりつかねえと面倒になるからだ！」

「今回で、その安息の場は落ちたがな…。」

「どういう意味だ！」

「また次回」。

キャラは個性的！（前書き）

C o u n t ジェルシード 現在ユーノが持っている数は

六個！

キャラは個性的！

暇な憑依者ユーノだ。また、やることなくってしまった。なので！

「遠くに行ってみよう！」
久しぶりにおふざけはいました。

現在、俺はまた出掛けています。ジェルシードが出るのではないかと思ったのですが。

「何か新たな女難な予感が…。」
要らぬ予感だけが、ビシバシ感じている。

キーーーーー！

「……出て嬉しいんだが、何故俺が女難について考えてる時に、反応しやがる…。」

渋々俺は、現場に向かい出した。

現場についてみれば、ツインテール娘にデバイスを向けられ獣耳女が俺に脅迫をしている。

「あなたは、何者？」

「もう少し、安全に聞けないのか？」

「なんだいその言い草は！聞いてるんだから答えな！」

いや、デバイスを向けられれば、誰でもそう思うぞ？

何故、このような状況になっているかと言うと

現場に着いた時には、既に封印されていた所に俺が来てしまい怪しく思ったそうだ。

「ハイッ！俺は、お前らの方が変だと思うぞ！」

俺は、手をあげながら反撃を開始した！

「な、何で？」

「説明しなよ！」

フッ！俺を敵に回したことで後悔させてやるぜ！

「まず、獣耳女！」

「あたしに言ってるのかい！？」

他に誰がいんだ！

「お前のコスプレは、ズバリ‘犬’だ！」

「誰がコスプレだああ！コレは自前だよ！何よりあたしは、狼だよ！」

「嘘つけ！そんな立派な犬耳つけて誤魔化すんじゃないね！」

「犬でもなければ、付けてもないよ！」

「お手！」

俺は、獣耳女の前に出て言ったら

「ワン！」

普通に返してきた。人間の姿でやると凄いシニールだな。

俺はニヤリと笑うと向こうは、ハッ！と気づいた。

「ハッハッハッ！お前は、完全に飼いならせた犬だ！鳴き声まで完璧だったな！」

俺は高らかに相手に言う。

「ち、違う！今は…！」

「言い訳は、見苦しいぞ、“犬”！」

俺が力を込めてトドメをさしたら。

「あたしは、狼なのにいいいいいい！」

泣きながら、崩れていった。

フツ！余裕だったな。次は、ツインテールだ！

「次にツインテール娘！」

「ハッ、はい！」

思わず、力がこもってるようだ。

「その格好、恥ずかしくないのか！」

「一番、ふれてほしくない所を言ってきた！」

そんな事知るか！

「年頃の女の子が、その格好とは、お前はと言う趣味をしている
！」

「こ、コレは、バリアジャケットだから関係ないよ！」

「否！それは、自分で考えたデザインだろ！」

「うっ…。」

動きが止まったな、どうやら当たりのようだ。

「つまり、お前は過激な格好が好きなんだ！」

「わ、私は…！」

「反論するな！自分に素直になれ！」

ここで、俺は災厄の核爆弾を言った。

「“痴女”と認めろおおおお！」

「ひどいよおおおお！」

同じく泣き崩れてしまいました。

カンカンカンカンカン！

俺、勝利！まさに外道だったぜ！

スッキリしたようです。

—————

「おい、いい加減泣き止めよ？」

俺は、今だに泣いている。二人組に言った。

「誰のせいだと思ってんだい！」

「ひどすぎるよ…。」

さすがに、かなり悪い事をしてしまいました。

「スマン、いきなり武器を突きつけられたからさ。」

「あっ！ごめんなさい。よく話しも聞かないで、武器を出して。」

「いや、いいよ。俺もかなりひどい事、言っちゃったからな。」

「一応、自覚はしてるみたいだね？」

「ああ。改めて謝る。本当にすまなかった！」

俺は頭を下げて謝った。

「こちらこそ、ごめんなさい！」

「あたしも、いきなり怒鳴ってごめんよ！」

お互いに謝り、小さな戦いは終わった。

—————

「ユーノは、魔導師なのかい？」

「ああ。後、フェイトもそうなんだろう？」

「うん。後、アルフは私の使い魔で家族なんだ。」

あの後、打ち解けてお互いに自己紹介を終えて色々話している所だ。

「でも、何でジェルシードを集めてんだ？」

俺は疑問に思った。何を目的で、集めているのか。

「それは（ぐぎゅるるる！）……。」「

フェイトが話し出そうとしたらアルフが、腹を鳴らした。

俺とフェイトは、ジト目でアルフの事をみた。

「ごめんよー！」「

はあーしょうがないな。

「そろそろ昼だし、何か食いに行こう。奢ってやる。」「

「ホ、ホントかい！」「

アルフが尻尾をふり、耳を動かしている。相当、嬉しいみたいだな。

「アルフ！ダメだよ。ユーノに迷惑かけたら。」「

フェイトがダメと言ってきた。

「フェイト、遠慮しなくていいぜ？さっきの詫びがしたいんだ。」「

「でも（ぐぎゅるるるる！）……／＼／＼！」「

今度は、フェイトからだ。

「クッククッ。どうやら聞くまでもないみたいだな？」「

「わ、笑ないでよユーノ！」「

顔を真っ赤にしながら怒るフェイト。

「ユーノ！早く行こうじゃないか！あたし、お腹が減ってしょうがないよ！」

そう言い、俺の頭に胸を押し付けるように抱きついてきた。

モニユ！

「って！アルフ！胸を押し付けんじゃね！」

「なんだい、いいじゃないのさ。ユーノも気持ち良いんじゃないのかい？」

何て事を言ってきたやがるこの狼は…。

「アアア、アルフ！ユユ、ユユユーノに失礼だよ！」

フェイトは目の前の光景を見て恥ずかしくて顔が真っ赤な様子だ。

…純情すぎるぞフェイト。痴女と言った事をここで、深く反省するぜ。

「何でだい？男は、こういうのが好きなんじゃないのかい？」
何だその知識は…。

「成人した男にやってやれ。」
襲われるだろうがな…。

「わかったよ！ユーノが成人した時、またやってあげるよ！」
「何でそうなんだ！」

「なんだい？やっぱり今、やってほしいのかい？」

モニユ！

「だから押し付けんな！」

また、胸を押し付けてきた。これじゃ、らちがあかない。

「フェイト！この狼なんとかしてくれ！」

ここは、フェイトに助けてもらうしかない！

だが！

「いいな～アルフ。あんなにユーノと仲良く出来て…。」

どこかに飛んでいるようだ。

「いや、戻ってこいフェイト！後、何言ってるか聞こえねえ！」

内容は、聞こえていないようだ。

「私だって、仲良く話したいし、構ってもらいたいよ…。」

相当、アルフが羨ましいそうだ。

「フェイト！頼むから戻ってこい！内容わからんが、多分叶えられるぞ！」

「ホントユーノ！」

「ハヤッ！」

さすがフェイトだ。スピードの速さは伊達じゃないな。

キーーーーー！

「「「！！」」」

ジェルシードの反応だ…。まさか、連続で同じ場所に来るとはな。

「二人とも構えろ！昼飯の前に、軽い運動をしなきゃいけないみた

いだ。」

俺は、軽く飛びながら構えをとる。

フェイトは、バルディッシュから黄色の刃を出し構え、アルフも拳を構えた。

「グオオオオオオ！」

角をはやしたゴリラみたいなやつが現れた。ついでに、デカいな。

「どうするんだいユーノ？」

アルフが聞いてきた。

「何で俺？」

普通、フェイトだろ？

「私からもお願いユーノ。」

フェイトもかよ…。

「決まってる！三人一気に決めるぞ！」

「「うん！／＼あいよ！」」

俺達は、向かっていった。

「ハアアアアア！」

フェイトがお得のスピードを活かしながら、ハーケンセイバーで攻撃していく。

「グアアアアア！」

ゴリラは、弱ってきている。

「アルフ！」

「まかせな！」

今度は、アルフが向かっていった。

アルフは敵の中心目掛けて右ストーレートを喰らわせ、相手が少し浮いた。アルフは、左足を蹴り上げて宙に浮かせた。

「ユ一ノ！」

「決めてやる！」

俺は両手を前に構えた。

「チェーンスバインド！」

両手から合計4本だし相手の四肢を拘束して

「おらあああああ！」

地面に叩きつけ敵は、バウンドを起こすほど叩きつけられた。

「これで終わりだ！」

俺は体に楯を纏い、右足を出しながら急降下した。

「うおりあああああ！」

ドカ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ン！

ユーノが地面に到達すると同時に砂吹雪がまった。

「ヤバイ、やり過ぎた…。」

ユーノの手には、ジェルシードが握られているが、周りには、隕石の落下みたいなクレーターが出来あがっていた。

1
1
1
1
1
1
1
1
1
1
1
1

「何は、ともあれ終わってよかった。」

「最後は、やりすぎなんじゃないかい？」

「でも、ユーノ格好よかったよ！」

俺達は、逃げるように現場を去り、飲食店に向かう所だ。

「ありがとなフェイト！嬉しいぜ！」

「えへへ…♪」

フェイトは、感謝された事に喜んでいようだ。

「ね、ねえ！ユーノ！」

フェイトが声を上げてきた。

「何だ？」

「手、繋いでもいいかな！？」

やたら、必死に聞いてきた。

「勿論！ほら♪」

俺は、左手を差し出した。

「うん♪」

フェイトも右手を出して、手を握った。

「仲良いねー二人とも。あたしも、まぜておくれよ？」

一人のけ者にされたアルフが言ってきた。

「当たり前だろ？ほら♪」

俺は右手を差し出した。

「ありがとねユーノ♪」

左手でアルフは握ってきた。

「よし！改めて昼飯を食べに行くぜ！」

「「うん！／あいよ！」」

そこには、楽しそうに歩く三人がいたそうだ。

余談だが、フェイトはジェルシードを三つ持っていたようだ。

後、どこかの猫がユーノ達の事を嫉妬や羨ましそうな目でみていてこんな事を言っていた

「私だって胸あるんだからねー！」

勿論、なのは達にもユーノの女難電波も届いていると思う。

キャラは個性的！（後書き）

反省会

「またかよ！」

「リアルが忙しいぜ」

「無視すんな！」

「これ、真面目な話しだからヨロ！」

「マジかよ……。また次回だ！」

女は基本、積極的だ！（前書き）

C o u n t ジェルシード 現在ユーノ達を持っている数は

十個！

女は基本、積極的だ！

こんにちは、昼食をとっている憑依者ユーノだ。
一人だけではなく、さつき会ったフェイトやアルフも一緒だ。

「そろそろ話してくんねえか？何故、ジェルシードを集めていたのか？」

俺達は、昼食を済ませ本題に入った。

「私達、家族と旅行をしにこの星にきたんだ。」
旅行中だったのか…。

「そこで、偶然あたし達は、そのジェルシードの現場を目撃したわけだよ。」

そこで、ほっとけなくてジェルシードを回収してたわけだ。

「ありがとな！後、すまない！」
俺は、感謝と同時に謝罪もした。

「な、何でユーノが謝るんだい？」

「私達、何か悪い事した？」

二人が疑問に思っている。

「いや、せっかくの家族旅行を台無しになっちゃったからさ。」
俺が、ジェルシードをきちんと管理していれば迷惑かける事なかったんだけどな。

「ううん！気にしないでよユーノ！私達が好きで、やってた事だよ。
母さんの許可もとってあるから！」

フェイトが慌てた様子で、俺に言ってきた。

本心で言ってるんだろうな。やっぱり、優しいなフェイト。

「それに困っている人がいるなら、助けるのは当然なんじゃないのかい？」

今度は、アルフがそう言ってきた。

全く、主と似てお優しいな。心配してくれるんだからな。

「わかった、降参だ。素直に喜ぶ事にする。ありがとう二人とも♪」
俺は、笑顔で感謝の言葉を言った。

「うん♪」

「それでいいんだよ♪」
二人も笑顔で返してくれた。

そこでまた、数分会話をし、時間は過ぎていった。

—————

「そろそろ帰らねえとなく。」

もう、夕方だ。

「えっ！ホントかい！もう少しいいんじゃないのかい？」

「俺もそうしたいが、また今度にしてくれ。」

「な、ならユーノ！これ！」

フェイトは、俺に紙を渡してきた。その紙には、ある住所が書かれていた。

「えっ？フェイト。これは？」

「そ、それは私達の住んでいる所だよ！明日、もし暇なら遊びにき

てほしいんだ！」

顔を真っ赤にしながら必死に話すフェイト。

「いや、悪いんじゃない。」

俺は、相手の事を気づかって弁解しようとするが…。

「大丈夫だよ！母さん達にもユーノを話したいし、きっと喜んでくれるよ！」

凄い、フェイトってこんな積極的だったとは…顔が真っ赤だけど。

「じゃあ、明日待ってるから！」

そう言い、俺に背を向けて走っていった。

「つて！俺、何も答えてないんだけど！決定事項なのか！」

俺は、フェイトに大声で叫ぶが、全く聞こえていないようだ。

「待っておくれよフェイト！」

アルフも遅れて走り出した。

「あっ！ユーノ！明日、楽しみに待ってるからね♪」

アルフもそんな事を言い走り去っていった。

「結局行く感じになっちゃった！ヤバイ女難がくる予感がしてきた！」

もう、明日の事について思い悩んでいるユーノの背後から、殺意のオーラを出しながら、迫ってくる気配がある。

「（誰だ！）」

俺は、瞬時に気持ちを切り替え振り向いたら

「さっきの女達は、だれよおおおお！」

金髪の修羅が俺に跳び蹴りを放っている。

「つて！アリサか、ぎいやああああ！」

俺は、跳び蹴りをよけられず顔面直撃をした。

…なんなんだ今日。

—————

「どういう事か説明しなさい！」

さて、どう言い訳をするか…。正直に言ったら「カッ消す！」の如くやられるような気がするんだが…。

ちなみに、なのはとすずかは用事でいないようだ。

「あいつらは、俺達と同じくジュエルシードを集めてるんだ。」
正直に言って、適当に誤魔化すしかないな。

「へえ。いつ知り合いになったワケ？」

「ついさっきだ…。」

オーラを押さえくんねえかなアリサ。

「それにしても、仲良さそうだったわね？何か約束もしてたわよね！」

ピンポイントに攻めきやがるな。

適当に誤魔化すしかない！

「そりゃあ、回収してくれたんだから嬉しいに決まってるだろ！」

「なら、さっきの約束は、何なのかしら？」

「また今度、手伝うという約束だ！」

「本当なんでしょうねー！？」

頼むから、諦めてくれよ！俺だって意味わかんねえだから！
数十分、それは続いた。

「全く、アンタは暇さえあれば、女と話すわけ！？」

「今も喋ってるだろ？」

「適当に誤魔化すな！」

俺は、何故かアリサを家まで送ると言う任務をやっている。

話さないかわりに、送って行けと言う話した。

「てか、何でそんなに気になんだよ？」

アリサがそこまで、怒っている理由がわからなかった。

「そ、それは…（私だってわかんないわよ！でも、アンタが知らない女の子と話していると凄くムカつくのよ！）。」
顔を真っ赤にしながら心の中で怒鳴るアリサ。

「んっ？どうした？」

「な、何でもないわよ！このバカ！」

「喧嘩売ってんのかオマエは！」

そう言い、軽いじゃれつきあい始める二人。

だが…。

キーーーーー！

ここにきて、ジェルシードの反応が出た。

「行くぞアリサ！」

「わかってるわよ！」

俺はすぐに結界を張り、アリサと一緒に現場に向かった。

現場に着いた俺達がみたものは…。

「あれ、犬よね？」

「とても凶暴そうに見えるがな。」

目の前には、巨大な犬がいた。

…アルフじゃねえだろうな。

「何だ貴様らは！」

訂正だ。もろ男の声でした。

「ユ、ユーノ！犬が喋ったわよ！」

「落ち着けアリサ。ジェルシードの影響だろ。」

さて、コイツの願いはなんだ？

「失せろ！ガキがああああ！」

牙を出しながら迫ってきた。

だが、この程度で遅れは取らない！

「アリサ！」

「わかってるわよ！」

アリサは、犬の前に立って待っている。

犬は、アリサの前に噛みついてきたが、アリサは、両手の炎を噴射させ、上空に逃げたが

「ハァア！」

「グワァ！」

また炎を噴射させ、犬の頭にかかと落としを決めて、ダメージも与えたみたいだ。

「さて、俺もやりますか。」

俺の手には、【ドラゴンナイトのカードデッキ】が握ってある。

カードデッキを前に出した。

バチバチ！と電流と共に腰にベルトが巻かれていた。

「変身！」

カードデッキをベルトに装着すると、デッキは回り出し、俺の周りにも俺を包み込むような光がでた。

「っしゅあ！」

変身が終わり、そこには龍を纏った、騎士、がいた。

「さて、やりますか！」

俺は、犬に向かって右フックをかました。

「ぐっ！」

犬は、少し横に飛んだ。

「なめるなよ！グワ！」

突然犬は、オレンジ色の銃弾共にまた吹き飛ばされた。

「油断してるとカッ消すわよ！」

アリサ…、イメージ合いすぎだ。

「ぐっ！人間が！」

また犬が迫ってきた。

『Sword Vent!』

俺は、すぐにカードを読み込ませ武器を出した。

「ハアアアア！」

俺は、ドラグセイバーで相手の事を切り刻む。

「ぐあああああ！」

犬は、後退していくが

「怒りの爆発！」
スコッピオ・ディーラ

アリサが、憤怒の炎を連射し、極太のレーザーで追い討ちをかけた。

「ぐぎやあああ！」

直撃をして相手は倒れた。

「倒したの？」

アリサが質問してきた。

「いや…。」

「ま、まだ…だ！」

犬は、苦しながらも立ち上がっている。

「！、ちょっとアンタ！そんな無理したら死ぬわよ！」

戦っている最中なのに、相手の事を気づかうか…。やっぱ、あのボス二人に似てる要素を持ってるなアリサは。

「悪いが…俺…は、死ん…でる…と…同じなんだ。」

犬が苦しまみれに言葉を吐いた。

「どういう意味よ！」

アリサは、訳がわからない様子だ。

俺は、犬にある質問をした。

「寿命なのか？」

俺が、喋ったらに犬は頷いた。

「どういう事よユーノ！」

「簡単だぜアリサ？ ジェルシードは、この犬の“生きたい”と言う願いを叶えた。」

「えっ？」

アリサは、あまりにも以外な話しに唾然となってしまった。

「誰でも思うだろ？ 死にたくないっていう願いがさ？」

そう、人間など関係なく生きとし生けるものは、みんな“生きたい”に決まってる。

「で、でも何で犬は、私達を襲ってきたのよ！」

まだ、信じたくないようだな…。

「忘れたのか？ ジェルシードは、願いを歪ませる。本人の意志とは関係なしに。」

「そ、そんなの可哀想よ！ コイツは、ただ生きたいだけなのに！」
涙を流し始めるアリサ。本当に優しいなお前は…。

「だが、ジェルシードは、それを許さない。現にヤツは、ボロボロなのに動こうとしている。完全に振りまわされてる証拠だ。」

だが、俺は遠慮はしない。こんな事が、あるとこの‘世界’に入る前に聞いたのだから。

「ユーノ、あの犬どうやったら助かるのよ？」
助かるか…。

「助ける道は、ただ一つだ。ヤツにトドメをさすことだ。」
「な、何でよ！」

「このまま放っておけば、周りに被害がでる。それは、出来ない。」
アリサは、何とか方法がないのか考えている。

「少年よ。俺を倒してくれないか？」
犬が話しだした。

「何いつてんのよ！まだ助かる道はあるわ！」
アリサは、必死になっている。

「いいんだよ少女よ。俺は、長くない。石など関係なしに死んでいくだろう。」

「そんな…。」
アリサは、崩れ落ちてしまいそうになる。

「少年。では、トドメをさしてくれ。」
「ああ…。」

俺は、デッキからカード引いた。

「最後に言っておきたい。」
犬が突然話した。

「何だ？」

「俺を止めくれてありがとう。誰も傷つけないですんだ…。」

……この、バカが！

『Final Vent!』

「グオオオオオオン！」

ドラグレッターが現れ、俺を囲むように飛んだいる。

「ハアアアアア！」

腰を低く落とし特徴的な構えをとる。

「タァ！」

俺は空中に舞い上がり、蹴りの体制をとり

「うおりやあああああ！」

ドラグレッターの火球を受けながら必殺技の【ドラゴンライダーキック】を喰らわせた。

ーありがとう。

犬のそんな声が、聞こえたような気がした。

ーーーーー

俺達は、あの後残った犬の遺体を吊っている。

「ねえ、ユーノ？」

「何だアリサ？」

「私達って正しい事をしたのよね？」

「ああ、そうだ。」

「なら何で私はこんなに悲しいのよ…。」

アリサは、また涙を流す。

「アリサ！そいつの前でもう泣くな！」

俺は、アリサの手を握った。

「ユーノ？」

アリサは少し驚いている様子だ。

「お前が泣いていたんじゃ、そいつは、いつまでも報われねえんだぞ！」

「でも、私達がやったことは…！」

「ああ、確かにヤツの寿命を縮ませただけだ…。」

「なら…！」

「でもな！」

俺は、一度区切りを入れる。

「あのまま、ほっというて暴れるのがヤツの願いじゃなかったハズだ！」

「…！！」

そうアイツは、そんな願いじゃなかった。

「だから、アリサ。これ以上、責めるな！俺達は、アイツの事を形はどうあれ、助ける、事ができた。」

そう、だからアイツは最後にお礼を逝ってしまった。俺は、そう思いたい。

「ユーノ、私達は助けたのよね？」

アリサが聞いてきた。

「ああ、勿論だ！だからアリサ！」

俺は、アリサと向き合い告げる。

「自分の成すべき事に“覚悟”を持って生きろ！」

「！！（私は甘えていたのかもしれない。何とかなる、悲しい結末なんてない。）」

でも！

「（私自身がそれと同等の覚悟を持っていけないと意味がないじゃない！）」

アリサは、涙を拭い再び俺に向き合った。

「ユーノ！私の“覚悟”をしっかりと聞きなさい！」

「ああ！」

「私は、もう迷はないわ！自分の成すべき事、どんなにツライ事があっても…。」

そしてアリサは、力を込めて宣言する。

「“覚悟”を持って生きて行くわ！だから、ユーノ！」

そこには、さっきの泣き顔ではなく決意の顔だ。

「これからの私をちゃんとその目に焼き付けなさいよ！」

「わかったぜ！これからもお前の覚悟を見届けてやるぜ！」

俺がそう答えると

「当然よ／＼／＼！」

アリサは、俺に抱きついた。

その顔は、とても嬉しそうだったようだ。

「……………」

「さて、やっと着いたな。」

「全くね。」

俺達は、やっと家に着いた所だ。

「ユーノ！今日は感謝するわ！自分の気持ちに気づけたからね！」

「お嬢様の役に立てて光栄だ。」

少し、おふざけをいれる。

「何気に違和感ないわね。」

「マジか…。」

好評だったみたいだ。

「ユーノ？」

「何だ？」

まだ、何かあんのか？

「疲れたから肩を貸しなさい！」

「ハイハイ。」

最後まで聞いてやるか。

俺は、アリサに近づいたらいきなり両手で、俺の服を掴み引っ張った。

「へっ？」

チュッ！

その勢いで、アリサは俺の頬にキスをした。

「ア、アリサ…？」

な、何故に…。

「ご褒美よ／＼／＼！私にこんな事してもらったんだから喜びなさい！」

いや、あの、色々と思考が回らないのだが…。

「またねユーノ！後、ちゃんと私を“魅なさいよ”！」
アリサはそう言うと言走り去って家の中に入って行った。

一方ユーノは…。

「俺にどうしろてんだー！」

一人、意味がわからず叫んでいたそうだ。

女は基本、積極的だ！（後書き）

反省会

「またなのかー！」

ー順調みたいだな。

「お前が、そうしてんだろーが！」

ーこの調子で逝け！

「字が違うぞ！」

ーまた次回をお楽しみに！

問題は抱えてるモノだ！（前書き）

C o u n t ジュエルシード 現在 ユーノ達が持っている数は

十一個！

問題は抱えてるモノだ！

どうも。最近、毎日が忙しい憑依者ユーノだ。

またまた俺は、遊びの行く予定ができてしまった。：強制的にな。

さて、今俺は、フェイトに教えもらった住所のメモを見ながら歩いている所です。

「あっ！ユーノ！こっちだよー！」

俺の歩く先に、フェイトが声を上げながら、場所を示していた。

「なあ、フェイト。もしかしてずっと待ってたのか？」

俺は、フェイトに追いつき話している所だ。

「うん♪来て来れるのが楽しみだった♪」
なんていい子なんだ…。思わず感動だ。

「ありがとなフェイト！今日は、楽しく遊ぼうぜ！」
「うん♪」

そして俺達、笑い合いながら、足を進めて行った。
ーーーーー

「ここが、私達の住んでいる所だよ。」

場所は、マンションだが、この部屋だけは大きさが違うようだ。

「中に家族がいるのか？」

「うん。中に入ったら紹介するね！」

そして、扉を開けた瞬間…。

「フェイトー！ー！」

黒髪の美人のお姉さんが出てきてフェイトに抱きついた。

えっ？誰この人…。

「か、かか母さん！恥ずかしいよ！」

フェイトは、顔を真っ赤にしている。

てか、母親かよ！誰から見ても二十代にしか見えないんだけど！ついでに女難の予感が！

「ケガはなかった！誰か怪しい人に声掛けられてない！」
抱きつくほどの心配って…。絶対この人、親バカだ。

「だ、大丈夫だよ！何よりユーノが一緒だったから！」
そう言い、ユーノの方に視線を送らせる。

……フェイト！お前俺を殺したいのか！親バカな人に、異性を紹介する事が、どれだけ自殺行為な事を！
心の中で叫ぶユーノである。

「アナタが、ユーノね？」

フェイトを離し、俺に近づいてくる。

「はいっ！」

思わず力が入ってしまった。だって迫力が…。

考えてる間に俺の前まできた。

「ありがとう！」

ムギユ！

「フグッ！」

突然、真正面からこの人の豊富な胸に抱き締められた。

いや、冷静に語ってる場合じゃないだろ！

「ムグ！ムムムグ！」

抜け出そうするのだが、ガッチリ捕まっている。

一方母親の方…。

「あ…アン♪ユーノ君って積極的なのね♪」

ユーノが胸の中で、必死に抵抗してる上に、息も荒くなっていたので、気持ちよく感じてるらしい。

「ムン！ムムムング！ムグ！（やかましい！離せ！やけに艶ぽつい声を出すんじゃないか！）」

関係なしに、怒っているようだ。

「ア…ウン…ヤン♪ユーノ君たらそんなに頑張らなくていいのよ♪」
ユーノがさらに動いたせいで、こっちも相変わらずである。

一方フェイト…。

「…／／／。」

目の前の光景に言葉でず、顔を真っ赤にしてオーバーヒートをしている。

純情すぎる子です…。

永遠に続くと思われたが…。

「何をしているんですかプレシア！」

突然、帽子を被った女の人が、母親をひっぺ剥がした。

「ヤン♪」

「プハァ！」

やっと解放された！後、声を出すな！

「あら、リニスどうしたの？」

顔がやけに艶っぽい感じて聞いている。

「フェイトのお友達になんて事をしてるんですか！」

顔を真っ赤にしながら怒っている。

「あら？ほんのお礼よ♪ユーノ君も気持ちよかったでしょ？」

「どう言うお礼だよ！もっと平和的なのないのか！」

やっと反論する事が出来たユーノである。

「ほら！彼もそう言っているのですから謝って下さい！」

「ちよっと待ってくれないかしら！」

突然、母親が話しの流れを止めた。

「何だよ？」

俺は、渋々聞いてみた。

「まだ胸の余韻が…♪」

そう言い、胸を強調している。

「プレシアアアア！アナタと言う人はあああああ！」

……遊ぶ前から、この仕打ち。俺の精神持つのだろうか？

心配になるユーノで合った。

「おい、フェイト。いい加減起きろ。」

「……／＼。」

まだフェイトは、放心状態でした。

—————

お約束なのは達……。

「ウフフ♪」

「アリサちゃんが、満面の笑みなの！」

「あんな顔、見たことないね。」

なのは達は教室にいるのだが、唯一アリサだけが笑顔全開で合った。

「ねえ、アリサちゃん？」

なのはは、質問した。

「うん？何よ？」

気持ちを戻すアリサ。

「昨日、ユーノ君と何か合ったんだよね？」
「さすが、そう聞くと」

「ハアっ！ベベベ別に何もないわよ！ユーノだってこれぽっち関係ないんだからね！」

顔を真っ赤にして反論するが、逆効果である。

「嘘はいけないよアリサちゃん！」

「正直に話してほしいの！」

二人とも納得いかないようだ。

「うるさいうるさいうるさい！何もないって言ったらないのよ！（よく考えれば、凄く恥ずかしい事しちゃったじゃない！）」

今さら、思い出すアリサ。

「（でも、ユーノだったから私は…。って違う違う！アイツはただの友達なんだからね！）」

自分の思いを余程認めたくないらしい。…悔しすぎて。

一方二人は…。

「（ううう！ユーノ君てば、絶対アリサちゃんに優しい言葉を囁いたに決まってるの！もっと私にも言ってほしいの！）」

「（アリサちゃんもか…。これは私も遅れていられないよ！早速明日、ユーノ君を家に招待して今よりもっと仲良くならんくちや！）」
それぞれ、思っている事は別なようだ。

後、男子と言えば…。

ーおのれユウユウユウノオオオオオ！

ー貴様はどれだけの罪オオオオオ！

ーお前は、一体なんなんだあああ！

相変わらずである。

ユーノに幸あれ…。

—————

変わってユーノ達…。

「むっ？」

「どうしたんですかユーノ？」

「いや、リニス何でもないぜ。今、不愉快な電波を感じたからさ。」

「大丈夫ユーノ？」

「大丈夫だぜフェイト！」

俺は、やっと当初の目的で遊んでいるのだが…。

「ほら、ユーノ！早く引きな！」

「ユーノ君は、考えこむタイプなのよ。」

家族全員で、トランプをやっている。

ちなみに、昼過ぎだ。

今やっているのは、王道のババ抜きだ。

「さあさあ！早く引いて楽になりな！」

「麻薬の取り引きみたいに言うな！」

何故、こんなテンションなのかと言うと。

実は、一位の人がビリに何でも命令できるというルールを作ってしまったのだ。

ちなみに一位は、フェイトで残っているのは、俺とアルフなのだ。

「急かすなアルフ！今、お前の事を楽にしてやるぜ！」

「やるものならやってみな！」

たかが、ババ抜きでこのテンションである。

「これだああ！」

バシン！

俺は抜いたカードを見る。

「何！ババだとオオオオ！」

「まだまだ、勝負は続くみたいだね！」

クッ！こうなったら師匠達の幸運スキルを…！

卑怯な手を考えていたら…。

「取ったあああああ！」

バシン！

「何いいいいいいいい！」

俺が引かれカードは！

「やったああ！あたしの上がりだよ！」

「負けたあああああ！」

本当に仲の良い二人である。

「じゃあ、ユーノ？命令するね？」

「何でもこい！！！」

覚悟を決めたぜ！

「ユーノ、私の“友達”になって下さい！」

「えっ？」

俺は、突然のお題に驚いたが、瞬時に答えた。

「無理だ。」

それは、否定の言葉だ。

「えっ…。どう…し…て？」

フェイトは、予想もしない答えに泣きそうになっている。

「何て事言うんだいユーノ！」

「ひどすぎますよユーノ！」

「どういう事か説明しなさいユーノ君！」

三人は怒っている様子だ。

いや、だってお前ら…。

「俺とフェイトは、昨日からもう“友達”だろう？」

「えっ！」

フェイトが驚き、他の三人も驚いている。

「だって一緒に戦ってお互いに助けあったり、一緒に飯食って楽しく話したじゃん？」

「う、うん…。」

それに：

「お互いに“名前”を呼び合って楽しく遊んでだ。これは、俺達が“友達”である証拠なんだよ！」

「！！、本当に私はユーノの友達？」

「ああ、勿論だ！それとフェイト！俺に対して遠慮はするな！」
「えっ？」

今度はユーノの言葉にフェイトが疑問に思った。

「わ、私遠慮なんか…。」

「だったら、直接俺に言わなかった！？」

「う、それは…。」

「怖かったんだろ？拒絶されてしまう事が！」

「！！」

フェイトは、驚く。

「ちょっとユーノ！」

止めに入ろうとするアルフ。

「待って下さいアルフ！」

それをリニスが止める。

「何でだいリニス！」

「落ち着きなさいアルフ！ユーノ君にも考えがあるのよ！今は、信じましょう。」

プレシアも止める。

「何でだい！プレ…シ…ア…。」

そこにいたプレシアの顔は、まさしく母親の顔だった。

「信じましょう“ユーノ君”を！」
そう言い二人を再び見守った。

「フェイト！お前が何を抱えているのか俺には、わかんねえ！」
けど！

「本当に友達なら、俺自身の事も信じてほしいんだよ！それが、友達って言うものだ！」

「！！（私は、怖かった。自分の“存在”を認めてくれるのは、家族だけだと思ってた。）」
でも！

「（ユーノは、私に勇気をくれた！私自身の事をふまえて考えてくれてる！ただ、怖がってるだけじゃダメなんだ！）」
フェイトは、決意をした。

「ユーノ！私、言いたいことがあるんだ！」
「ああ！」

「改めて私の友達になって下さい！」
「それは、さっきの罰ゲームの話ですか？」
「ううん！これは正真正銘、私の‘意志’だよ！他の誰でもない、私自身の！」

「そうだフェイト！本当の気持ちを伝えたいなら、遠慮なんてしなくていいんだ！」

「うん！私、わかる事ができたよ！自分自身について！」
その顔に迷いはないようだ。

「だから、ありがとうユーノ、私を気づかせてくれて…。」
そう言い俺に抱きついた。

「どう致しま「ユウウウウウノオオオオ！」っげ！アルフ！」
突然アルフが、後ろから泣きながら、俺の後ろに抱きついた。

「あたし、感動したよ！そこまで、フェイトの事を思っでやれるヤ
ツがいるなんて！」

「わかったから、離てくれ！」
鼻水と胸のコンボが…。

「それにユーノ格好よすぎだよ！あたし、惚れそうだったよ！」
「サラツと凄事言うな！」
本当にこの狼は…。

「いえ！ユーノ、アナタは立派でした！」
「リニスもか！」

「アナタは、昨日会ったフェイトの事を必死に考えてあげてる！」
リニスってこんなキャラだったけ！

「その姿は、とても素敵でした！」
顔を赤らめるなリニス！

「そうよユーノ君。アナタは立派よ。」
「プレシアさんまで…。」

「フェイトが抱えていた問題をアナタは、本気になって解決してくれたわ!」

プレシアさんの顔がまさしく母だ。

「だからユーノ君!」

締めは、大事だぞプレシアさん!

プレシアさんは、力を込めて宣言をした。

「私の“夫”になりなさい!」

「シリアスの空気をぶち壊すなああああああ!」
いきなり、夫宣言をされた。

「か、母さん!何でそうなるの!」

「さっきの流れにそんな選択肢はなかったぞ!」

俺達、二人は質問した。

「単純に今日のユーノ君と過ごしてきて彼を気に入ったからよ!」

「本当に簡単な理由ですね!」

「でも、年の差があるんじゃないのかい!」

「そんなもので、私は止まらないわ!」

「発言が格好よすぎるぞ!」

面倒くさい事になってきやがた。

「ユーノ!」

今度は、フェイトか!

「さっきの罰ゲームのお題だよ！」

ここにきてそのネタを出すのか！

「お題は、母さんの話を断ってね！」

「フェイト！お前は、救世主だ！」

俺は、思わず泣いた。純粹なやつがいて助かった。

数時間もこの話は、続いたそうだ。

問題は抱えてるモノだ！（後書き）

反省会

「作者 あああああ！」

ーカオスだったな…。

「意味わかんناすぎだろ！」

ーすまん。調子に乗りすぎた。

「ホント頼むぞ！」

ーまた、次回をお楽しみに。

本当に子供もか！（前書き）

C o u n t ジュエルシード 現在ユーノ達を持っている数は

十一個！

本当に子供もか！

おはよーございます！憑依者ユーノだぜ！……無駄にテンション高いのは察して下さい。

昨日、色々ありましたが、何事もなく一日が終わりました…。

…本当に何もなかったからな！何か期待するようなイベントなんてなかったからな！

心の中で必死になるユーノである。

「どうしたユーノ？考え事なら相談にのるぞ？」

「何でもないぜ恭也さん！それより早く行こぜ！」

ちなみに俺は、恭也さんと一緒にすずかの家に遊びに行く所だ。

元々すずかとは、遊びに行く約束をしていたのだが、恭也さんも付いて来る事にしたらしい。

「恭也さん。何なんだ大事な話があるって？」

「それは、着いた時にみんなと話す予定だ。」

そう恭也さんは、‘俺’に対して話があるらしい。わざわざ、月村家で話す事なのだ。余程重要なんだろうな。

「まあ、いいけどさ。それが終わったらすずかと遊んでいいのか？」

「ああ、勿論だ。……お前が真実を知っても大丈夫なら。」

最後に小声で言う恭也さん。

…最後は、何て言ったかわからなかったけど、恭也さんつらそうな顔をしている。

「恭也さん！俺なら大丈夫だぜ！」

「何？」

俺は、恭也さんに言う。

「俺は、何が待ち受けていようと決して目を背けたりしない！何があるうと正面から受け止めてやる！」

「！！」

内容は、知らないがきつとツライ話しに違いない。それでも、俺に話してくれるんだ。

俺がすっかりしないとダメに決まってる！

「…ありがとうユーノ。話す前からそんな事を言ってもらえるのが嬉しいぞ。」

さっきまでの悲しい顔はなくなっていた。

「その言葉は、その話題を話し終わった後にしてほしいな。」

「フツ。そうだな。そうするとしよう。」

そう言いながら、話す俺達は仲の良い‘兄弟’に見えていたそうだ。

—————

やっと着きました月村家。相変わらず、罨が凄い。

「ユーノ。気づいているのか？」

罨について言っているんだろ。

「ああ、気づいてるよ。」

「変とは、思わなかったのか？」

「別に。何か事情があんだろ？」

でなきゃ、こんな罨仕掛けないからな。

「ああ。じゃあ行こう。」

「了解。」

俺達は、家に入っていた。

「初めましてユーノ君。私は、月村忍。すずかの姉よ。」

「どうも…。」

現在俺は、広い部屋の中で、月村家の方々と自己紹介をしている。
周りにもメイドのファリンやノエルもいて恭也さんもいる。

すずかは、忍さんの隣にいます。

……何これ拷問か何か！恭也さんの大事な話して完全に死亡フラグ！俺、死ぬのを決意したのか！
またまた、心の中で叫ぶユーノ。

「単刀直入に聞いわ。すずかの事どう思ってる？」

「大事な友達だ！」

俺は、空きを入れる事なく答えた。

「何があっても？」忍さんがまた聞いてくる。

「愚問だな！俺の言葉に嘘、偽りはないぜ！」

何が言いたいのかわかんねえけど、すずかは大事な友達なんだよ！

「そう…。ならすずか、後は任せるわよ。」

「うん。お姉ちゃん。」

今度は、すずかに話を託すようだ。

「すずか？」

いつもとは、比べにもならない暗い顔している。

「ユーノ君、これから私が話す事、最後まで聞いてくれる？」

「ああ。」

すずか、お前は一体何を抱えているんだ？

「……………」

話しは、壮大なものだった。

夜の一族、そして“吸血鬼”。どれも一人の女の子が背負えるはずが内容ばかりだ。

「これが、全てだよ……。」

すずかは、悲しみの顔でいっぱいだ。

「すずか……。」

「怖いよね……。人とは違う私が……。」

その解答に俺は……。

「全然！」

問題なしだとも言える顔で宣言した。

「えっ、な……んで？」

すずかは、驚いているが、顔に笑顔が戻ってきている。

「そこで俺が怖がる意味がわからないのだが？」

「だ、だって！私、人とは違うんだよ！」

「それがどうした！」

「……！」

急に大声で遮った。

「人とか吸血鬼とか俺には関係ないんだよ！俺にとってのすずかは、いつも優しくてみんなの事を常に考えている！…」

「ユーノ君…。」

「それが俺の知っている、月村すずか、だ！今更、自分の正体のせいで、距離を置こうとするな！」

「！！」

そう自分の正体がなんだってんだ！それを言うなら俺の方が恐怖の対象だろ！死人が蘇ってんだぞ！

「すずか、自分を恐れるな！自分自身を恐れてたんじゃ変わりたいくとも変わらないぞ！」

「でも、私一人じゃ…！」

「誰が一人なんて言った！俺が俺達と一緒に背負ってくに決まってるんだろ！」

「！！、ユーノ君…。」

「すずかが、勇気を振り絞って言った事を見てみぬ振りなんてできるワケないだろ！だからすずか！」

頼むからそれ以上抱えこむなすずか！

「自分を好きになってくれ！どんな形でもいい！それが、変われる第一歩になるんだ！」

「！！（私は、嫌いだった。きっと私の正体だけでみんなは、嫌いになるに決まってる。）」

けど！

「（ユーノ君は、そのどっちでもない、私自身を見て答えを出してくれた！）」

すずかの笑顔が、戻った。

「ユーノ君！私、決めたよ！」

「何をだ？」

「私は、もう自分のせいだけで怖がるのはやめるよ！」

「本当に大丈夫なのか？」

「うん♪だってユーノ君と一緒に背負っていつてくれるんでしょ？
“私”を？」

「ああ、勿論だ。だからもう我慢するなすずか…。」

「ありがとう…ユーノ君！」

すずかは、両腕を俺の首に巻き付けるように抱きついた。

一方ギャラリーは…。

「うっ、うっう。」

「泣くなよ、忍。」

「だって恭也ああ！ユーノ君いい子すぎるわよ！あんなに必死にな
って助けてくれる子なんていないわよ！」

「だな。何せ俺の自慢な‘弟’、みたいなものだ。ユーノ、お前は期
待以上の答えを出してくれた。ありがとう。」

感動する恋人達…。

まだ、眺めている四人。

いや、助けてくれないのか！このままだと絞りとられるんだけど！

「ぷはぁ！ユーノ君の血、おいしい…。ゾクゾクしちゃうよ♪」
血を吸い終わり、顔を向き合わせてきた。

その顔は、小学生とは思えない艶がある大人な雰囲気だ。

「す、すずか！」

ヤバイヤバイ！今更になって女難が発動なのか！

「ユーノ！そこから逃げろ！大変な事になるぞ！」

恭也さん、逃げたいんだけどガッチリ捕まって無理です。

「ユーノ君♪」

すずかの顔が迫りそして。

チュッ！

「んっ♪」

「んっー！」

唇にキスされた。

すずか！興奮しすぎだ！

ユーノは、離れようとするが。

レロッ！

「！！（すずかのやつ舌を入れてきやがった！）」

「んっ…んちゅ…くちゅ…んあ…レロ♪」

「んあ…くちゅ…ぬちゃ…レロ!」

何度もさすがが、角度を変えながらディープキスをしてくる。

「ぷはあ♪」

「ぷはあ!」

やっと終わった。

「ユーノ君。どうだった私とのキス、気持ち良かったよね?」
その質問に俺は…。

「俺に質問するなああああああ!」

俺は、部屋を走り去った。

「あれ?ユーノ君ったら鬼ごっこなの?じゃあ、捕まえたら私の好きにしていいいよね!」

そう言い、ユーノを追うすずか。血を飲んでしまったせいで、興奮状態になっているようだ。

「ユーノ君が義弟になる日も近いわね…。」

「冷静に分析するな忍!それは、ヤバいだろ!」

「お姉様どうしましょう!」

「とりあえず、すずか様を止めましょう!」

さっきまでのシリアスは、どこに行ったのやら。

「待ってよ!ユーノ君♪」

「来ないでくれええええええ!」

もしかしたら、次が続くかも？

「マジかよおおおおお！」

本当に子供もか！（後書き）

反省会

「もういやだあああああ！」

「フラグ全部回収だな。」

「自重するんじゃないのか！」

「ごめん…。」

「また次回！」

問題は起こりやすい…（前書き）

C o u n t ジェルシード 現在ユーノが持っている数は

十一個！

誤字が多かったので、やり直しました。

問題は起こりやすい…

「うあああああああ！助けてくれええええ！」

こんちわ憑依者ユーノだ！今回は、珍しく心の声からじゃないんだよな。

「待ってようユーノ君♪一緒に遊ぼうよう♪」

「さすが、落ち着いてくれたな！」

俺は前回に引き続き、鬼ごっこをやっている。

結構な時間帯で、屋敷の中を逃げ回っているのだが、まだ治まっていないらしい。

「すずか様止まって下さい！」

「ユーノ様が困っていますよ！」

フアリンとノエルが追いついてきた。

「おい二人とも！すずかの興奮って後、どの位で、治まるんだ！」

「当分、止まりませんよ！でも、止める方法はただ一つ！」

「すずか様を気絶させて正気に戻すしかありません！」

気絶って…。すずかに乱暴な事なんて…。

「ユーノ君、一緒に気持ちいいこと。しよ♪」

「前言撤回！気絶させないと色々ヤバイ気がする！」

だって発言ヤバ過ぎる！

「ユーノ様、どうするんですか!?!」

ファリンが聞いてくる。

「瞬時に回り込んで、気絶させるしかない。」

「ですが、すずか様は勘がいいですよ？それに、ユーノ様の修行の影響もあります。」

ノエルに問題を指摘される。

「大丈夫だ！本当に一瞬で終わらせてやる！」

俺は、そう言うと同時に体に楯を纏い構えた。

「クロックアップ！」

ヒュン！

ドサッ！

「「えっ！」」二人は、突然の事に驚いている。俺が、言葉を発する同時に姿を消し、遠く離れたすずかを抱き止めているのだから。

「つ、疲れた。やっぱ、変身して使った方がいいな。体が持たん。」

そんな、言葉を吐き捨てながら鬼ごっこは、終了した。

「ーーーーー」

「ごめんねユーノ君！私ったら：／／。」

「いや、すずかが正気に戻ってくれて良かった。」

あの後、目覚めたすずかは落ち着いていたが、今更自分の行為を恥ずかしがってるらしい。

「でも、すずかがあんなに大胆だったとは、思いもしなかったぜ？」

「もう！ユーノ君からかうのは、やめてほしいよ！」そう言って怒っているが、どこか楽しそうなすずかであった。

今俺達は、とある部屋で休憩中だ。今は、本を読みあいながら楽しく過ごしている。

「ユーノ君も、本好きなんだね？」

「そう言うすずかもだってそうだろう？ここには、珍しい本があって楽しいぜ！」

どうやら俺は、原作のユーノの趣味まで受け継いでいるらしい。

「喜んでてもらえて何よりだよ♪こうやって本についても話す事が出来るからもっと嬉しいし！」

「ああ！それとこの前話したはやても本好きだから、今度一緒に語ろうぜ！」

「うん♪楽しみにしてるよ！」

仲良く過ごす二人であった。

数時間後。

「失礼します。」

ファリンが、紅茶を持ってきたようだ。

何故か女難な予感…。

「ファリン大丈夫か？変にヨタヨタしているが？」

「だ、大丈夫ですユーノ様！」

元気に返してきた。

「気を付けた方がいいよ？ファリンは、ドジっ娘だから。」

「これでは、ドジを踏みません！あっ！」

すずかに、言われ気を取られたのか何もない所で、つまずきカップ

とお盆が宙に舞う。

本当にドジっ娘っているんだ。初めてみたぜ…。

俺は冷静に分析しながら、カップ達の落下地点に移動し

ポンポンポン！

両腕にカップを持ち、お盆は左足に引っ掛けて地面の落下を防いだ。

「師匠が言ってた。食器は人類の宝。何が何でも守れてな。」
余裕をかます俺であった。

「すごいねユーノ君！」

「すごいですユーノ様！」

二人とも、感動するのはいいけど助けてくれないか。

「あっ！ユーノ様、今すぐ、助けます！」

ファリンが気づき近づいてきたのだが…。

「キャッ！」

「うおっ！」

今度は、ユーノの方に転んでしまった。

「あいたたた…。」

ファリンは、転けてしまったが何もないようだ。

「……………」

一方ユーノは、バランスを崩した上に紅茶を頭からかぶってしまった。

だが、カップは律儀に守っていたため割れてはいない。
変な所で器用なユーノであった。

「すすすみませんユーノ様！お怪我はありませんか！」

「俺は、まあ大丈夫だけどファリンは大丈夫か？」

盛大に転けてたしな。

「大丈夫ですけどユーノ様、紅茶が…。」

「まあ、拭けば大丈夫だろう？」

そう言った直後…。

ペロッ！

「うわっ！」

「す、すすか様！」

すすかが、紅茶のついた俺の頬を舐めてきた。

「うん？舐めとってあげようと思って…。」

「普通タオルとかだろ！」

このお嬢様は、ほんとに何をしでかすかわからん。

「すすか様だけずるいです！」

ペロッ！

「！…、おいファリン！お前まで何してる！」

「メイドととしてご奉仕しているだけです！」

「上手くまとめるなよ！」

何だこの状況！俺、補食動物か何か！

「むっ！ファリンは余計な事しないで！私が全部舐めてあげるから！」

「いいえ！私のせいなんですから、責任を持ってご奉仕させてもらいます！」

「どっちの発言も危なすぎんだけど！」
言葉を考えてくれよマジで。

「じゃあどっちがユーノ君を満足させられるか勝負だよ！」

「望む所です！」

「せんでいい！」

何故そういう話しになんだよ！タオルを持ってくるといいう選択肢はないのか！

心の中で本気で怒っているユーノである。

「ユーノ君！」

「ユーノ様！」

二人が俺に迫ってくる。

「やめろ二人とも、迫るな！」俺は、後ろにおいつめられていく。

「ぎゃあああああああ！」

「ーーーーーーーーーーーーーーーー」

「疲れたたぜ…。」

結局あの後、飴やソフトクリームのごとく舐めまわされ精神的にヤバイ。

だが、通りかかったバカップルになんとか助けてもらったのだ。

忍さんには、大笑いされ恭也さんには、経験者のような眼差しで強く生きろと言われた。

後、現在の俺はというと。

「デカイ風呂だな…。」

紅茶で汚れてしまったので風呂に入ってきたと言われてきたのだ。

最初は、断りたかった。遠慮じゃなくて女難な意味で…。

ちなみに二人は、反省中で怒られています。

「早く体を洗って上がって今日は帰ろう…。」

「なら、私が洗って差し上げます。」

……………んっ？

「どうしてノエルが、風呂場にいるんだ？後、せめてタオル巻いて…。」

「これは、すいませんユーノ様。理由は、ご奉仕です。」

何の問題もないように冷静に答えるノエル。

「帰る！」

回れ右でBダッシュの如く逃げようとするが。

「お待ち下さい！」

ムニユ！

ノエルが抱きついてきた。

「っておい！抱きつくなそしてタオル巻いてくれ！
胸の感触が直に感じるんだけど」

「なら、ユーノ様？私に大人しく洗われて下さい。」

「いや、何で…！」

ムニユ！

「いいですよね？」

「わかったから胸を押し付けんの止めろおおお！」
月村家、恐ろしい所です。

「どうですかユーノ様？」

「問題なしだ…。」

今は、背中を洗ってもらっている所だ。

「どうして目をつぶっているのですか？」

「ノエルが結局、タオルを巻いてくれないからだ！」
ちなみに俺は、ちゃんと巻いている。

「別に見てもよろしいですよ？」

「結構だ！」

少しは、警戒心を持ってくれないか。

「はい。終わりました。」

「まあ、一応ありがとう。」

「いい加減目を開けたとうですか？そのままでは、先に進めません
よ？」

ノエル、お前は俺を陥れようとしてるのか。

だが甘いぞノエル！

「俺は、目を閉じながらも感覚が掴めるんだ！」

そう言い、俺は風呂場を去っていた。

「残念です…。今度は、ファリンと協力をしてみるとしましょう。何かを決意するメイドが一人いた。」

「……………」

「今日は、ありがとうございました。」

子供は帰る時間だ。

「また来てくれていいのよ？その時は、そっちの技術について教えてね！」

「こら忍。ユーノに無理な頼みをするな。」

「え〜いいじゃない！けちっ！」

「勘弁してくれよ忍さん…。」

教えたら、‘アイツ’に怒らる。ただでさえ面倒事をアイツに押し付けてるからな。

「ユーノ様！また、いらして下さいね！」

「なら、少しはそのドジっ娘を直してくれよファリン？」

「はうっ！が、頑張ります！」

そう言い、両腕をL字に力を込めて宣言した。

「残念ですね…。もっとユーノ様とお話しをしたかったです…」

「

「また今度来るよノエル。そんな時は、落ち着いて話しがしたいな？」

「私は、今回みたいのがいいのですが？」

「それは、勘弁してくれ！」

何気に仲がいい二人である。

「ユーノ君！泊まって行こうよ！」

「悪いな、すずか。居候先の天使様に怒らそうなんだな。」

最近、構ってもらえないから拗ねているしな。

「むっ。なのはちゃんはずるいな。ユーノ君と一緒にいれて…。」

「暇を見つけて、泊まるのを考えてみるよ。」

「ほんと！約束だよ！」

「ああ！約束するぜ！」 帰ると言うのに、いつまでも元気な二人である。

「じゃあ、またな！」

俺は最後に挨拶を済ませ月村家を去り一日は、終了した。

実は皆さん。今日の一日は、これだけでは終われなかった。

この夜にある“異例”が起きた。

それは、この物語には関係しない全くの異例が現れた。

そう、俺（憑依者）のような…。

だが、今回は時間ないようだ。この話しをするのは、また次の機会になる。

せめて面白おかしく語りたいな。

ニヤッ！

問題は起こりやすい…（後書き）

反省会

「最後の前振りはなんだ？」

「何時になく冷静だな。」

「ただ事じゃないんだろ？」

「言ったら出来るだけ面白おかしくするってな。」

「わかったよ。また次回だ！」

「お楽しみに！」

相手は考えるべきだ（前書き）

C o u n t ジェルシード 現在ユーノ達を持っている数は

十一個！

相手は考えるべきだ

今晚は、憑依者ユーノだ。俺は、今一人で夜の町の中を歩いている。理由があるとするならこの“異様”な気配についてだ。

俺は、結界を張り大声で叫んだ。

「いい加減出てきたらどうだ！正直、ウザいんでな！」
俺が、喋り出した直後…。

「淫獣如きが、俺に命令するんじゃない！」
突然、真上から男が現れユーノに襲いかかった。

ドカアアアアン！

ユーノがいた場所は、男の攻撃のせいで破壊された。

「はっ！淫獣がでしゃばるからそうなんだよ！大人しく俺の言う事を聞いてれば、いいんだよ！」

男は、今の攻撃でユーノを仕留めたと思っているらしい。

「その発言、そしてお前の持っているその武器、ヘラクレスの宝具…。」

どこからか声が、聞こえてくる。

「…！、この声は淫獣か。今度こそ俺の【無限の剣製】の餌食にしてやる！」

「やっぱり、アンタ転生者か……。面倒くさいヤツが出てきたな。」
「そういい、ユーノはビルの上から男を見下ろしている。」

「師匠達的能力か……。実に面倒くさい。」

襲われているのに、冷静なユーノであった。

「あっ！ テメエ！ 変態如きが主人公面か！ テメエは、お呼びじゃないんだよ！」

「それは、こっちのセリフだ。てか、俺が結界張ってなかったら、被害が……。」

「知るかよ！ テメエがそこにいたせいだ！ 他の人何かどうでもいいんだよ！」

「……はあ。本当に最低系のやつて救いようがない……。」
呆れるユーノであった。

「そんな事は、どうでもいい！ テメエはここで死ね！ 邪魔なんだよ！」

男は、声を上げ俺に向かってくる。

「全く、イケメンのくせにそんな事やっていいのか？」
ユーノは、余裕そうに答える。

実はこの男、顔がイケメンで年齢は、俺達と同じ位なのだ。

「俺に話し掛けんな淫獣が！ 同調開始！」
トレース・オン

男は、両手に双剣の【干将・莫耶】を投影し襲いかかったきた。

「危な…。」

男は、ユーノに右手で斬りかかったが、ユーノは難なく避けた。

「淫獣が！所詮テメエは逃げてるのがお似合いだ！最強でモテモテなオリ主な俺に殺さろ！」

男…、オリ主はユーノに暴言を吐いたが…。

「最低でキモくてバカなお前に倒されるのは、やだから断る。」
皮肉に冷静で返すユーノであった。

「あぁん！舐めた事言ってんじゃねえ！」

オリ主は、ユーノの言葉にキレて攻撃を仕掛けた。

「うおっ！」

「そらそら！逃げないと殺しちゃうぞ！」

今度は、ユーノが追い詰められていき防戦一方のようだ。

そしてユーノが、バランスを崩してしまった。

「しまった！」

焦るユーノ。

「口だけだったな淫獣！死ね！」

左手で、ユーノの首目掛けて振るった。

取った！

オリ主は、そう思ったが予想を遥かに裏切られた。

ガキン！

「な……ん……だ……と！」

振るった剣は、ユーノの首に当たると同時に‘折れた’。

「やはり、強度がイマイチだ。ろくに練習もしてないんだな、オリ主君？」

余裕そうに答えるユーノ。

「なっ！ テメエ一体何しやがた！ 何で俺の剣が効かない！」
焦りだすオリ主。

「俺を知ってるんだろ？ なら話しは簡単、俺は楯で身を守った。」

「ふざけんな！ そんなもんどこにある！」

「ネタバレするわけないだろ？ 後、それよりさ。」

ユーノの雰囲気が変わりだした。

「ビクッ！（何だよこの寒気は！ 淫獣も意味がわからなすぎる！ 何だよアイツは！）」

恐怖を抱き始めるオリ主。

「貴様如きが、師匠の能力、“誇り”を汚すんじゃないやねえよ！ ゲスが！」

ブオオオオオオオオ！

ユーノが、声を発すると同時に凄まじいプレッシャーがオリ主を襲

った。

「う、うああああああ！」

オリ主は、自暴自棄になりながらも剣を投影してきた。

ドゴン！

「グアアアアアアア！」

だがユーノは、瞬時に前に移動しオリ主に右ストーレートを喰らわせ吹き飛ばした。

ドガガガガガガガ！

だがオリ主は中々止まる事が出来ずビルを破壊している。

「いつまで吹き飛ばされてんだア！オ・リ・主・クーン！」

「ぎゃあああ！」

ユーノが、吹き飛ばされたオリ主に追いつき下に向かってぶん殴った。

ドカン！

「ぐあ！あ…ああ…う…ああー！」

止まったオリ主は、見るに見かねない姿になっていた。

精神もいいとは言えず、泣き始めている。

「何なんだそのザマアは！最強のオリ主君がこんな事で泣いちゃうのか！」

ユーノも地面に降りてきて声を上げる。

「違うだろがア！オリ主君ならそこは、敗者復活戦の如く俺に勝ってみろ！」

「う…う…ムリ…だ。」

掠れ掠れで声を出すオリ主。

「あアン！ふざけた事言ってんじゃねエぞ！まだ、終われせねエぞ！」

オリ主に突っ込むユーノ。

「うああああ！【偽・螺旋剣】（ガラドボルグ）！」

オリ主は、瞬時に投影し技を放った。

「だから、使うなって言っただろ！」

ユーノは、楯を纏った右腕で振り払った。

ドカン！

土煙が舞、視界が見えなくなった。

だが、その先では…

「I am the bone my sword（体は剣で出来ている）

Steel is my body, and fire is my blood（血潮は鉄で、心は硝子）

I have created over a thousand blades（幾たびの戦場を越えて不敗）

Unknown to Death（ただ一度の敗走もなく）

Known to Life（ただ一度の理解もされない）

Have withstood pain to create

many weapons (彼の物は常に独り剣の丘で勝利に酔う)
Yet, those hands will never hold anything (故に、生涯に意味はなく)
So as I pray, “unlimited blade works” (その体きつと剣で出来ていた)！」

オリ主が唱え終わると世界は紅くなり、空には歯車、地面には無数に剣が墓標のように刺さっていた。

「ど、どうだ淫獣！これならお前は勝てない俺の勝ちだ！アツハハハハ！」

オリ主は自分の切り札を出して勝利を得たと思っているが：

「アハッ！もう駄目だ……。限界！」

ユーノは、関係なしに顔を歪ませた。

「ヒッ！（ほ、本当にこれが淫獣なのかよ！まるで別人だ！）」

オリ主も精神の限界が来るようだ。

「こんな世界、破壊してやる、！」

ユーノの眼が真っ赤に染まり、右手からナイフを取り出し構えた。

「【極死・七夜】！」

ユーノは、ナイフを振り出した。

ズババババババババ！

「えっ？」オリ主は何が起きたかわからないようだが、直ぐに現実に戻された。

ガシヤアアアアアアア！

世界が窓硝子が、割れるように破壊された。

「うああ！お前それ【直視の魔眼】か！なんでテメエが！」
固有結界が破壊されたより、そっちが気になったようだ。

「そんな事より、両手を見たらどうだ？」

「えっ！」

恐る恐る見た自分の両手は…。

無かった…

ブシヤアアアアアアア！

「うぎやああああ！お、俺の手がああああああ！」

手は、無くなり大量出血を起こしている。

「オリ主のくせに情けない。俺なんて何回、切断されたかわからんぞ？」

悪びれた様子もなく淡々と話すユーノ。

「な、何でなんだよ！俺は、主人公なんだぞ！何をやっても許さる存在なのに！」

オリ主は泣きながら語り始めた。

「ああもういい。そろそろ帰らないと、なのはに怒らるから終わらせるぞ。」

俺は、トドメをさそうとする。

「まっ！待て！俺が悪かった！だから殺さないで！」
情けない声を出すオリ主。

「無理。だってお前みたいなのはほっといたらなのは達が危ない。」
絶対見逃したら、なのは達に近づいて迷惑を掛けるに違いないからな。

「く、くそあ！お前といい、‘フェイト’といいどうなってやがる
！」

んっ？何だと？

「お前フェイトに会ったのか？」

「ああ、そうだよ！俺は友達になると言いながらフェイトを手に入
れようとしたからな！」

おい、まさかフェイトが“友達”に対して恐れていた理由って：

「だが、何で家族一緒に仲良く過ごしてやがる！おかげで、拒絶さ
れるは嫌われるだで、大変なんだよ！」

お前のせいでフェイトは…。

「だから“偽物”だって言ってやたぜ！お前なんかただの“人形”
だってな！」

恐怖を抱くようになってしまったのか…

「だが、関係ない！そんな記憶を無くしてまた始めからやり直してやるぜ！そのために、ジェルシードを集めてるんだ。今度こそ、俺の物にしてやる！」

全部コイツのせいか！

「遺言は済んだか？」

俺は、構える。

「お、おい淫獣！聞いてなかったのか！俺には偉大な野望が…！」

「知るかよ。」

俺は、オリ主に近づいていく。

「く、来るな！俺はまだまだこれからなんだ！フェイトだけじゃない、他の女をみんな俺の物にするんだ！」

この男本当に救いようがない。何でもなると思っていやがるこの状況を…。

「もういい、“堕ちろ”。」

ユーノが言葉を発すると同時にオリ主の周りには紫色の穴が開き無数の手が出現し引きずり始めた。

「うあああああ！何だよこれはあああああ！」

「二度とお前が、フェイト達の顔を見れないようにするための拷問部屋だ。」

「ふざけんな！誰がこんなの望むんだよ！」

段々落ちていく。

「俺に決まってるだろ！お前はバカか！散々、暴言を吐かれ襲われた挙げ句、大事な友達まで手を上げたお前を誰が望むと言ったら俺に決まってる！」

そう、フェイトにこんな残酷な事はさせない！俺が決着をつける。

「うああああああ！やだ！死にたくないよおおおおお！」
オリ主は、とうとう穴に堕ちていった。

俺は、穴を閉じ背を向けてこう吐き捨てた。

「堕ちろ。そして“廻れ”！」

—————

「はあ。随分遅くなっちゃったぜ。」

俺は、さっきの戦いを終了し家の前にいる。

「ただい「ユーノ君！」つま！」

開けると同時になのはに抱きつかれた。

「お、おい！どうしたなのは！」

まさかまた何かあったのか！

「ユーノ君！私と“キス”しよ！」

「シリアスの空気を返せええええ！てか、何でそうなる！」

「すずかちゃんから自慢気に聞かされたの！ユーノ君と唇でキスし

たって！」

「すずかああああああ！」

アイツは、何がしたいんだよ！

「という事で、その唇を頂戴するよ！」

なのはが迫ってきた。

「戦略的撤退！」

「待てなのー！」

家の中でまた鬼ごっこが発生したとさ。

全くシリアスに終われないのかよ。

でも、なのは達を守る事が出来たし良かった。

だがこれからもきつと転生者は増え続ける。良い方にも悪い方にも…。

まあ、関係ないけどな！俺は自分のやりたいように物語を進めて行くだけだからさ！

「ユーノ君！いい加減捕まってほしいの！」

「だから、シリアスで終わらせろおおおお！」
鬼ごっこの最中に語っていたようだ。

こうして本当に一日は過ぎていった。

余談だが、ジェルシードは二個回収したそうだ。

相手は考えるべきだ（後書き）

反省会

「転生者か……。」

「どうした？」

「性格の良い転生者なら色々任せらるるのに……。」

「もし、出てきてもお前の出番変わらないぞ！」

「マジか！」

「また次回！」

「お楽しみに！」

意外な事はずきものだ！（前書き）

C o u n t ジュエルシード 現在ユーノ達を持っている数は

十三個！

意外な事はつきものだ！

何時もより、眠い憑依者ユーノだ。

昨日、転生者やら何やらで大変だった。

なのはとの鬼ごっこも何事もなく終わり就寝しました。

そんな事より早く起きないと。

体を起こし目を開けたら

「んっ♪」

「んっ？」

起きた目の前にいたのは、目を閉じて俺にキスをしているのはだった。

………あれ？俺まだ寝ぼけてんのか？

「んっ♪」

嬉しそうにキスを続けるなのは。

「現実かー！」

俺は、直ぐになのはを離した。

「プハア！もうユーノ君！まだ物足りないの！」

「何でなのはが怒んだよ！てか、何やけに手の込んだ事しやがる！」

「だってユーノ君が昨日してくれなかったから、おはようのキスで起こしてあげようと思って…。」

恥ずかしそうにもじもじしながらなのはが言う。

「俺が起きてなくても結局やられてたのかよ！」

どっちにしろ逃げ場がないユーノであった。

—————

「朝からやけに濃い目にあった…。」

「お前も色々大変だなユーノ。」

現在俺は、朝食を食べ終わり恭也さんと話している所だ。

何気に相談相手みたいな立場になっています。

「それよりユーノ。この前話した知り合った友達は、いつ紹介するんだ？」

恭也さんが突然質問してきた。

「えっ？何で？」

「その友達は、女の子なんだろう？下手に紹介を遅れさせたら、ユーノが危ないんじゃないのか？」

「……ヤバイ…。本当にそんな気がしてきた…。」

フェイトやはやてを紹介したのはいいが、まだどちらもなのは達と面識がないからな。

早く紹介しないと何か誤解が出てからじゃ遅い。特にはやてとか…。

余裕そうに高笑いをする狸娘のビジョンが頭に浮かぶ。

「よし！何か計画を立てるぜ！」

ユーノは決意をしたようだ。

「どうやって紹介するんだ？」

「うゝん。何か良い手はないものか？」

恭也に指摘され考え込むユーノ。

「俺も今日は、用事がないから一緒に考えるぞ？」
心配をする恭也。

「んっ？ お店も休みなのか？」

「ああ。みんな今日は暇になるな。」
恭也さんにそう言われて俺は、閃いた。

「それだ！ 恭也さんナイスだぜ！」
俺は、サムズアップをする。

「んっ？ 何か思いついたのか？」

「ああ！ みんなを呼んでパーティーを開く！」

「なるほど。それなら、一気に紹介も出来ていいな。場所はど
うするんだ？」

「はやての家で開く！ 無理はさせたくないし何気に広いから大丈夫
だ！」

「本人の許可は？」

「大丈夫だ。多分問題ない！」

「多分って、後、何時実行するんだ？」
恭也さんが聞いてくる。

「今日の夜だ！」

「それは、また急だな…。」
大丈夫なのかと言う目で見てくる。

「よし！善は急げだ！早速行動だ！恭也さん、なのは達に連絡よろしく！」

俺はその場から去る。

「ユーノ！どこに行く！」

「はやてやフェイトに直接伝えて来るぜ！後、よろしくな！」
そう言い俺は完全に姿を消した。

残された恭也は…。

「電話を使えよユーノ…。」

文句を垂れ流らなもしよがないといった感じで、ユーノの言われた事をやっているようだ。

—————

場所はやての家

「失礼しまーす！」

俺は、何の予告もなしに家に入っていた。

「きゃああああ！ユ、ユーノ君！ノック位はしょ！」
突然の訪問に飛び跳ねるように驚くはやて。

「悪い。後、はやて今日は暇か！？」

やけに興奮なみに近づきながらユーノが聞いてくる。

「えっ、えっ！ユーノ君どないしたんや！？（来てくれたのは嬉しいんやけど今日のユーノ君、積極的やないか？）」
顔をほんのり赤らめながら考え込むはやて。

「今日、はやての家でパーティーを開きたいんだけどいいか？」

「えっ？何でなん？」

予想外の答えが出たと思うはやて。

「俺の友達を紹介したいんだ！はやてが迷惑じゃなければいいんだけど……」

難しい顔で聞いてくるユーノ。

「ううん！全然問題なしやむしろ嬉しいで！」
笑顔ではやてが許可した。

「そうか！なら、今日の夜にやるから色々準備して来るからな！」

「うん♪でも本当に嬉しいな。」
はやては、本当に楽しそうにしている。

「やっぱ、嬉しいよな？」

「勿論やで！友達になって色々話したい事があるんや！それに…。」

「それに？」

あれ？何か嫌な予感…。

「ユーノ君がうちの“家族”やって事も言わんとあかんしな〜♪」

「またそのネタかあああ！」

コイツは、本当に懲りないヤツだ。

「普通に友達って言えよ！」

なのは達に言ったら何されるかわからん。

「そんなユーノ君！あの言葉は嘘やったんか！うわ〜ん、ユーノ君に持て遊ばれた〜♪」

「何故そうなる！てか嘘泣き止めろ！俺が全部悪いみたいだ！」
またまた焦り出すユーノ。

「うわ〜ん！町の人達に言いつけてやる〜♪」
そう言い扉の前まで進むはやて。

「貴様は鬼か！俺の事を社会的抹殺するつもりか！」
急いで止めに入るユーノ。

「離してえな！今まで私に嘘を言って騙してたんやろ！？」

「何、昼ドラみたいな味を出してやがる！全然ドロドロしてねえぞ！」

「だから今から既成事実を作りに行くんや〜♪」
素晴らしい笑顔でとてつもない毒を吐くはやて。

「マジでやめろおおおおお！」

結局この後、町に言いふらす事は、なかったがはやては心底楽しそうな顔していた。

本当にはやてのせいで、パーティーが荒れそうだ。

そう思いながら俺は、次にフェイトの家に向かったのであった。

ーーーーー

場所フェイトの家

「失礼しまーす！」

懲りずにまた同じやり方で入るユーノ。

だがその先には…

「えっ？」

風呂上がりで艶々な体で裸で立っていた“リニス”がいた。

「ふえ／＼／＼！ユ、ユーノ！見ない「失礼しましたー！」（ボタン！）」：少し位みてもいいのに…。」

ユーノは、直ぐに理解をし扉を閉め外に出た。

一方リニスは、恥ずかしいけど見てもらいたかったと言う曖昧な事を考えながら顔赤らめ、呆然と立っていた。

数十分後

「本当にすまん！」

俺、現在マジ土下座で謝ってます。

「き、気にしないで下さいユーノ。私は気にしていませんから！」
そう言いつつも顔が赤いリニスであった。

「なんだいユーノ？裸がみたいんならあたしが見せようか？」
アルフが話しに入ってきた。

「俺、今その事で謝罪してるのになんで、罪を大きくしなきゃならないんだよ！」

「えっ？単純にあたしが見てもらいたいからだよ？」
何の問題なく答えを出すアルフ。

「いや、本人良くても周りから見れば俺が悪いんだよ！」
発情期なんじゃねえのかこの狼！

「止めないさいアルフ！」
今度は、プレシアさんが入ってきた。

「ユーノ君が嫌がっているのに無理な事言っちゃだめよ！」
「うおお！プレシアさんがまともだ！そのままアルフに言ってやれ！」

俺は感動だ。プレシアさんが正常になってくれた！

だが俺の考えは、次の言葉で裏切られた。

「きっとユーノ君は、恥ずかしくて本音を言い出せないだけなのよ！察してあげなさい！」
そう言い、俺を後ろから抱き締めた。

「違うわボケえええ！後、抱き締めんな！胸押し付けんな！」
本当にこの母親、ロクな事を言わないな。

「恥ずかしがらなくていいのよユーノ君♪私が満足させてあげ・る♪」

艶やかな顔で誘惑するプレシアだが…。

「何をだああ！てか離せ！話しが出来ない！」
全くユーノは、気づいていないようだ。

「何だいユーノ。そう言う事ならそう言えばじゃないか？」

「違うからアルフ！俺の本心じゃないから！」

「照れなくてもいいんだよユーノ♪」
アルフも笑って返した。

「照れてねえええええ！おいリニス！この二人何とかしてくれ！」
俺は、リニスの方に視線を向ける。

「な、なるほど。ユ、ユーノも年頃の男の子なんですから、見たい
と思ってもしょうがないですね！」

何か納得してる！だめだから！プレシアさんの罠だから！

「リニス！お前は、純粋なまままでいてくれるよな！」
じゃなきゃ俺の味方が…！

「なら、また見せても問題ないですね！」

「越えてきたああああ！や、止めろリニス早まるな！」

俺は、リニスを止めようとするが、捕まっついて動けない。

「だ、大丈夫ですユーノ！私は、恥ずかしくありません！むしろ見て下さい！」

「あれっ！リニスの方が発情期入ってない！誰だよ管理者！」
何とか話を伸ばすユーノ。

「私よ♪」

プレシアさんが声をあげた。

「あんたかよ！」

グッ！この状況どうすれば…。そうだフェイトだ！アイツは、純粹だからきつと止めてくれる！

俺は、急いで探そうとしたが必要なかった。

何故なら…。

「……………／／。」

既にオーバーヒートをして倒れているフェイトを見つけたからだ。

「純情すぎるぞ！フェイトー！」

俺はフェイトに思いっきり叫んだ。

「さあ、ユーノ大人しく…。」

リニスが近づき。

「この状況を…。」

アルフも近づき。

「楽しみましょ♪」

プレシアさんは、抱き締めるのを強めた。

「ぎやあああああああ！」

「—————」

「えっ？パーティー？」

「そうだフェイト。どうだ今日の夜なんだけど。」

「うん！絶対にいくよ！楽しみにしてるね♪」

「それは、良かった。」

今、俺は無事にフェイトに話しをする事ができた。

ちなみに他の三人は…。

「すみませんでしたユーノ。」

「離しておくれよ。」

「ユーノ君は、こういうプレイが好きなのかしら？」
やられる前に、チェーンバインドでグルグル巻きにして放置している。

てか、プレシアさん反省してくれマジで。

「でも、突然どうしたの？」
フェイトが聞いてくる。

「フェイトにさ、いっぱい友達を作ってほしいからだ。」

「えっ？」

これは本当だ。もう、フェイトを怖がらせた転生者はいない。だから、今度こそ友達を作って行ってほしい。

「わ、私に出来るかな？」

どこか不安そうに答えるフェイト。

「前にも言っただろ？ 恐れるなよ。フェイトが恐れず勇気を出したら、俺は友達になったんだ。」

フェイトの頭を撫でるユーノ。

「ユーノ…。」

くすぐったそうに見上げるフェイト。

「心配なら一緒にいてやる。だから、がんばろうぜ？」
笑顔で返すユーノ。

「うん！ 私頑張ってみるよ！」

さっきまでの不安な様子はなく明るくなった。

「そっか。頑張れよ。」

俺は、手を離した。

「あつ。ユーノまだお願いできないかな？ 撫でるの…。」
恥ずかしそうに聞いてくる。

「了解。」

「んっ…。」

また、撫で始まりフェイトも目を閉じながら堪能している。

「……………」

「何か、ユーノには助けられてばかりだね？私は何もしてないのに。」

頭を撫で終わりフェイトがユーノに問いだした。ちなみに一度帰宅する所だ。

「フェイトだって、ジェルシードを集めてくれたろ？それでお相子だ。」

「でも…。」

まだ、納得がいかないようだ。

「何も今すぐじゃくてもいいんだぜ？ゆっくり考えていけばいいんだよ。」

「ユーノ…。うん！そうしてみるよ！」

「よろしい♪じゃ、また夜でな。」

ガチャ！

ユーノが扉を開け、帰ろうとする。

「ユーノ待って！」

「んっ？どうしたフェイト？」

俺は、フェイトの方に振り向く。

「今、お礼が思いついたよ！」

そういい俺に抱きついた。

「えっ！フェイト！」

俺は、驚いている間にフェイトは俺の耳元で呟いた。

「ありがとう助けてくれて。……ユーノあなたが好きです。」

「えっ？最後よく聞こえ……」

質問しようとしたら。

チュッ！

「んっ……」

「んっ！」

唇で塞がれた。

キスは、触れだけのキスで終わり、すぐに離れた。

「フ、フェイト？」

「じゃ、じゃあ夜楽しみしてるね！」

そう言うのと部屋に入って行ってしまった。

残されたユーノは……。

「……色々と破壊力ありすぎたろ。」
今回は、渋々帰る事しかできなかった。

こんな調子でパーティーは、無事に開き終われのだろうか考える
ユーノで合った。

オマケ

「完全に私達、忘れられてますね？」

「ユーノ！ 帰るんなら解除してから帰っておくれよう！」

「流石は私の娘ねあなどれないわ。次は、どんな手を使おうかしら
？」

まだ縛られているようだ。ちなみに、時限式だったらしくこの後す
ぐに解除されたそうだ。

意外な事はつきものだ！（後書き）

反省会

「珍しいな。一度の話しだけでまとまらないなんて。」

「力つきてしまったからな。」

「ああ、ただ限界がきたただけか。次、大丈夫なのか？」

「何とかしてみせる。」

「そうかい。また次回だ！」

「よければ、お楽しみに！」

パーティーって疲れます。(前書き)

C o u n t ジュエルシード現在ユーノ達を持っている数は

十三個！

パーティーって疲れます。

……憑依者ユーノだ。俺は、パーティーを開こうと頑張っていたのだが、始める前から色々な事があり過ぎて不安になってしまっうぜ。

そして現在俺はと言うと。

「重い…。」

大量の買い物袋をぶら下げながら、はやての家に向かってる所だ。

パーティーの出し物は、早急なので焼き肉にする事にし、俺一人で買い出しを終わらせてきた。

鉄板などは、士郎さん達に任せてある。

「だが少し失敗したな。あまりにも荷物が多過ぎる、誰か連れてくればよかった…。」

俺は、子供では持てないような量を持って歩いている。張り切り過ぎたな。

「全く何やってんのよアンタは？」

突然後ろから声を掛けられた。

「んっ？アリサ？どうした。迷子か？」

「何でそうなのよ！偶然見かけたから、声を掛けただけよ！」

「何だ…。てっきり心配して来てくれたと思ったのによ。」

「そ、そんな事ないわよ！ほ、本当に偶然なんだからね！（もうー！本当は心配してきたやったのにユーノのバカ！）」

本音を心の内にぶちまけながら顔を真っ赤にして否定するアリサだった。

「まあ、アリサが心配して来てくれて嬉しいぜ。ありがとな。」

「うう／＼／＼。だから違うって…！」

此処まで来てまだ本音を隠そうとするアリサ。

「俺がそう思いたいんだよ。どんな理由であれ、俺に声を掛けてくれたんだからさ。だから、ありがとな♪」

笑顔で伝えるユーノ。

「か、勝手にそう思ってなさいよ！（言わなくてもわかってくれたのかな？…ありがとうユーノ。）」

そっぽを向くアリサだが、その顔はとても嬉しそうだった。

「そうさせてもらうよ。ほら、早く行こうぜアリサ。」

そう言い先を歩いていくユーノ。

「あっ！ちょっと待ちなさいよ！普通おいてかないでしょ！」

急いでユーノに追いつけアリサ。

「いや、もう夕方だぜ？早く向かわないとな。」

そうなんだかんだで、今は夕方なのである。

「なら、私も持つの手伝うわ！」

「無理だ。子供がもてる量じゃない。」

「アンタだって私達と同じ年でしょうが！」

小馬鹿にされて怒るアリサ。

「気にするな。問題ないからさ！」

そう言い足を早めるユーノ。ついでに顔が笑ってる。

「逃げるなユーノ！後、やっぱり馬鹿にしてたわねえ！」

ユーノを追いながらその事に気づくアリサだった。

結局ユーノは、逃げ切りはやての家についたそうだ。

始めのあれは、ただの愚痴だったようだ。

—————

そして夜……。

「どうもーお集まりの皆さん！本日はこのパーティーに参加頂き誠にありがとうございます！」

始めからテンションの高いユーノである。

「今日は、仲を深めるためのパーティーだ！存分に楽しんでくれ！」

「その前に近所迷惑よ！バカユーノ！」

バシン！

アリサがユーノの頭を叩いた。

「いで！何だよアリサ！まださっきの事根に持ってたのかよ。びっくりしてマイク落とす所だったぜ…。」

「別に思っていないわよ！てかマイクなんてどこにもないわよ！」

「ナイスツツコミやでアリサちゃん！ユーノ君のボケをズバツと決めたで！」

「いや、どちらかと言うと頭の攻撃の方が決まってるの！」

「ユーノ君大丈夫？後、血を飲ませて〜♪」

「だ、駄目だよすずか！ユーノが困るに決まってるよ！」

「その通りだぜフェイト！てか、すずか自重をしろ！」

既にカオスに仕上がっているようだ。

パーティーは、無事に始まりお互いの紹介も終わった。後、この際

だから、隠し事はなしと言う事になり秘密をばらしてしまった。だが、何事もなくパーティーは続けられているようだ。

「ほらほら、喧嘩してないで。焼きあがってきたから食べなさい。」

桃子さんが、話を止め食べるのを進めてきた。

「一時休戦だぜ！」

「レッツゴーやでユーノ君！」

直ぐにユーノは、気持ちを切り替えはやての車椅子を押し、走り出した。

「何気に息ピッタリねあの二人！」

「スピードも速すぎるの！」

「いいな～はやて。ユーノに押してもらえて…。」

「感心してる場合じゃないよみんな！早くユーノ君達を追いかけよ！」

すずかの号令で、瞬時に向かうのだった。

—————

「肉は頂いた！」

ユーノは、箸で素早く取ろうとする。

「甘いよユーノ！それはあたしのさ！」

バツ！

アルフに横取りされた。

「ゲッ！おいアルフ！俺が育てた肉をよくも！」

「こういうのは早い物勝ち「取りましたああ！」あっ！ファリン！あたしの肉を取るんじゃないよ！」

今度は、ファリンも参戦したようだ。

「油断禁物です！この調子で「なめんじゃないわよー！」あーアリス様酷いです！それは私が！」

アリスも参戦してきたようだ。

「敵は一人じゃないのよ！アンタが甘かっただけよ！」

ビシッと決めるアリス。

「てか、俺まだ一枚も食べてないんだけど！自腹なんだから俺にも食わせやがれ！」

何気に材料は、自腹だったらしい。

一方他のメンバーは…

「忍さ〜ん。私にもお肉と野菜頼むわ〜。」

「待っててはやてちゃん。今取ってあげるわ。」

平和に楽しんでいるようだ。

「はい、はやてちゃん。どうぞ♪」

「ありがたい忍さん♪ついでにその胸を揉ませてもらうでー!」

ムニユ!

「きゃあ!こ、こら…あ…もん…じゃ…あん!」

ムニユムニユムニユ!

「おおーいい胸しとるでー忍さん!最高や!」

胸をお構いなしに揉み楽しんでいるはやて。

「君はこのエロ親父だはやて。いい加減に離してやれ。」

流石に見ていられなくなったのか、恭也が止めに入った。

「あゝん。離してなゝ恭也さん。まだ、堪能したりないんやゝ。」

「子供の教育上よくないから駄目だ。」

「じゃあない。また別の獲物を探すしかないなゝ!」

まだ懲りないはやてである。

「はあゝ。忍大丈夫か?随分持て遊ばれたようだが?」

「恭也〜。私スイッチ入ちゃたみたい〜。今から、しよ♪」

とても艶やかな顔をして誘う忍が、出来上がっていた。

「お、おい忍！それはヤバいだろ！」

「だって〜最近お預けだったからたまってるのよ〜。だから、やらせろー！」

忍は飛び跳ね恭也に抱きついた。

「うわぁ！自重をしてくれ忍！はやてが見てるんだぞ！」

恭也は何とか事態を立て直そうとはやてに視線を向ける。

「ご・ゆ・っく・りー♪」

既にはやては遠く離れ手を振りながら去っていた。

「はやてー！ー！」

「さあ、恭也♪こっちでゆっくり楽しみましょう♪」

そう言われ連れ去られる恭也。

「うわぁぁぁぁぁ！」

ーこの後恭也さんの姿を見た者は、誰もいなかった♪

「死んでないぞ！というか変なナレーションを入れる位なら助けろユーノ！」

「否！我は天の「肉ゲットよ！」こらアリサ！俺の肉とんじゃねえ！

「隠す気あるのかユーノ！」

「もう…恭…也…集中…して♪」

「自重をしろおおおおお！」

またまた他のメンバーは…。

「んっ？今、恭ちゃんの声がしなかった？」

「空耳じゃないんですか？」

「そうだね。ごめんねフェイトちゃん。変な事言って。」

「お姉ちゃんお肉取ってなの。」

「私があるからあげるよなのはちゃん。」

四人の女子メンバーで固められていた。

「そう言えば、私三人に聞きたい事があるんだよね。」

美由希が突然話題を出してきた。

「ユーノとは、どこまでやったの？」

「「「えっ／＼／＼！」「」」

ガールズトークのようだ。

「え…いや…あの…ユーノとは…うう／＼／／。」

聞かれただけなのにもう顔を赤らめ恥ずかしがってるフェイト。

「フェイトちゃん可愛い！ハグさせてー！」

美由希がフェイトに抱きついた。

「ふえ！は、恥ずかしいですよ美由希さん！」

抱きつかれて慌てだすフェイト。

「あの様子だとフェイトちゃんもユーノ君とキスをしたに決まっているの！」

「フェイトちゃん…。純粹に見えて意外に大胆なんだ。私も頑張らないとね♪」

争い事はなかったが、新たな波乱が生まれそうな感じで合った。

後、こんな二人組もありました…。

「ノエルさんは、ユーノに裸を見せたのですか！」

「そう思ったのですが、ユーノ様は直ぐに目を瞑ってしまいした…。

」

お互いの裸を見せてしまった時の話しているようだ。

「えっと、恥ずかしくなかったんですか／＼／？」

「とても恥ずかしかったですが、好いている方に見てもらえると思えば問題ありません／＼／。」

「な、なるほど！勉強になります！」

「私の考えで満足してもらえてよかったです。」

ガシッ！

変な友情が芽生え握手をする二人で合った。

最後に親達…。

「まあ♪ユーノ君の事を♪」

「ええ♪とても気に入ったから私の夫にしようと考えてるのよ♪」

「でも、なのは達は手強いと思いますよ？」

ユーノの事について話してるようだ。

「一番手強いと言ったらユーノ君の方ね！」

プレシアが声を上げた。

「確かにそうね、昔の恭也を思い出すわ♪」

桃子も同意するような言い方をする。

「いや、桃子。ユーノ君のは、相当酷いものだと思うぞ?」

士郎がそれだけでは、終わらないと言った顔で伝えた。

そしてパーティーは、こんな感じで終わっていった。

—————

「ふあゝ。眠い…。」

パーティーは、終わりみんな帰っていった。一人真っ白のがいたのは気のせいだ。ついでに俺もあの後色々やられました。あえて語らないぜ!

…俺も帰るか…。

「にゃゝ。」

帰る道にネコが右腕をケガをしていた。

「んっ?この前のネコか?」

俺は近づきケガをみた。

「待ってろ。直ぐに治してやる。」

ユーノが右手をケガに翳すと。

パアアアア!

光輝きネコのケガを治した。

「これで大丈夫だ…。」

ユーノはネコの頭を撫でる。

「にゃ〜♪」

ネコも嬉しそうに堪能する。

「ここにいたんじゃ、危ないから移動してやるか。」

ヒョイツ！

ユーノは、ネコの体を持ち上げた瞬間…。

「にゃー！」

ネコの攻撃がきた。

「悪夢再び！ぎゃああああ！」

ユーノは攻撃にあい手を離しネコは逃げていった。

「……俺、ただ単に動物に嫌われてるだけなんじゃね？」

リアルに傷つきながら帰るユーノだった。

オマケ

ある場所…。

「うん？ ロツテ、右手どうかしたの？」

「えっ！な、何で！」

「だって嬉しそうに右手を見ながらさすってるから…。」

「何でもないよ！（アリアから聞いて興味本位で行っただけなのに…。）」

「（本気になりかけちゃった／＼。あの魔法、とっても暖かくて気持ち良かった♪最後に胸を揉まれたのはびっくりしたけど。）」

「どうしたのよロツテ？」

「えっ、いやだから何でもないよ！」

「怪しい、薄情しろー！」

「きやあああああ！」

本当に終わりです。

パーティーって疲れます。(後書き)

反省会

「登録が100越えたな。」

「んっ？今日の事についていいのか？」

「あえてスルーだ…。」

「そうか。まあ、素直に嬉しいけどな。」

「ちゃんと更新進めろよ？」

「久しぶりにプレッシャー掛けてきたな…。」

「また次回だ！」

「良ければお楽しみに！」

続きは何でも気になるものだ！（前書き）

C o u n t ジュエルシード 現在ユーノ達を持っている数は

十三個！

続きは何でも気になるものだ！

「なのは達を迎えに行ってくれないか？」

「嫌だ…。」

ども、憑依者ユーノだ今、死刑宣告っぽい事を言われた所だ。

「即答だね…。何でだい？」

士郎さんが、再び質問してくる。

「いや、何で俺が“学校”まで迎えに行く意味がわかんないんだけど？」

果てしなく死亡フラグの予感もするしな。

「最近は何事だからね。なのは達が心配なんだよ。」

まあ、いい父親宣言だが俺にとっては、何故か死の予感がするのだ
が。

「何で今更？」

「最近、そう言うヤバいのがうろついてらしいんだ。」

「なるほどね。」

おいおい、まさか転生者じゃないだろうな。

「わかった。そのミッション引き受けるぜ！」

何か合った後じゃ遅いしな。

「そうか。じゃあ頼んだよ。」

「了解！行ってきます！」

俺は、直ぐに迎えに向かった。

「ふう〜。やっと行ってくれた。嘘について迎えに行かせるのも大変だね。」

ユーノが去った後に本音をもらす士郎だった。

—————

一方なのは達は…。

「そろそろ帰る時間なの。」

「今日もつまらない一日だったわね。」

「そんな事言っちゃ駄目だよアリサちゃん。」

帰る準備をしている所のようにだ。

「全く、これならユーノと喋ってた方がまだいいわね。」

「まあ、確かにそうだね〜。なのはちゃんはいいな〜ユーノ君とい

れて。」

「えへへ♪」

帰る間にユーノの話をして盛り上がる三人。

男子の方と言うと…。

「いや、お前が言ってこいよ！」

「そう言うお前が、一緒に帰ろうって誘えよ！」

「早くしないと高町さん達が…！」

何とかしてなのは達とお近づきになろうとしている様子。

「じゃあ、帰ろう二人とも♪」

なのはが、そう言った瞬間…。

「（おい。三人ともいるか。）」

「「「えっ！」「」」

突然ユーノから、念話が入った。

「（どうしたのユーノ君！何か合ったの！）」

心配をするのは。

「（いや違う。三人を迎えに来たんだ。）」

「（へ、へえ。ユーノにしては気が利くじゃない！）」

強く言うアリサだが、内心は嬉しいようだ。

「（でも、ユーノ君。どこまで迎えに来てるの？）」

さすがが素朴な疑問を示してきた。

「（校門だ。）」

「「「えっ？」」」

つい念話を忘れ声を出すのは達。そして次の瞬間…。

「きゃああ、校門の所に格好いい男の子がいるよ！」

突然教室の女子が喋りだした。

「ホントだ！顔も綺麗な顔立ちだね！」

「髪の色からして外人かな？モデルやってるのかな！」

「それに綺麗な肌に、綺麗な体をしてるからきつとそうだよ！」

一斉に黄色い声を上げる女子達。下校途中の方々も同じ反応のよう
だ。

一方男子は…。

「アイツは男の敵だ！」

「何だ！あの完璧過ぎる顔に髪、スタイルは！」

「貴様みたいのがいるから俺達は！」

「くそー！美少年くたばりやがれ！」

嘆いている様子だ。

なのは達はと言うと…。

「何かまずい事になってきたの！」

「絶対ユーノのヤツ何も考えないで来たわね！」

「もう！ユーノ君！少しは、自分の事理解してほしいよ！」

三人は焦り校門まで、向かっている所だ。

何を焦っているのかと言うとユーノの人気があまりにも高すぎるので、早く立ち去らないとマズいと感じたからだ。

一方ユーノは…。

「視線が痛い…。」

校門の壁に寄りかかりながら言葉をもらすユーノ。

「やっぱり、校門の所にいたら邪魔だよな。」

だってみんな俺見てくるし。特に女子なんてマジマジと見てるし、男子なんて殺意のある波動を感じるしな。

「早く来てくんねーかな。」

再び愚痴をこぼす俺で合った。

「おい！そこのお前！」

突然身長が高い生徒に声を掛けられた。

うわゝ面倒くさいのが来たな。」

「口に出てるぞお前！」

「んっ？これはすまん。」

見た所上級生か…。年下には、優しく接するもんだぜ…。

「それよりお前は、何でこんな所にいやがる！」

俺が気にいらぬのか脅すように聞いてくる。

「人を待ってる。この学校の生徒なんだ。」

正直に言って早々に帰ってもらうか。

「嘘をつくんじゃねえ！試しに名前を言ってみろ！」

何なんだこの男は？しつこい男は嫌われるぞ？

「なのは、アリサ、すずか。その三人を待ってる。」

俺が話すと場の空気が静まった。

あれ？俺何かまずい事言ったか？

「ふざけんなよてめえ！何、馴れ馴れしく高町さん達を呼び捨てに
してやる！」

上級生は、急に大声を出して怒りだした。

「いや、本人に許可を貰ったんだが…。」

「見え透いた嘘をつくな！本人達の前でも言えるのか！」

何なんだコイツは…。何をそんなにムキになってやる。

「問題ないぜ。何せ友達だからな。」

「な…ん…だと？」

下校途中の男子生徒が、みんな固まった。

「もういいか？いい加減疲れた。」

最近の男子は、みんなこんな感じなのか？

「証拠はあるのか！」

「いや、証拠って「ユーノくーん！」んっ？なのは？」

「えっ！高町さん！」

なのはが、声を上げながら走ってきた。アリサとすずかも後ろから走ってきた。

「おーやっ」と「ちよつと来てなのー！」うわっ！引っ張るなよなのは！」

なのはは、俺の腕を掴むと引っ張り出してきた。

「いいから早く！」

アリサも逆の腕を掴み。

「行こうねユーノ君！」

すずかは、俺の背中を押す。

「わ、わかったから落ち着け！」

結局俺は、連行されるように去った。

残された男子は…。

「あの野郎ー！覚えてろよ！」

一人嘆いていたそうだ。

――――
とある公園…。

「ユーノ君！これからは、学校まで迎えに来るの禁止なの！」

「えっ？俺何かした？」

現在尋問に合ってる。

「そう言う意味じゃないんだよ。少しは、理解してほしいんだ？」

「いや、何をだよすずか？」

「うっさい！つべこべ言ってるのカッ消すわよ！」

「理不尽過ぎないかアリサ！」

何なんだよ本当に？

キーーーーー

そして久しぶりのジュエルシード…。

「しかも丁度ここかよ…。」

俺は渋々結界を張る。なのは達も準備が完了しているようだ。

ドドドドドドドドドド！

公園の木々が襲いかかってきた数は三体だ。

「先手必勝なの！デイベインバスター！」

まずなのはが、砲撃を放つ。

「ぐう！」

攻撃はあたり木は後退する。

「まだまだなの！デイベインブレード！」

今度はなのが木に近づき杖を縦に下ろしながら砲撃を放つ。

「ぐあ！」

木は攻撃で地面に叩きつけられる。

「トドメのデイベインバスター！」

なのはは、真上に移動をし再び砲撃を放った。

「ぐああああ！」

木は耐えられなくなり光になって消滅した。

「楽勝なの♪」

なのはは、笑顔で終了宣言をした。

次にアリサ。

「ハアア！」

バゴン！

「ぐあ！」

アリサは木にナックルを決め、宙に浮かせた。

「まだ終わらないわよ！」

今度は、竜巻を描くように木の周りを飛んでいると。

「X Stream！」

炎の竜巻が木を呑み込む。

「ぐあああ！」

木はモロにくらい、燃えてきている。

「これで終わりよ！X Machine gun！」

アリサが、拳を前に振るう度に一握りサイズの炎が木を襲う。

「ぐああああ！」

木は無数に来る炎を直撃をし消滅した。

「燃やしがないわね！」

余裕な態度を見せ終了したアリサ。

次にすずか。

「ヤアアア！」

刀を振るい真空の刃で木を追い詰めていく。

「ぐっ！」

木は身動きが取れないようだ。

「今！旋風陣！」

今度は、鞘を振るうと木を囲むように風のドームが出来上がり木を閉じ込めた。

「ぐうう！ぐあ！」

木は出ようとするが風が強すぎて出られないようだ。

「最後、決めるよ！」

キンっ！

刀を鞘に戻し居合いの構えをとる。

「ハアアアア！」

すずかの周りが風が吹きそして刀をおもっいきり抜いた。

「風天龍！」

風で出来た龍が木に襲いかかった。

「ぐあああ！」

木はバラバラに切り刻まれ消滅していった。

「ちょっとやり過ぎちゃったかな？」

すずかは心配しながらも無事に終了した。

「……………」

「俺、戦ってないじゃん！」

戦いは終わりジュエルシードも無事終了した。

だがユーノは、自分だけ戦えなくて不満のようだ。

「いいの！言ってもわからないユーノ君が悪いの！」

「だから何だよそれ！俺学校で何かしたか！」

「本当に何も気づいてないのユーノ君？」

「みんなに見られてたのはわかったぜ！」

「呆れた…。アンタってホント肝心なところで、鈍いわよね？」

「だから何なんだよー！」

どうやら自分の事になると、とことん無頓着になるユーノであった。

「はあゝもういいから帰ろうぜ？」

ユーノが面倒くさくなり話したすと。

バアアアアアア！

突然ものすごい音を立てながら誰かが結界を張った。

「！！、この結界はまさか！」

「ユ、ユーノ君どうしたの！それよりも何が起きてるの！」

「ユーノ君の結界じゃないみたいだね。一体誰が！」

「ちょっと姿を現しなさいよ！どう言うつもりなのよ！」

ユーノは何かに気づき、なのは達はただ驚くだけだ。

「全く相変わらず君の周りは騒がしいな？」

「「「！！」」」

突然、暗闇の中から声が聞こえてきた。

なのは達は驚き、ユーノは静かに見ている。

そして暗闇の中から声の主が姿を現した。

「それと相変わらず女難が酷いみたいだな、“ユーノ”。」

現れたのは黒い衣装を身に纏い、首にぶら下げていたネックレスの

真珠が怪しく光っている。

「うるせえ。人の気にしている事を言わないでくれるか？ “クロノ”。」

ユーノは、懐かしい物を見るような目で答えた。

まだ、夜は続くようだ。

続きは何でも気になるものだ！（後書き）

反省会

「おい、最後の…。」

「何も言うな…。」

「何か凄い緊迫な空気だったぞ？」

「色々と事情があるんだよ。」

「そうかよ。また次回だ！」

「良ければお楽しみに！」

KYはどっちでしょう!?(前書き)

C o u n t ジュエシード 現在ユーノ達を持っている数は

十六個!

KYはどっちでしょう!?

「クロノ。こういう展開、何て言うか知ってるか？」

「感動の再会、とでも言いたいのか？」

「おお。わかってんじゃねえか！」

晩わく憑依者ユーノだ。開始早々からシリアスな空気になってるぜ。

「ユ、ユーノ君!あの人誰なの!？」

なのはが質問してきた。

「俺の昔からの知り合いだ。腐れ縁、悪友みたいな感じだな。」

「本当にそれだけ、ユーノ君？」

今度はさすがだ。

「どう意味だ？」

「簡単よ。アイツから途轍もない、力、と、殺気、を感じるからよ
!」

ほう。三人ともクロノの殺気だけではなく力にも気づいたか。

「まあ、後で詳しく話す。今はクロノと戦うから下がっていてくれ
...。」

そう言った瞬間…。

バツ！

バシン！

クロノが俺の目の前まで移動し顔目掛けて蹴りを放ったが、俺は片腕で止めた。

「おいおい、人が話しているのを邪魔するのは、マナーがじゃないか？」

俺は、皮肉ぽく言った。

「僕が攻撃するとわかったから、彼女達を下がらせんたんじゃないのか？」

「チツ…。ピンポイントに当ててくるなお前。」

向こうにも皮肉で返されてしまった。

「後、何時までも人の足を持たないでもらおうか！」

そう言いクロノは足を持れたまま飛び、反対の足で横蹴りを顔に構してきた。

「ぐっ！」

俺はその攻撃を右腕で受け、横に軽く跳ぶ。

「「ユーノ（君）！」」

三人は心配になり近づこうとするが。

「たく、痛いなおい。俺じゃなかったら首を持って狩れてるぞ？」

ユーノは余裕そうだ。後、手で近づくなとサインを送った。

「防いだんだから問題はない。」

クロノは何も気にしていないようだ。

「そうだ、な！」

今度はユーノが近づき左手で横殴りをする。

「くっ！ハッ！」

クロノは、何とか伏せて避け、そのまま左拳をユーノの顎に目掛けて攻撃を仕掛ける。

「フッ！」

だがユーノは、ギリギリな所で後ろに倒れバクテンをし避けた。

「グァ！」

その勢いで、クロノの顎に蹴りを決めた。

「まだまだ!」

ユーノは直ぐに着地をしクロノに目掛け右足で前蹴りをする。

「フッ!」

クロノは直ぐに体勢を立て直し左手で、打ち払う。

「ハアア!」

その流れで右肘でユーノの胴体を狙う。

「フッ!セヤッ!」

だがユーノは、右手で叩き落とし左手を開きクロノの腰に攻撃した。

「ぐあっ!」

クロノのは、攻撃をくらい後ろに下がってしまう。

「うおおおお!」

ユーノはそれを見逃さず、軽く跳び右足で横蹴りを放つ。

「ぐああああ!」

攻撃は見事に顔に決まり、吹き飛ばされ地面を転がっている。

ギャラリー視点…。

「二人ともスゴ過ぎるの…。」

「なんかアクションシーンみたいだったね…。」

「それをやったのけるアイツらは、何なのよ…。」

あまりにも本場の戦闘をみて見惚れている事しか出来なかったようだ。

またユーノ達…。

「くっ…。相変わらずの戦闘センスだな。」

クロノは、攻撃された所をさすりながら立ち上がった。

「クロノもな。俺の相手をしてるんだから、相当の経験がないとついて来れないぜ?」

「フツ…。師が優秀過ぎたせいじゃないのか?」

「へえ…。その師ってヤツに会ってみたいもんだぜ!」

やけに芝居がかったように軽口を叩くユーノ。

「どの口で言っている?それより次は本気で行くぞユーノ!」

首に掛けてあったネックレスをとるクロノ。

「上等!また返り討ちにしてやる!」

ユーノは細長く鰐のない剣を取り出し構えた。

また緊張が走り、なのは達も緊張しながら見守っている。

だが次の瞬間…。

「ハハ！死ね！サブキャラ共がああ！」

ダダダダダダダ！

突然上空からユーノ達が銃撃された。

「「「なっ！」」」

三人が気づいた時には、ユーノ達がいた場所は砂煙が舞い姿が確認出来ないようだ。

「やったぜ！淫獣とKYを二人仕留めた！俺の邪魔をするヤツはいない！」

そう言い高笑いをする謎の装備をした男がいた。

「な、何て事をするの！ユーノ君達が死んだらどうするの！」

なのはが怒りをむき出しにしながら聞く。

「おいおい、なのは。俺はお前を助けてやったんだよ？」

男は地面に着地をし装備を解いて話し掛けてきた。ついでにイケメンだ。

「どう言う意味なの！ユーノ君は何にもしてないの！」

「可哀想に、あの淫獣に洗脳されてるんだな。」

男は全く聞いておらずまだユーノを馬鹿にしている。

「ちょっとアンタ！これ以上ユーノを馬鹿にすんじゃないわよ！」

アリサはユーノを馬鹿にされとても腹が立ったようだ。

「おおーアリサ！そんな事より俺の事を褒めてくれよ！ツンデレ的に言ってもらえれば、もっと嬉しい！」

「ふざけんじゃないわよ！後、気持ち悪いのよ！」

「はは、ツンデレだなー♪」

「いい加減にして下さい！何故ユーノ君達を攻撃したんですか！」

何時も大人しいすずかも怒りを隠せないようだ。

「おおー♪怒ったすずかも可愛いぜ♪」

悪びれた様子もなく笑顔で返す。

「いいから質問に答えて！後、全然嬉しくないです！」

「はは、それは簡単。ただ邪魔なんだよ！」

男は、大声を出して言った。

「ふざけないで！ユーノ君はとても大切な人なの！」

「そうよ！アンタにどうこう言われる筋合いはないわ！」

「そうだよ！今すぐさっき言った事を訂正して下さい！」

最後のが効いたのか、三人は完全に男を敵視した。

だが男は…。

「心配しなくていんだぜ三人とも？もう淫獣とKYから守ってやるからさ！」

男はまだ事の重大さに気づいていないようだ。

「それより今夜は、熱く語ろうぜ！」

男は笑顔でなのは達に近づいてくる。

三人は気持ち悪いと思いながら、武器を取り出し構えると突然。

「おゝい！何か死んだふうに言わないでもらえるかー！」

「生憎だが、僕達は傷一つついていないぞ？」

砂煙が晴れ、何事もなかったような感じで出てきた。

「な、何iiiiiiiiい！」

男は信じられないような反応を示している。

「全く、楯を張ってなか「ユーノ！」うお！アリサ！」

ユーノが愚痴をもらしている時にアリサが抱きついてきた。

「この馬鹿！心配かけさんせんじゃないわよ！」

軽く泣きながらアリサが言ってくる。

「…悪かったよ。すまん…。」

そう言いアリサの頭に手を置くユーノ。

「ユーノ君！無事なら無事って直ぐに言ってほしいの！…心配したの。」

なのはは、ユーノの服を掴みながら言う。

「でも、本当に良かった…。ユーノ君が無事で…。」

すずかは、ユーノの背中に抱きつく。

「ありがたいな、三人とも…。」

ユーノは本気で心配してくれた三人に心から感謝した。

「テンメエー淫獣！人の嫁と何してやがる！空気を読め！」

なのは達が、ユーノの事ばかり心配して気にいらないうだ。

「“空気が読めない”のは、君の方だ！」

どかつ！

クロノが男に向けて左足で蹴り飛ばした。

「ぐあああああ！」

男は反応する事が出来ず直撃した。

「君が入ってきたおかげで、戦いが台無しだ！オマケにあの雰囲気から始めるのも無理だ！」

どうやら戦いを邪魔された事を怒っているようだ。

「う、うるせえ！KYが俺に説教たれんじゃねえよ！」

「泣き事など聞きたくないな。君を連行する！」

クロノは痺れを切らしたのか感情的になってきている。

「い、いいのか！何にも証拠がないんだぞ！」

「君は馬鹿か？僕が関係者と言う事だけで、銃撃をし殺そうとした。立派な犯罪者だな君は？」

見下すような目で、クロノはつげる。

「ぐうっ！それがテメエら管理局のやり方かよ！」

「んっ？何故、僕の所属している所がわかる？まさか組織を狙っての犯行だったとは…。」

「あっ！しまった！い、今のは…！」

男は、自分が過ちを言った事に気づいた。

「君はどうやら重罪人のようだ。極刑は、まのがれないな？」

嘲笑うクロノ。

「わ、笑うな雑魚如きが俺を見下すなあああ！」

男は、ベルトを取り出し腰に巻いた。次に携帯を取り出し入力を入れる。

〔3・1・5〕

『Standing by』入力コードを入れ、携帯を投げキヤッチすると。

「変身！」

ドライバーのバックル部・フォンコネクターにフォンを突き立て左側に倒す。

『Complete』

電子音が鳴り響くと男の周りは青い閃光で囲む。

「どうだ！この帝王のベルト、サイガの力でまずお前をかたずけてやる！」

白いスーツに青い線があり眼の色は紫色の戦士がいた。

「あれは、前にユーノが見せた仮面ライダーか…。相手にとって不足はない！」

クロノは、臆する事なく堂々とし、再びネックレスを取り出した。

「さあ！僕達の勝負を邪魔した変わりには、高くつくぞ！」

ネックレスに魔力を込め、頭上に円を描く。

クロノの頭上が怪しく光り、“黒い鎧”が出現しクロノに装着した。

「な、何だ。その姿は…。」

クロノが装着した鎧は、威嚇するような金色の瞳をした恐悪な“狼”をモチーフにした正に暗黒の騎士がいた。

【暗黒魔戒騎士・KIBA】

「さあ、始めよう！来い！【黒氷剣】！」

クロノは刀身が黒く鏢のない細長い剣を取り出した。

「う、く、来るなあああ！」

クロノの鎧の雰囲気と殺気で、もう精神が来ているようだ。

「死にやがれえええええ！」

ダダダダダダ！

再び上空に上がり銃撃をする。

「芸がない！」

ガキンガキンガキン！

クロノのは、銃撃を全て剣で弾き返した。

「なら、これならどうだ！」

ブーーーーー！

超高速で飛び、翻弄しようとするが。

「ハアッ！」

ブンブンブンブン！

クロノは、剣を投げるとサイガのフライングアタッカーを攻撃した。

「うああああ！」

攻撃は見事に当たりサイガも落ちていき、剣もブーメランのように戻った。

「全く、正直期待はずれだ。その実力で僕達に喧嘩を売ったのか？ お目出度いヤツだな、貴様は…。」

もはや言いたい放題なクロノだ。

「調子に乗るなあああ！」

サイガは、トンファーを取り出し襲いかかってきた。

「うおおおおおおお！」

『Exceed Charge』

サイガのベルトから青い光りが両腕に走りトンファーが光り輝く。

「サイガスラッシュ！」

技の名前を叫び、両腕で攻撃した。だが…。

バキン！

「ぐああああ！腕がああああ！」

逆にサイガの方がダメージをくらい、トンファーも破壊された。

「ああ言い忘れていたが、この鎧は普通ではないんだ。下手に手を出したら死ぬぞ？」

注意はしているが、どうでもいいように語るクロノ。

「（可笑しいだろ！何だよあれ！あんなものがあつたのかよ！）」

サイガは、戦意喪失まで陥ってるようだ。

「もういい。君を早く連行し、ユーノ達をついでにアースラまで連れて行くか。」

クロノは、右腕で剣を縦に構え左手で剣をなぞっていくと、黒い冷気が剣を囲む。

「ま、待つ…！」

サイガは、何とか助かろうとするがクロノは聞こうとしない。

「凍煉氷装！」

クロノは、サイガにXを描くように斬りつけた。

「ぎやああああああ！」

サイガは、もろにくらい変身も解け気絶した。

バアアアアアアン！

ベルトも耐えられなくなり大破した。

クロノは、鎧を解き月夜をバックにこう言った。

「闇の吹雪に抱かれて“眠れ”！」

—————

「えっ！ユーノ君の弟子なの！？」

現在ユーノ達は、クロノが乗ってきた戦艦の中にいて、司令官に会いに行く所だ。

「そう。数年前に色々あってコイツを鍛えたんだ。」

「でも、何でクロノはユーノを襲ったのよ？」

アリサはクロノに質問する。

「出会いが最悪なうえに、ユーノとは仲良くなれないからだ！」

「教えてもらったのに、凄く毛嫌いしてるね？その出会いも気になるし。」

「気にすんなよすずか！」

何気に意気投合しながら話しを進めて行った四人であった。

「ここがそうなのか？」

目的地にたどり着いた。

「ああ。くれぐれも失礼ないようにな。」

クロノが釘を差す。

「わかってるよ失礼します。」

ユーノが先に入り、ある人を見たら。

「いらっしゃい♪私は、リンディ「失礼しましたー!!!」あら？」

勢いよく扉を閉め立ち去ろうとする。

バシッ！

「何をしているユーノ？場所は合ってるぞ？」

クロノが掴み疑問を出す他の三人も同じ気持ちのようだ。

「俺の女難が叫んでいるんだ！あれは、ヤバいと！逃げなければ駄目だと叫んでいるんだ!!！」

一目見ただけで、女難のレーダーを感じたようだ。

「「「(どんだけ!）」」」

三人娘は同時に思ったらしい。

「ユーノ…。」

ポン！

クロノが肩を叩いてきた。

「母さんを幸せ「死に晒せええええ」ぎゃあ！」

とんでもないボケを構してきたようだ。

「てか、今の母親なのか！若過ぎるだろ！」

プレシアさんと同じものを感じるんだけど！

「それより、式はいつにするんだ？」

「お前もう黙れよ！自分の母親が、自分より年下のヤツが結婚んしていいのか！」

「んっ？母さんを幸せにしてくれるならいいんじゃないか？……………面白そうだし。」

「最後のが本音だろ！やっぱりふざけてやがったな！」

「失敬な！僕は至って真面目な解答をしている！」

「それがヤバいって言ってんだよおおお！」

扉の前で大喧嘩をする二人であった。

「あの二人、なんだかんだで仲がいいの。」

「何かお互いに遠慮せずに話し合える友達みたいね。」

「本人達の前で言ったら絶対違うって言うと思うけどね。」

冷静に分析する三人娘がいた。

まだ、夜は続くようだ。

KYはどっちでしょう!? (後書き)

反省会

「またでたな転生者…。」

「ろくに活躍もせずにやられたがな…。」

「可哀想に。もう少し喋らせれば良かったろ?」

「お前が言うど皮肉にしか聞こえないぞ?」

「はいはい。また次回だ!」

「良ければお楽しみに!」

大人と天然って怖い。(前書き)

C o u n t ジュエルシード 現在ユーノ達を持っている数は

十六個！

大人と天然って怖い。

「アナタがユーノ・スクライア君ね？」

「はい…。」

憑依者ユーノだ。やっぱりこのリンディさんって言う人が苦手だ。

「堅くならなくてもいいのよユーノ君？ 楽にしていいいのよ？」

何か隠し事をしてても何でもわかるという雰囲気を出しているようで…。

「なら質問いいか？」

「何かしら♪」

何故笑顔なのかスルーしよう。

「何で俺達、‘二人っきり’になってるんだ？」

そう何故か俺だけが、呼ばれ二人っきりになってしまっている。

「それはね、ユーノ君に聞きたい事があるからよ？ 色々ね♪」

頼むから笑顔のまま迫らないでもらえるか。

「お、お手柔らかに…。」

顔を引きつりながら俺は、答えた。

一方なのは達…。

何やら人を集め話し込んでいるようだ。

「じゃあ、君達もユーノに鍛えられたのか？」

「そうなの！ユーノ君の役に立ちたくて！」

「本当にそれだけか？」

「ど、どう言う意味よクロノ！」

「いや何、てつきりユーノに惚れて手伝ったのかと思ってね？」

「まあ、確かにそれもあるんだけどね／＼／＼。」

クロノの発言に赤くし始める三人娘。

「クロノ君！聞く事がストレート過ぎるよ！」

「んっ？エイミィ。どうした何も間違っていないと思うのだが？」

しれっとして答えるクロノ。どうやら本気で聞いているらしい。

「はあゝ。クロノ君がこんなに天然だとは…。」

呆れて声をだすエイミィ。

「まあ、反応を見る限り当たっているようだかな？」

話しをまたなのは達に戻すクロノ。

「ううゝ。じゃあクロノ君にも質問なの！」

なのはが、恥ずかしくなり話しを聞き出した。

「何だ？ ユーノの今まで女難の数々を教えてほしいのか？」

「激しく気になるけど違うの！ クロノ君は、誰か好きな人いるんですか！？」

「えっ、ちょ！なのはちゃん！ そう言う事は聞かないで！」

何故かクロノではなくエイミーが反応をした。

「何でエイミーさんがそんなに慌ててるのよ？」

アリサが不思議になり質問した。

「うう。それは…／＼／＼。」

「怪しいですねゝ。クロノ君何かあるの？」

さすがにクロノに質問する。

「エイミーは大切な人だ。後、好き人はいないな。」

真顔で凄い事を宣言した。

「もう！クロノ君／＼！」

エイミーは顔を真っ赤になりながらクロノを叩き出した。

「な、何だエイミー！どうしたんだ！？」

「何でもそこまで言ってるのに気づいてくれないの／＼！」

「何をだエイミー！わかるように説明してくれ！」

クロノは何もわかっていないらしい。

「そ、そんな事、私の口から言えるわけないでしょ／＼！」

「益々意味がわからないのだが？」

「察してよ！バカ！天然！鈍感！」

「言いたい放題だな君は？」

痴話喧嘩を始める二人であった。

「クロノ君って凄く鈍感なんだね。」

「エイミーさんは、既に被害に合ってるみたいね。」

「ユーノ君とは、違った女難を持ってるみたいだね。」

それを観察する三人娘であった。

再びユーノ達…。

「えっ！プレシアさんと知り合いなのか！」

俺はジュエルシードの事について話した後、何で俺をそんなに知りたいのか聞いたら予想外の答えが返ってきた。

「ええ♪旅行先でいい人に会ったて自慢されてたのよ♪」

何もう自慢してんだよプレシアさん。

「後、ユーノ君にとっても感謝してる事もあったそうよ？」

「何だよそれ？」

「娘を助けてくれたって泣きながら感謝してたわ。」

「！！、プレシアさんが？」

驚いたプレシアさんが泣いて語るなんて。

「元々あの旅行は、フェイトちゃんを元気づけるために、プレシアが考えたのよ。」

「そうだったのか…。」

何気に考えて行動してるんだな。

「結果は良好だったみたいね♪あんなに元気なプレシアを見れたんだから♪」

「前は、元気なかったのか？」

「もう、過ちを仕出かすかもしれない位だったわよ？」

「そこまで…。」

いい母親だなプレシアさん。娘の事を必死に考えて行動に移したんだから。

「だからユーノ君。私の方からもお礼を言うわ。ありがとう。」

頭を下げてお礼を言われた。

「……よしてくれリンディさん。俺は、何もしてない。」

「いいえ。ユーノ君は人して立派な事をしたのよ。友人とその娘を笑顔にしてくれたんだもの。」

「気づいたの向こうの方だ。俺は、褒められるような事はしていない。」

俺はただ、伝えただけだ。もしかしたら答えを見つけられなかったかもしれないな。

「フフっ♪」

リンディさんが突然笑い出した。

「何だよ？」

「聞いた通りにユーノ君は、素直じゃないみたいね♪」

「んっ？プレシアさんそんな事まで、言ったのか？」

「ええ。自分が褒められるような立場になると素っ気なくなるって。」

プレシアさん、余計な事を言わいでほしいな。

「はあゝ。もう勝手にしてくれ。」

「ええ♪そうさせてもらうわ♪」

ユーノは面倒くさくなり折れた。リンディも笑顔で承諾した。
—————

「ユーノ君。……私の夫になってみない♪」

あの後、休憩を入れた後にまた別の話題が出た。

「いや！色々とぶっ飛び過ぎてる何故に！」

何か嫌な予感…。

「ユーノ君は、とても素敵なお人とは聞いてたの。今日会ってそれを
確信する事が出来たわ♪」

言いながら笑顔で俺に迫ってくるリンディさん。

「なら何でそういう事になるんだよ！」

俺は後ろに下がっていく。

「ユーノ君の活躍と立ち振る舞いを見てたらとても気に入ったのよ♪」

うわっ！今のプレシアさんっぽいものを感じたぞ！

「でも、俺の事を全然知らないだろ？そんないきなり…。」

「これから付き合って、知っていけばいいんじゃない？」

「ごもつともな解答だ！」

って！認めてどうすんだよ俺！

「あら♪今のは、承諾として捉えていいのかしら？」

やべっ！壁に追い詰められた。後、顔近い！

「落ち着いてくれリンディさん！俺なんかよりもっといい人が…！」

「だ・か・ら♪これから付き合えばわかる事よ？」

リンディが顔を近づけて来る。

「うあああああああ！」

ユーノが断末魔のような声を上げると。

ドカーカーカーン！

扉が爆発した。

「ユーノ君助けに来たの！」

「ユーノ！今助けてあげるから安心しなさい！」

「リンディさんにユーノ君は渡しませんよ！」

戦闘準備が完了した三人が殴り込んできたようだ。

「あら？いい所だったのに。」

全く動揺しないリンディであった。

ユーノはと言うと。

「……………痛い。」

さっきの爆発のせいで壁に吹き飛ばされ、激突したようだ。

散々な一日だと思うユーノであった。

「……………」

「んじゃ、俺達今日帰るから。」

「ああ。ジュエルシードが出た時は直ぐに回収に迎う。」

話しがまとまり帰る所だ。なのは達は、まあ反省中だ。

「ユーノ君♪また、来るのを楽しみにしてるわね♪」

リンディが笑顔で言ってきた。

「リンディさんも反省してくれよ…。」

そういい呆れるユーノ。

「まあ、いいじゃないかユーノ。未遂で終われば問題ない。」

「当然だろボケクロノ！何かあった後じゃ遅いだろうが！」

「寧ろ面白「さようなら！」ぐあああああ！」

俺は、クロノを吹き飛ばし逃げるようにその場を去った。

こうして長い一日は、過ぎていった。

大人と天然って怖い。(後書き)

反省中

「最近大丈夫か？」

「まあ、良好とは言えないな。」

「ネタが尽きてきたか？」

「まあ。でも出来るだけ頑張るよ。」

「そうか。また次回！」

「良ければお楽しみに！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2841z/>

憑依者ユーノの物語

2011年12月31日20時50分発行